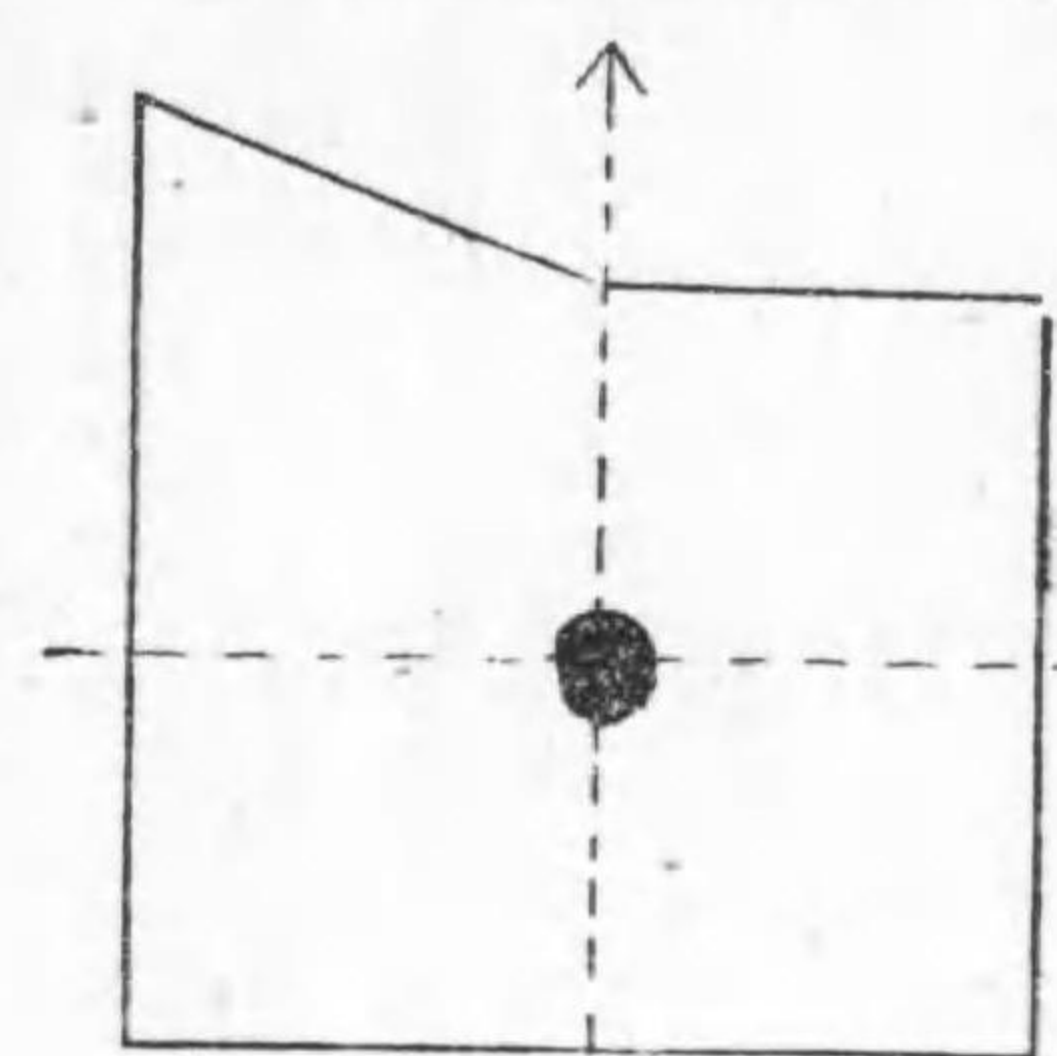
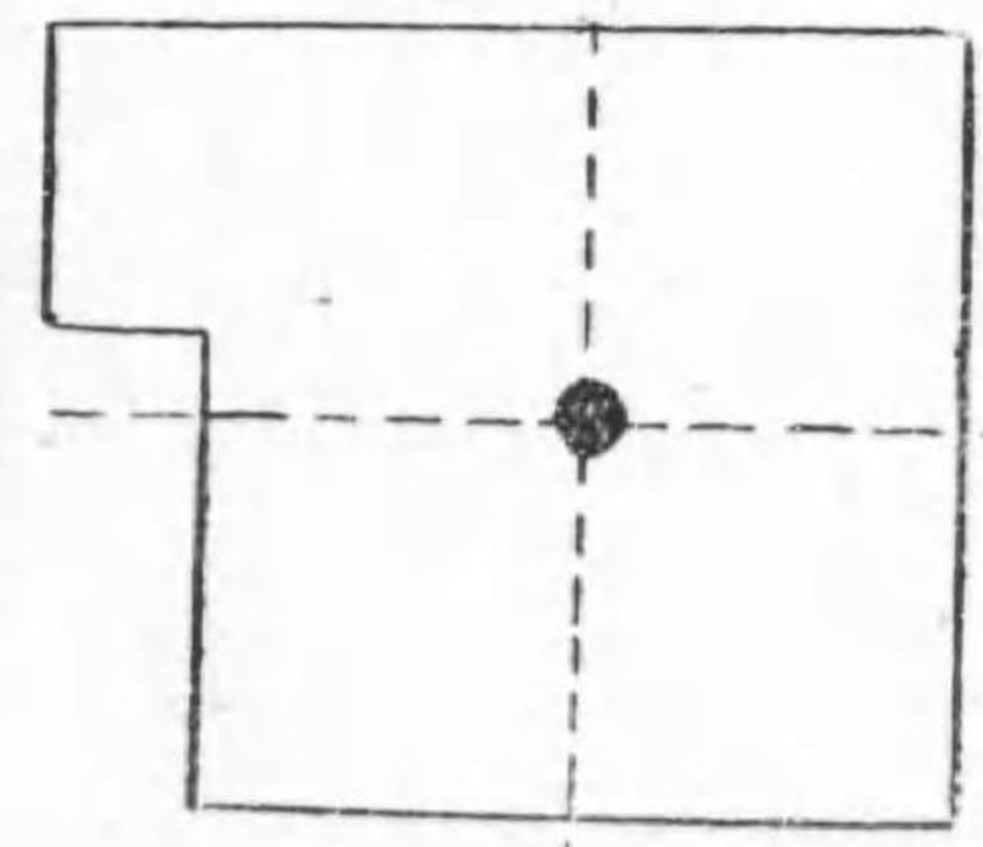


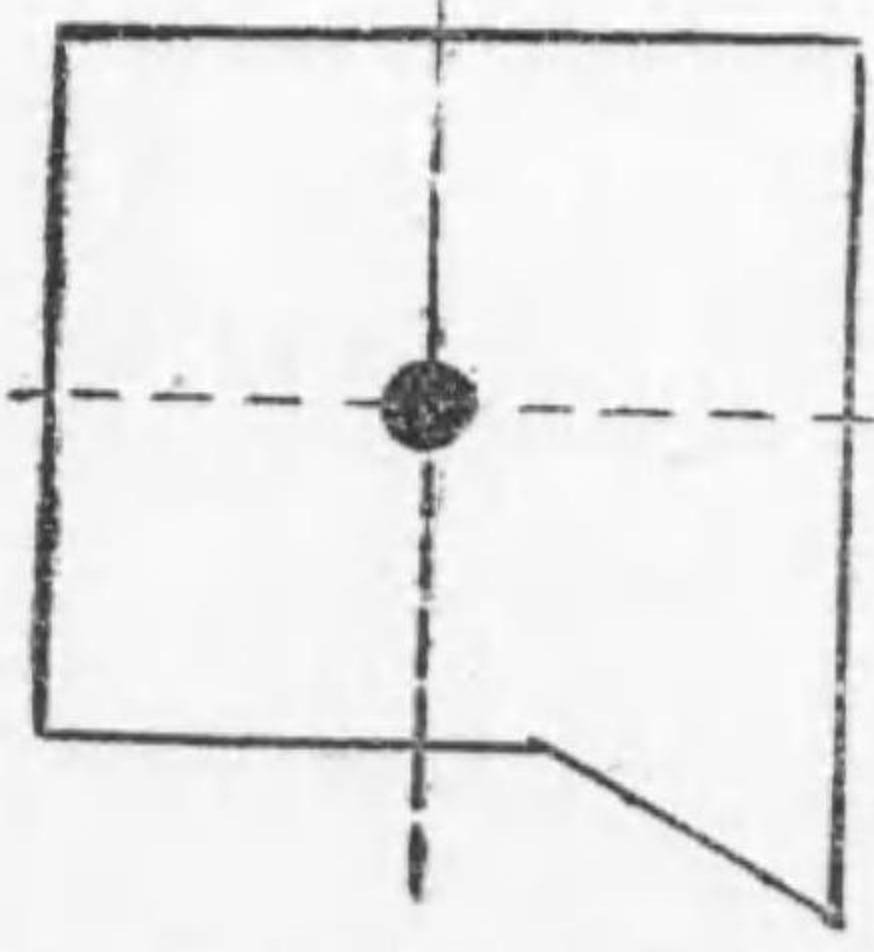
第一圖(乾張)



第二圖(戌張)



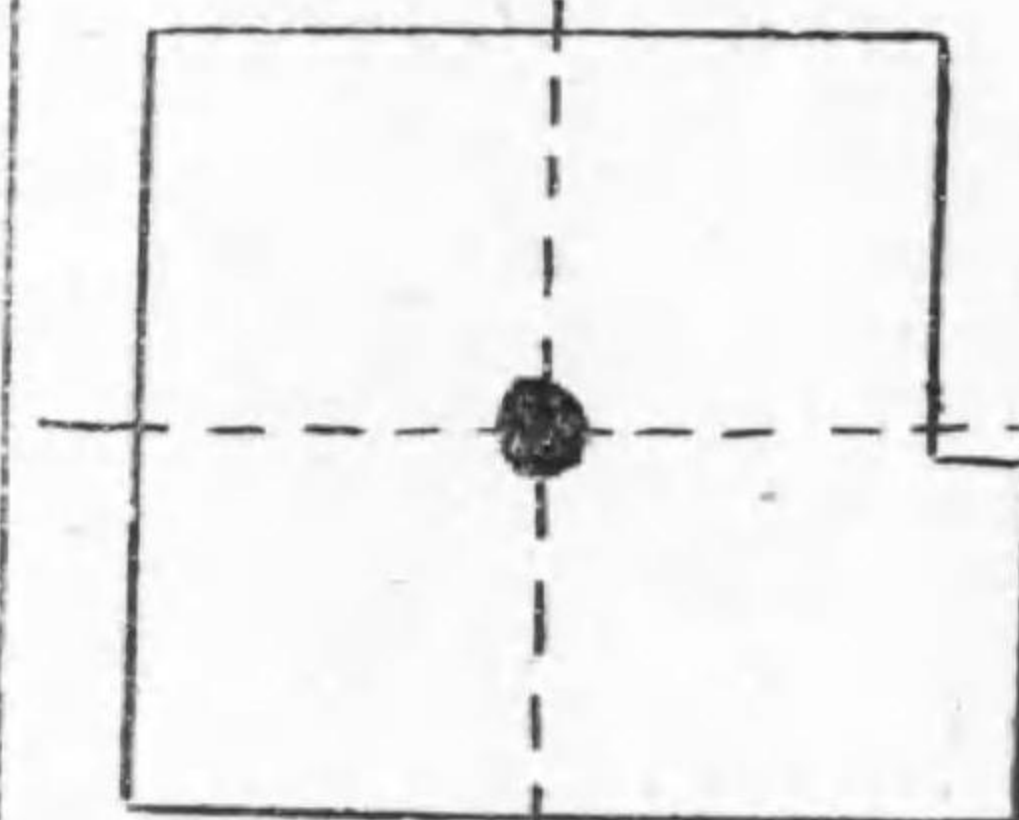
第三圖(巽張)



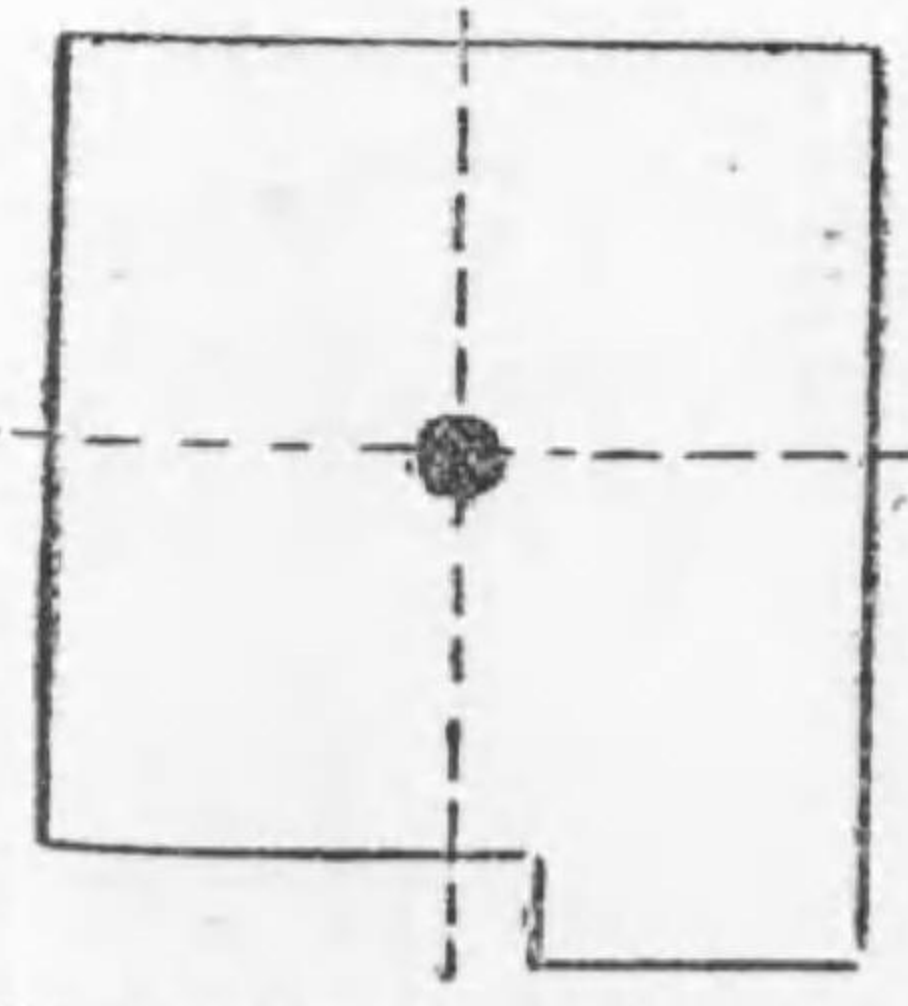
吉相の地相圖解

(一)

第四圖(辰張)

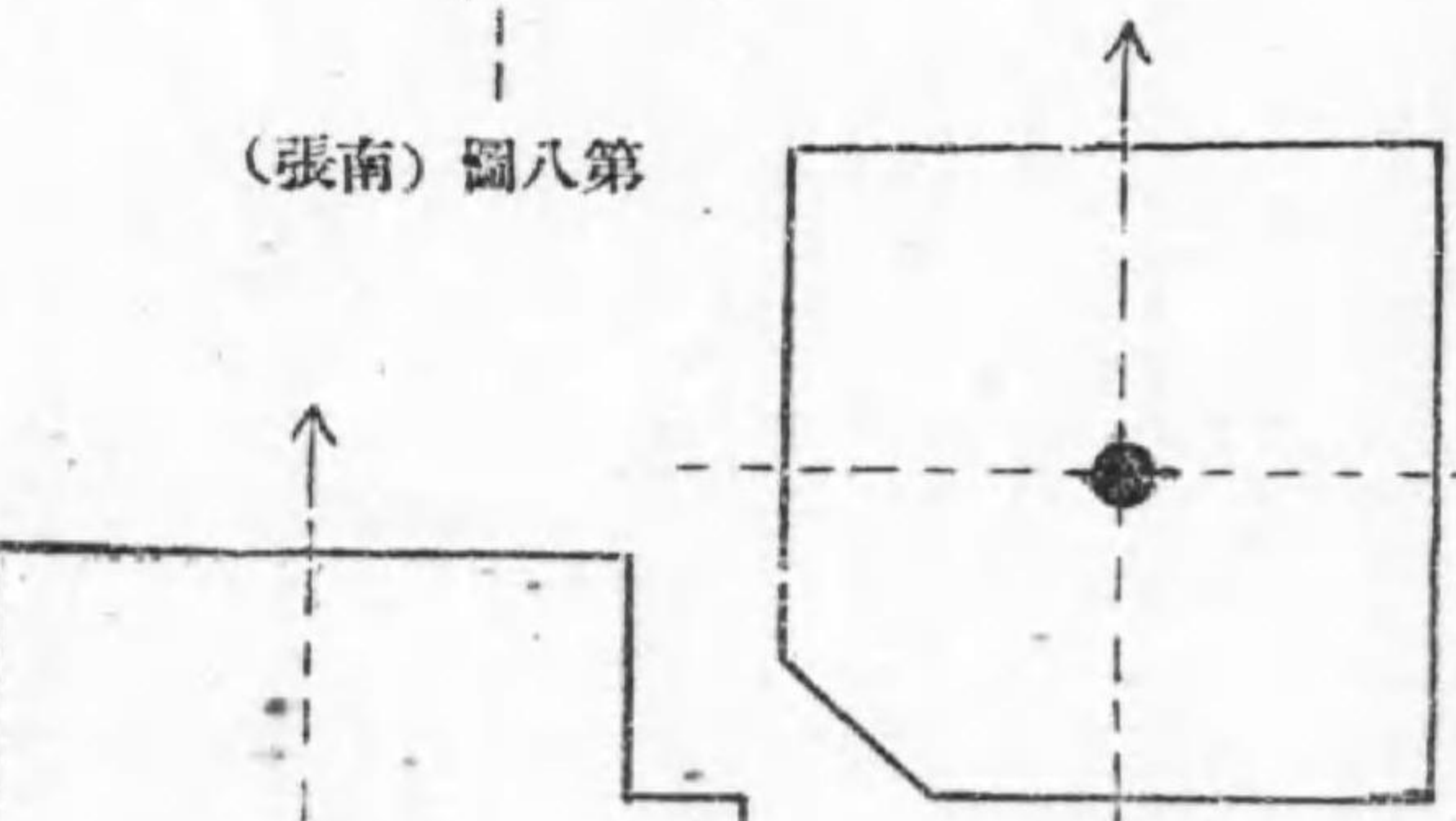


第五圖(巳張)



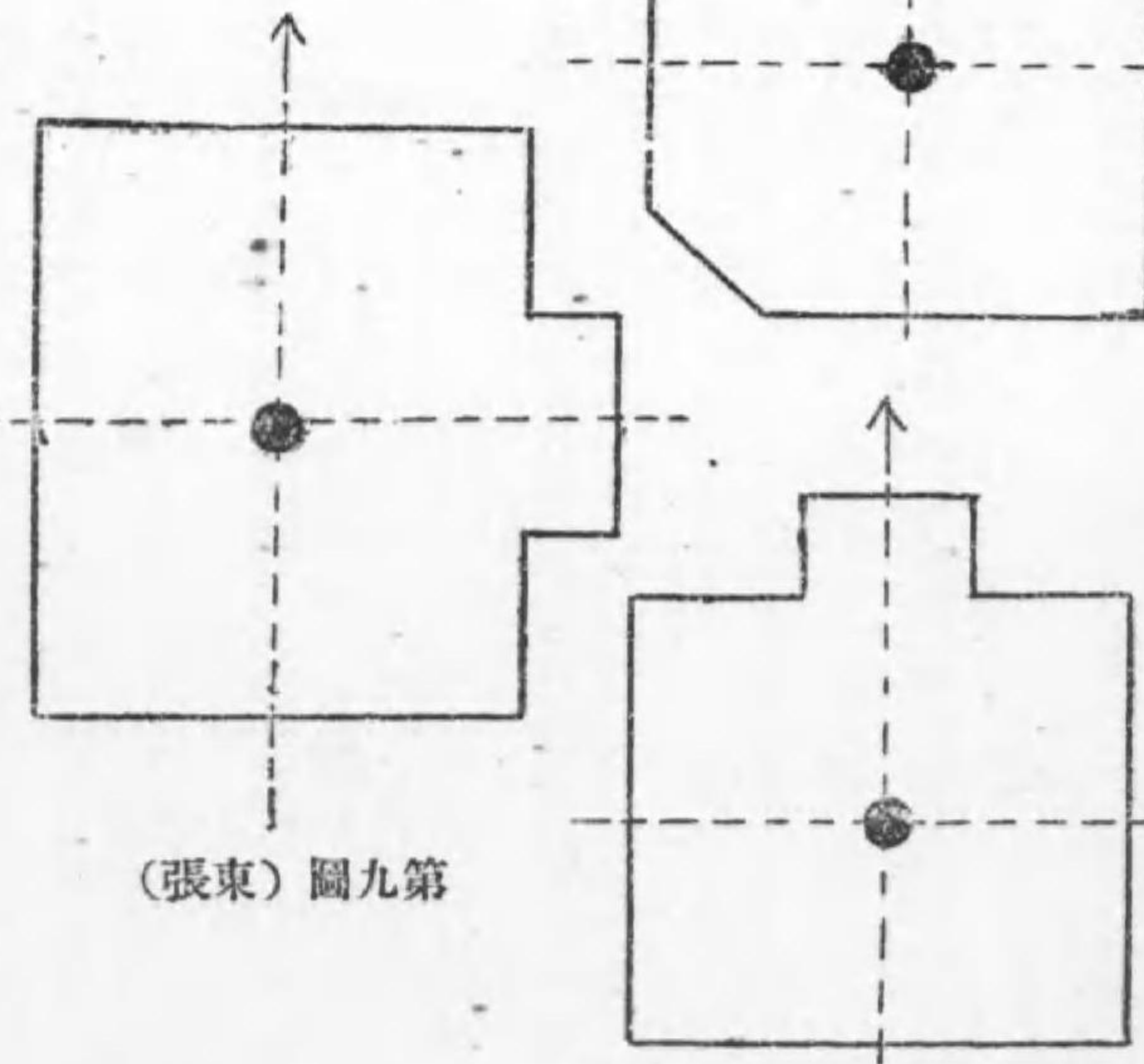
吉相の地相圖解(二)

第八圖(南張)



第六圖(坤缺)

第七圖(北張)



第九圖(東張)

### 第二節 凶相の地相

▲第一圖に示す如く、乾即ち西北の缺込んで居るのは凶相であつて、財寶保たず家運閉塞し、災害病難が多いとせられて居る。これと同様に乾全體でなくとも、戌の部位又は亥の部位だけが缺込んで居るのも亦凶相である。

▲第二圖に示す如く、艮即ち東北の張出して居るのは凶相であつて、家族に病人絶えず、財寶を失ひ家運衰微を招くとせられて居る。又艮の部位全體でなく、單に丑の部位だけが張出して居るのも、丑張と云つて凶相で家人に病難が多いとせられて居る。

▲第三圖に示す如く、艮即ち東北の缺込んで居る宅地に就いては、吉相とする説と、凶相とする説と二説あるが、予は地相はなるべく正しく整つて凸凹のないのが吉相であると考へるから、艮の部位も缺込んで居らない方が吉相であるとするものである。然し大した缺込みでなく少し缺込んで居るのは張出して居るよりは吉相である。

▲第四圖に示す如く、寅の部位の張出して居るものは、吉凶兩様の説があるが、これも予は前説せる如き理由で、少し位の張出しは差支へないとしても、餘り張出過ぎて居るのは凶相であるとする。

ものである。

▲第五圖に示す如く、丑の部位の缺込んで居るものにも色々な説があるが、矢張予は前説に基いて餘り缺込んで居らない方を吉相とするものである。

▲第六圖に示す如き地相は、一寸見ると辰張の吉相の様であるが、實は寅缺になつて居つて凶相である。かうした場合はよくあることであるから、特に注意を要する例として掲げて置く。

▲第七圖に示す如く、巽即ち東南の部位の缺込んで居るのは、巽張と反對で凶相であつて、家業衰微し物事通せず、家人に災害病難が多いとせられて居る。

▲第八圖に示す如く、寅の部位の缺込んで居るのも、艮缺け及び丑缺けの地相と同様に凶相で、發達幸福を得られないとせられて居る。

▲第九圖に示す如く、辰の部位の缺込んで居るもの及び、第十圖に示す如く、巳の部位の缺込んで居るものも、巽缺込みの地相と同様に凶相であつて、家人の災害病難を招き、福運を缺くとせられて居る。

▲第十一圖に示す如く、坤即ち西南の部位の張出して居るのは凶相であつて、家人に災害不幸多く家運の衰微を招き、特に主婦に災ひを生じ又は女主人となることが多いとせられて居る。又坤の

部位全體でなくとも、第十二圖に示す如く申の部位だけの張出して居るもの、第十四圖に示す如く未の部位だけ張出して居るものも、坤の張出しと同様に凶相である。

▲第十三圖に示す如く、東の部位の缺込んで居るのは、大凶と迄は行かないが餘り吉相でなく、家運に故障を招き易いとせられて居る。而して缺込みの度が強ければ強い程凶相の度も強くなるものである。

▲第十五圖に示す如く、坤即ち西南の部位の缺込んで居る地相に就いては、これにも吉凶兩様の説があるが、本篇第一節吉相の項第六圖に於いて説明せる如く、坤の一部が少しだけ斜めに缺込んで居るのは吉相であるが、この圖の如く餘り強く缺込んで居るのは凶相であつて、家運の衰微を招き病人が多く、殊に主婦に障りがあるとせられて居る。尙坤全體でなく、未の部位だけか又は申の部位だけが強く缺込んで居るのも同様に凶相である。

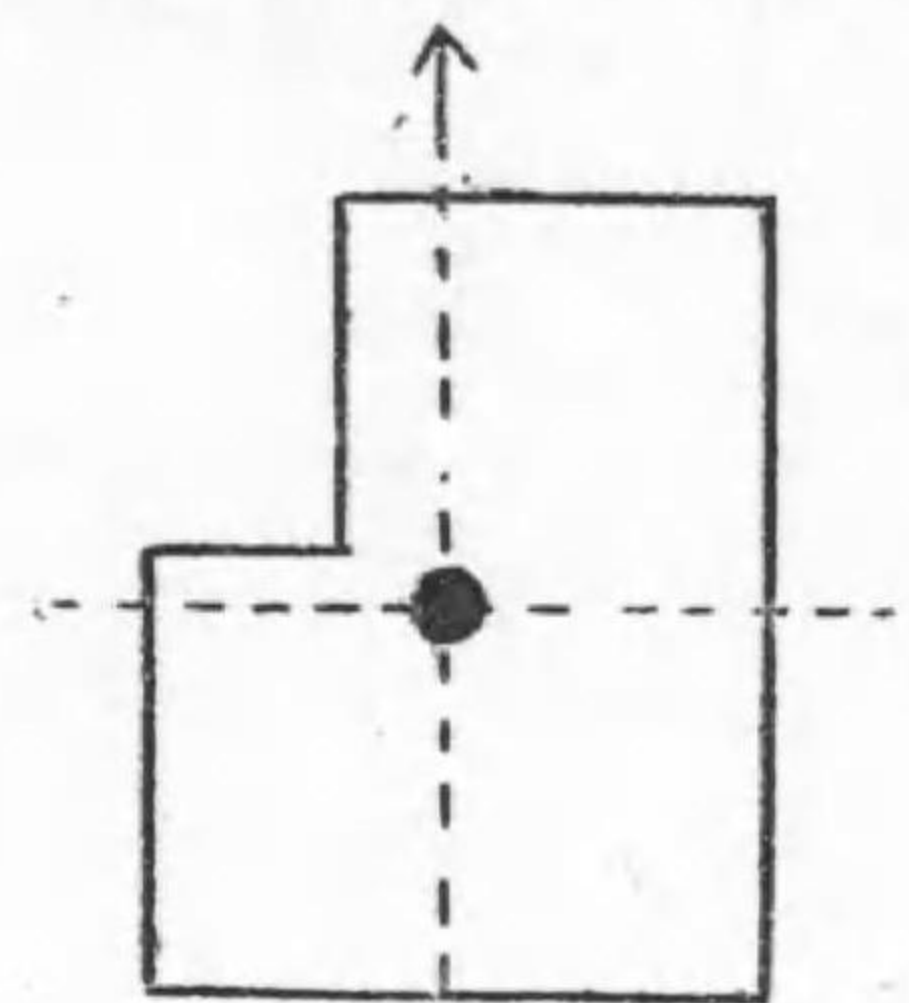
▲第十六圖に示す如く、南の部位の缺込んで居るのも餘り吉相でなく、殊に深く缺込んで居るのは凶相である。

▲第十七圖に示す如く、西の部位の張出して居るのは、少し位ならば差支へないが、強く張出して居るのは凶相であつて、家運衰微し特に女難口舌多く婦人に障りがあるとせられて居る。

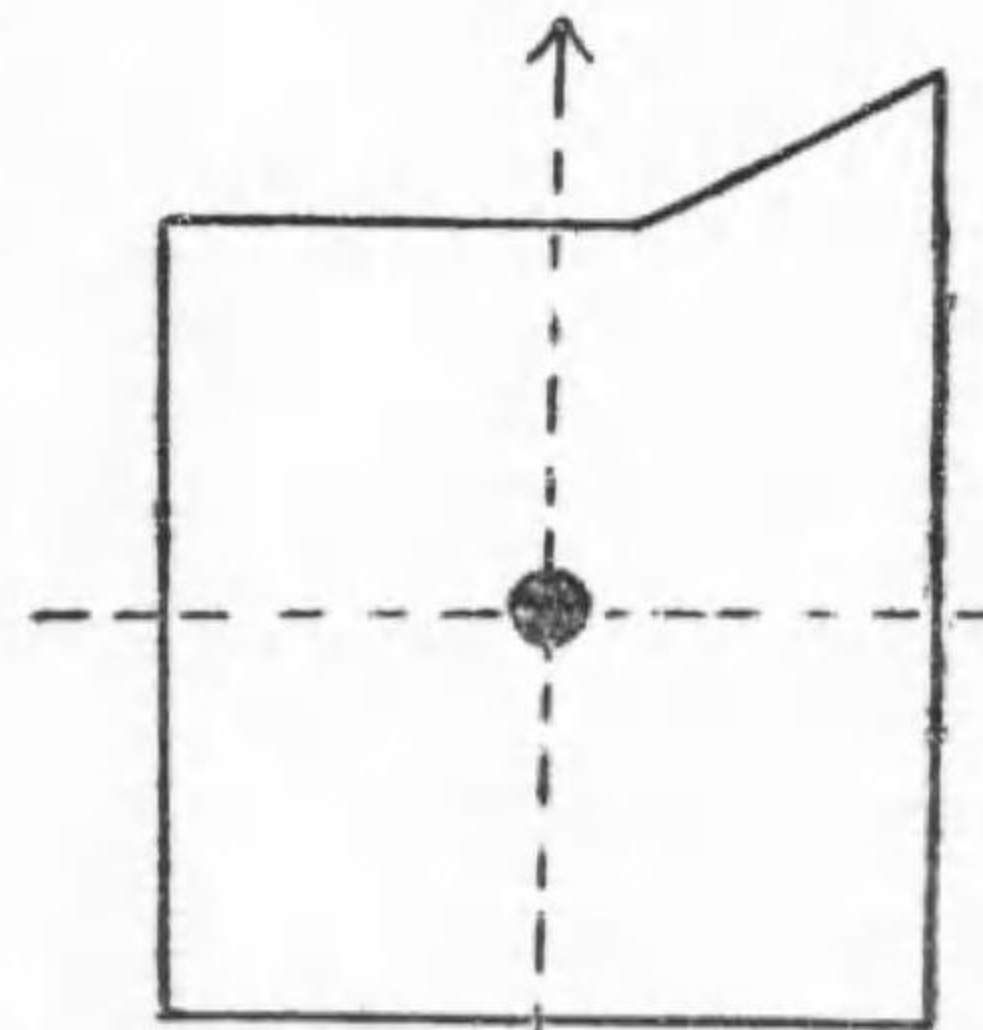
▲第十八圖に示す如く、西の部位の缺込んで居るのも凶相で、福運を失ひ色慾の禍ひがあるとせられて居る。

▲第十九圖に示す如く、北の部位の缺込んで居るのは凶相であつて、家業衰微し主人の威力を失うとせられて居る。

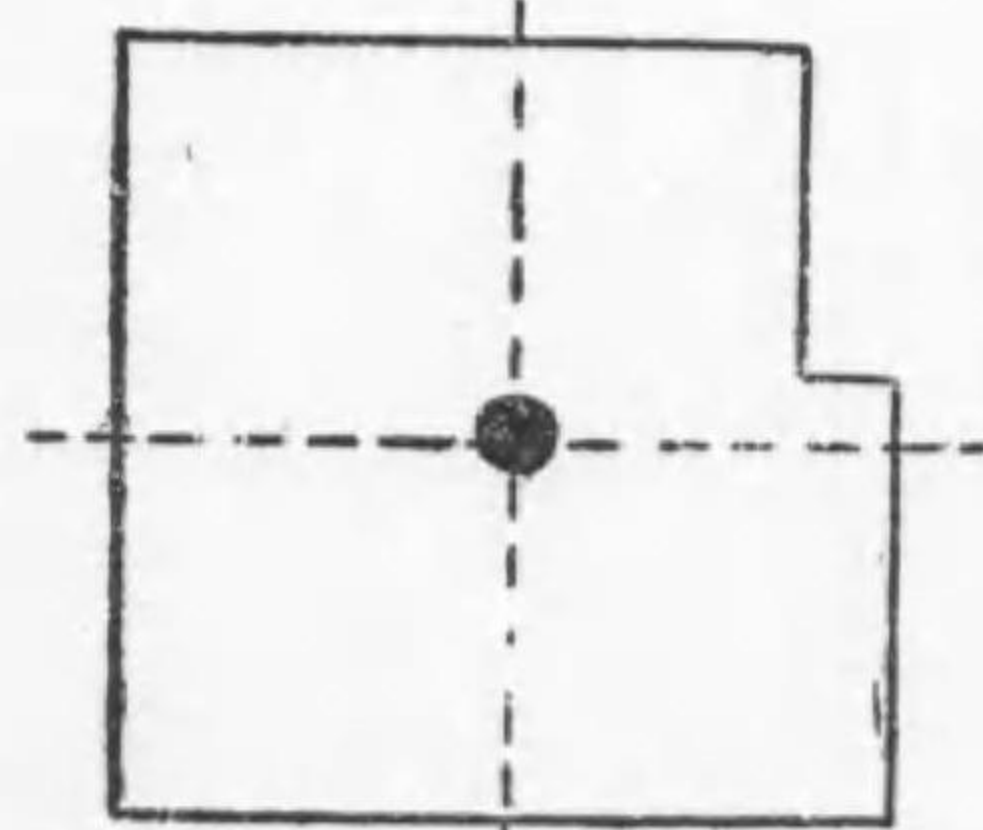
第一圖 (乾缺)



第二圖 (艮張)



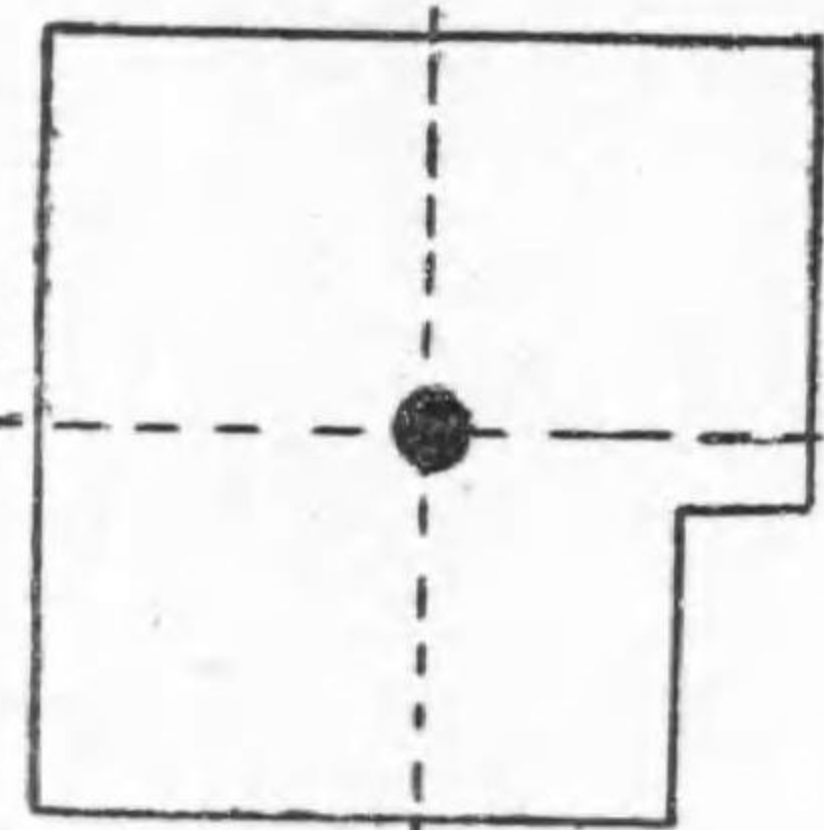
第三圖 (艮缺)



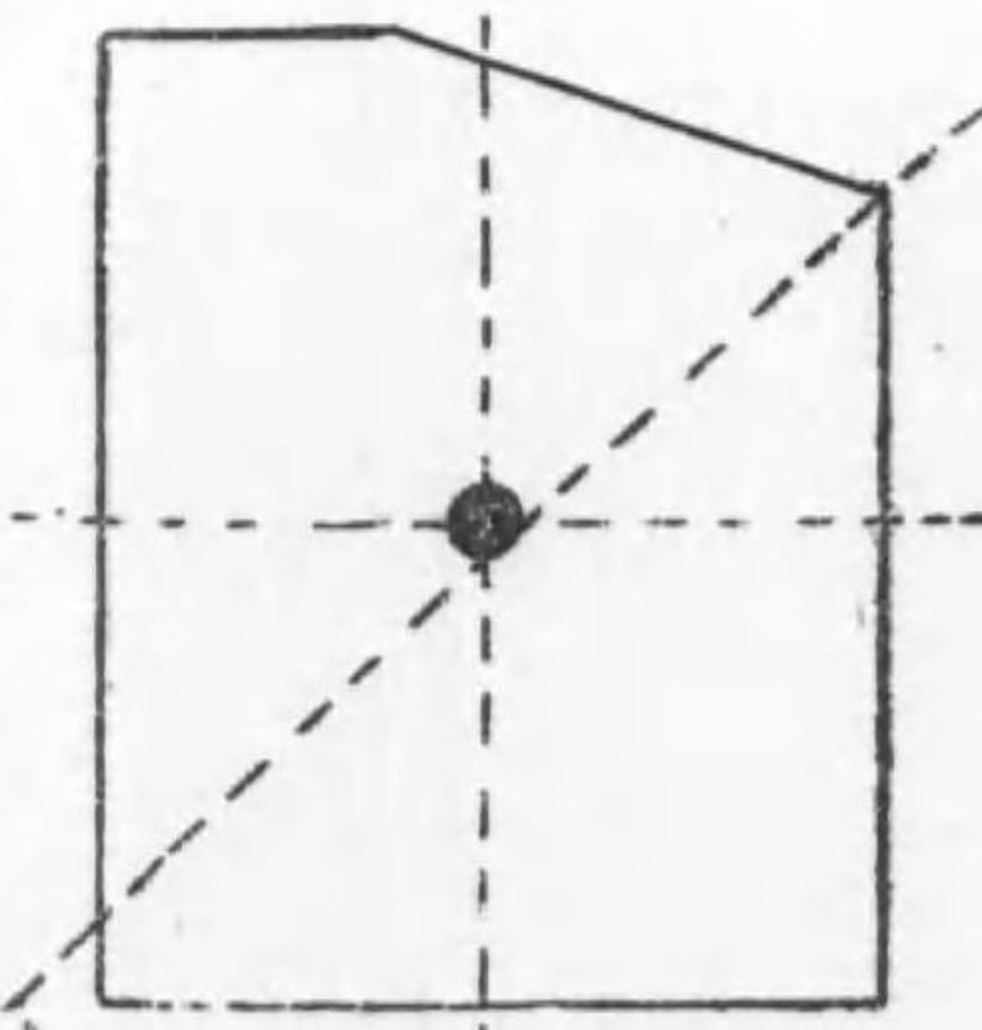
凶相地の相圖解

(一)

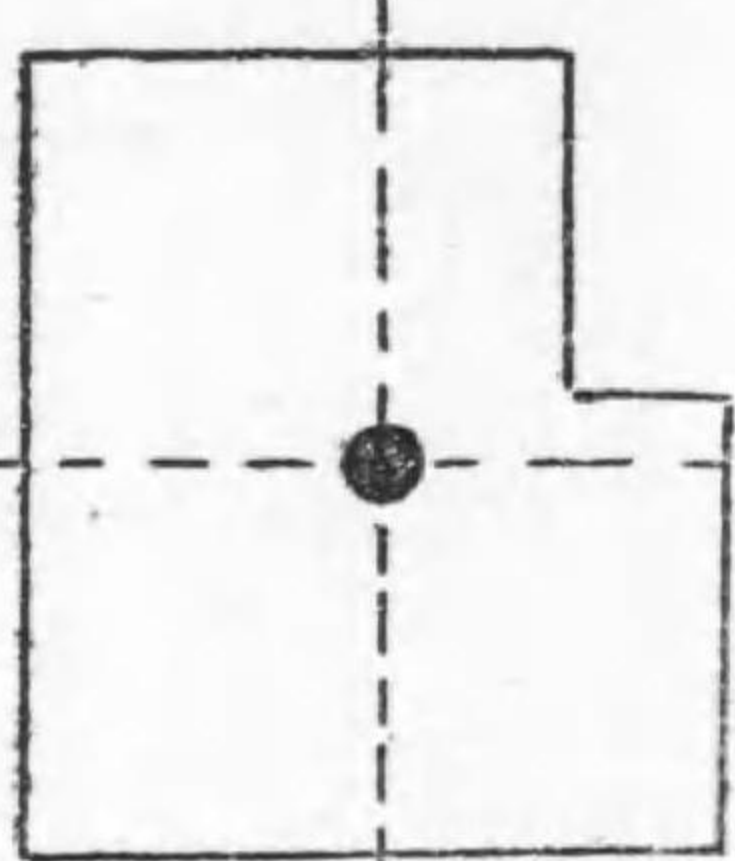
第四圖 (寅張)



第五圖 (丑缺)

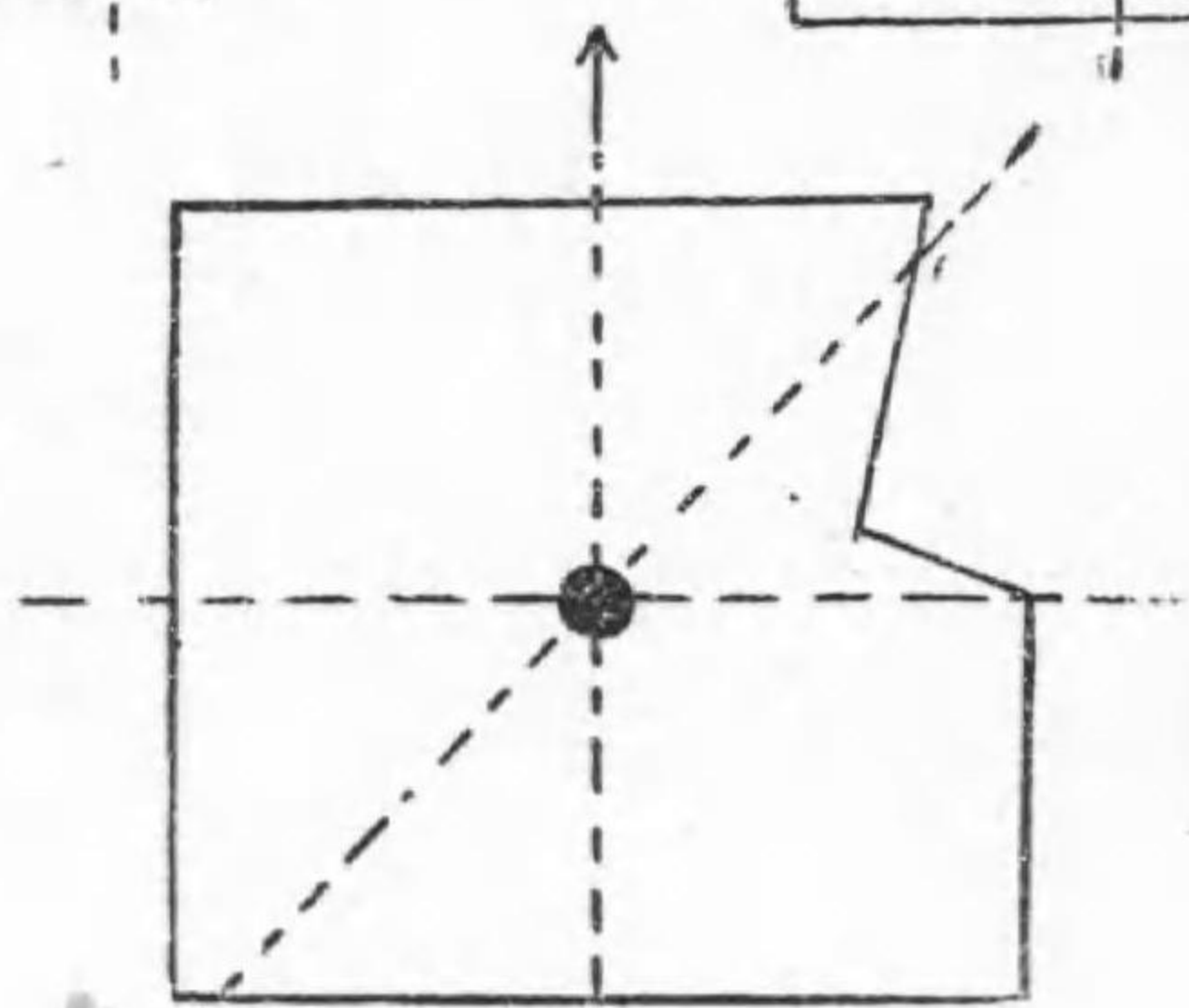


第六圖 (寅缺)

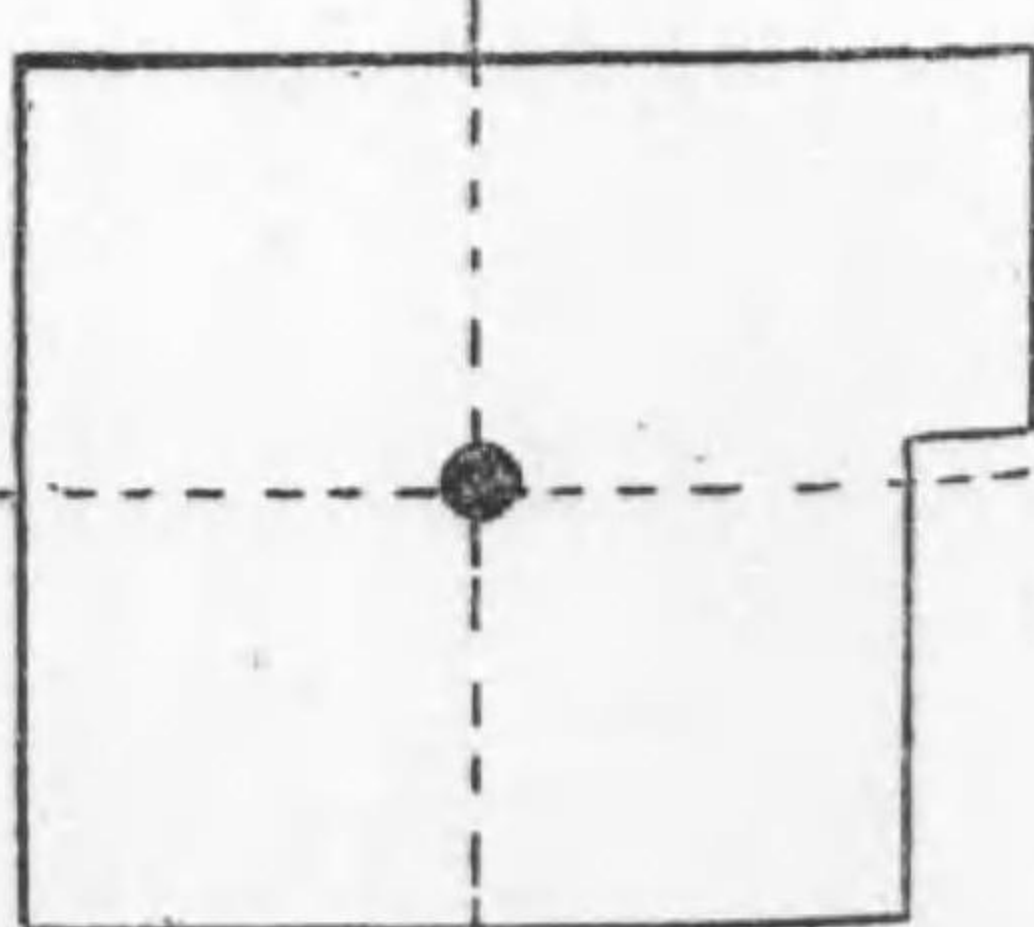


凶相の地相圖解 (二)

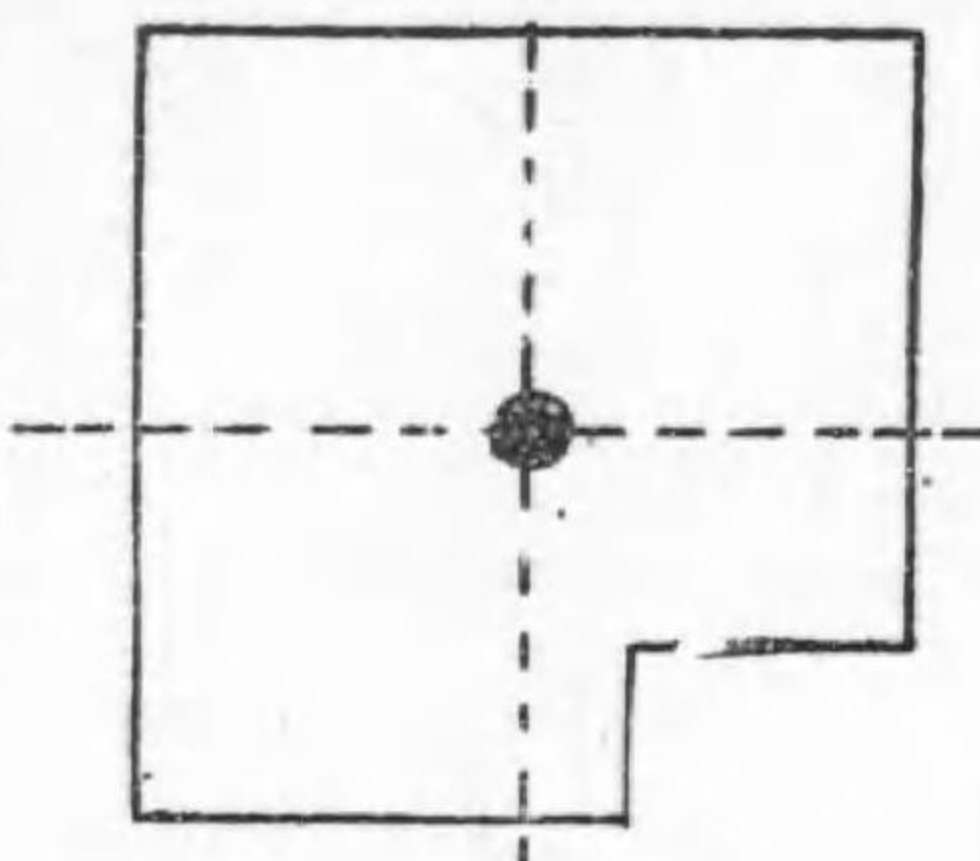
第八圖 (寅缺)



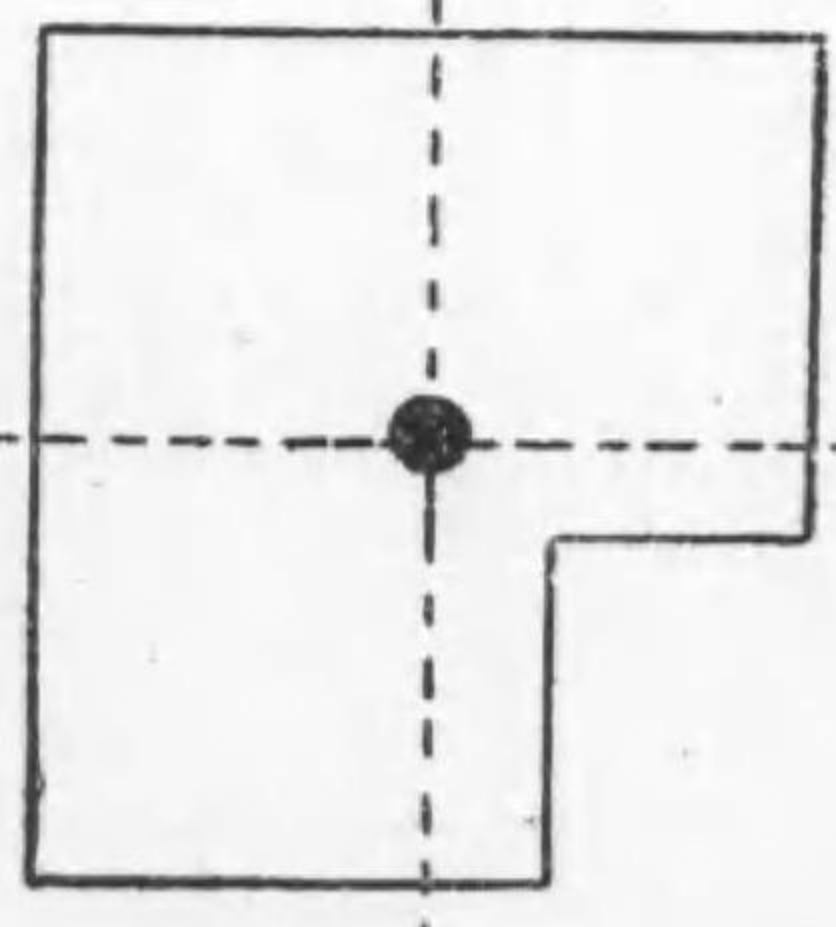
第九圖 (辰缺)



第七圖 (巽缺)



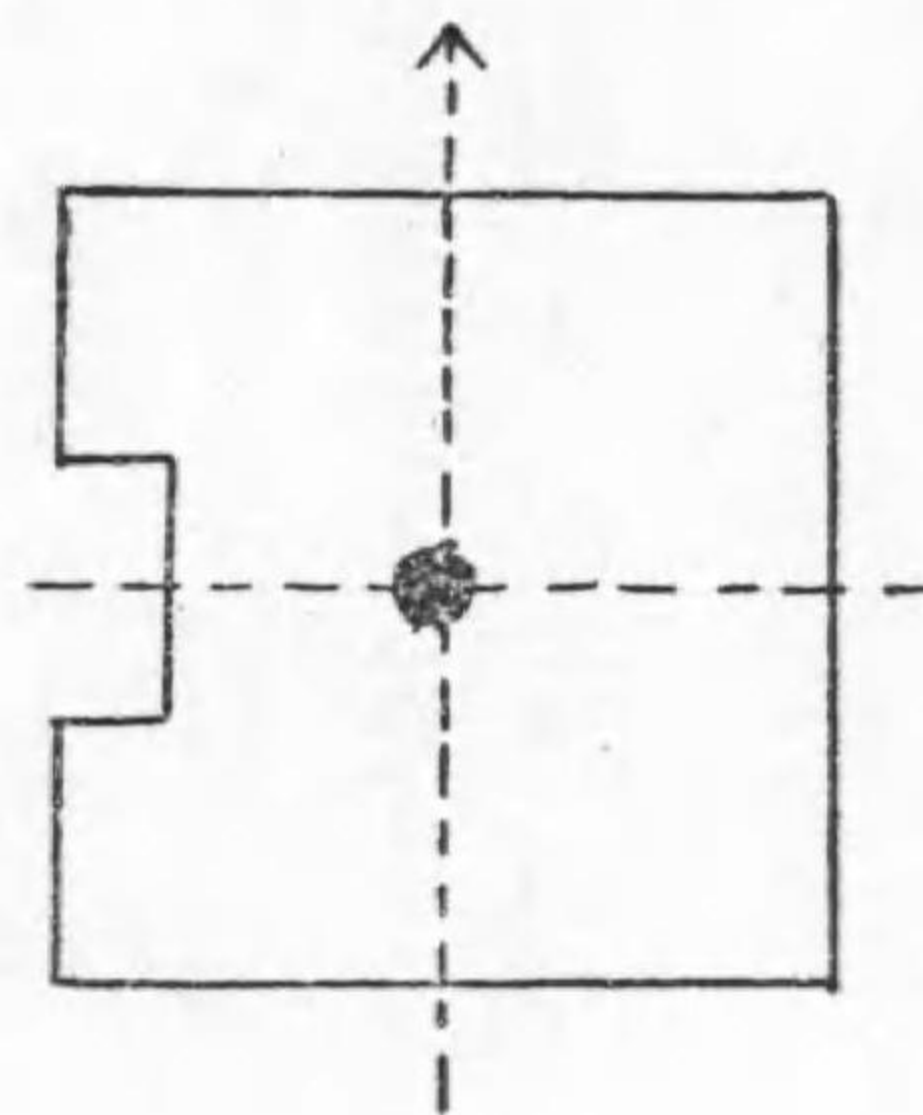
第十圖 (巳缺)



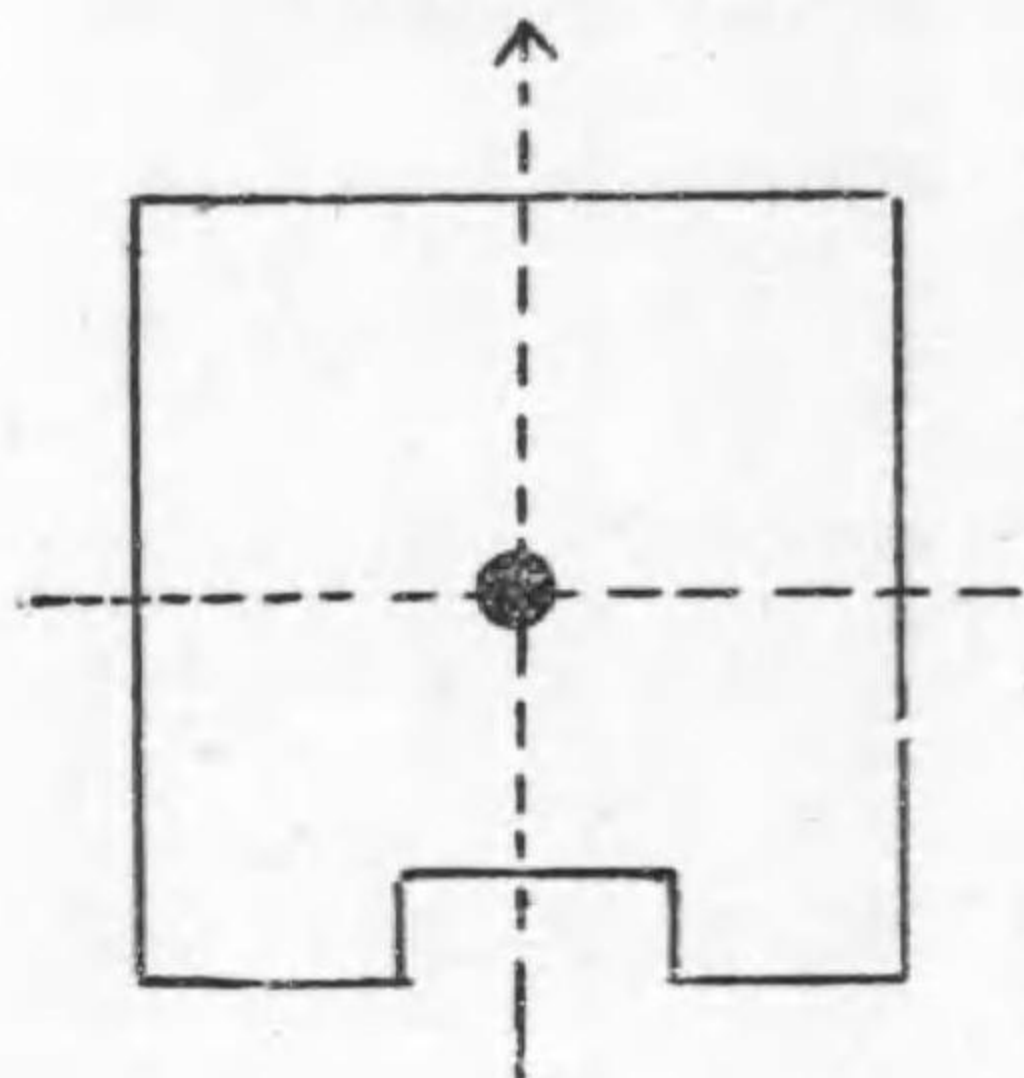
凶相の地相圖解

(四)

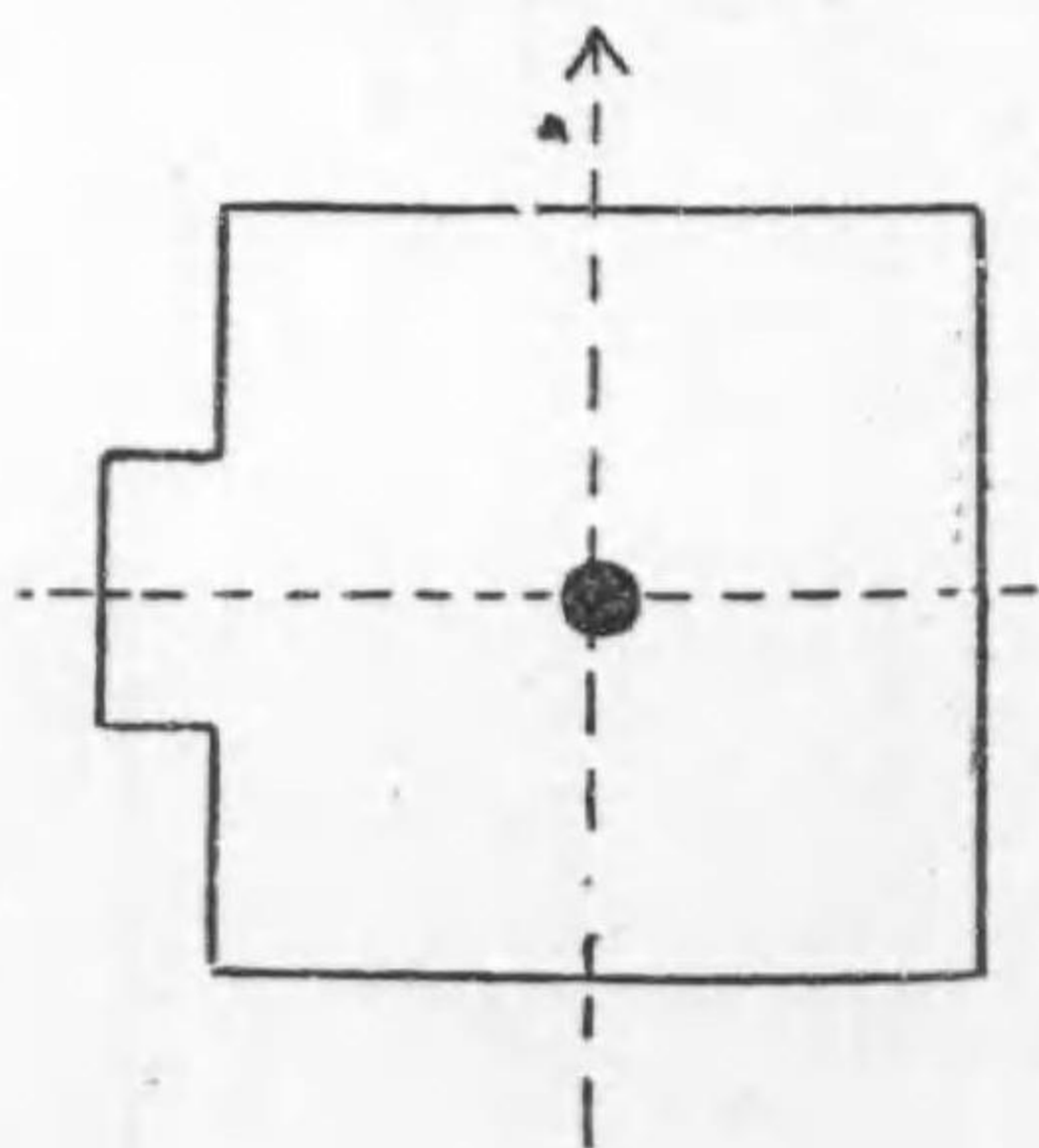
第 十 八 圖 ( 西 缺 )



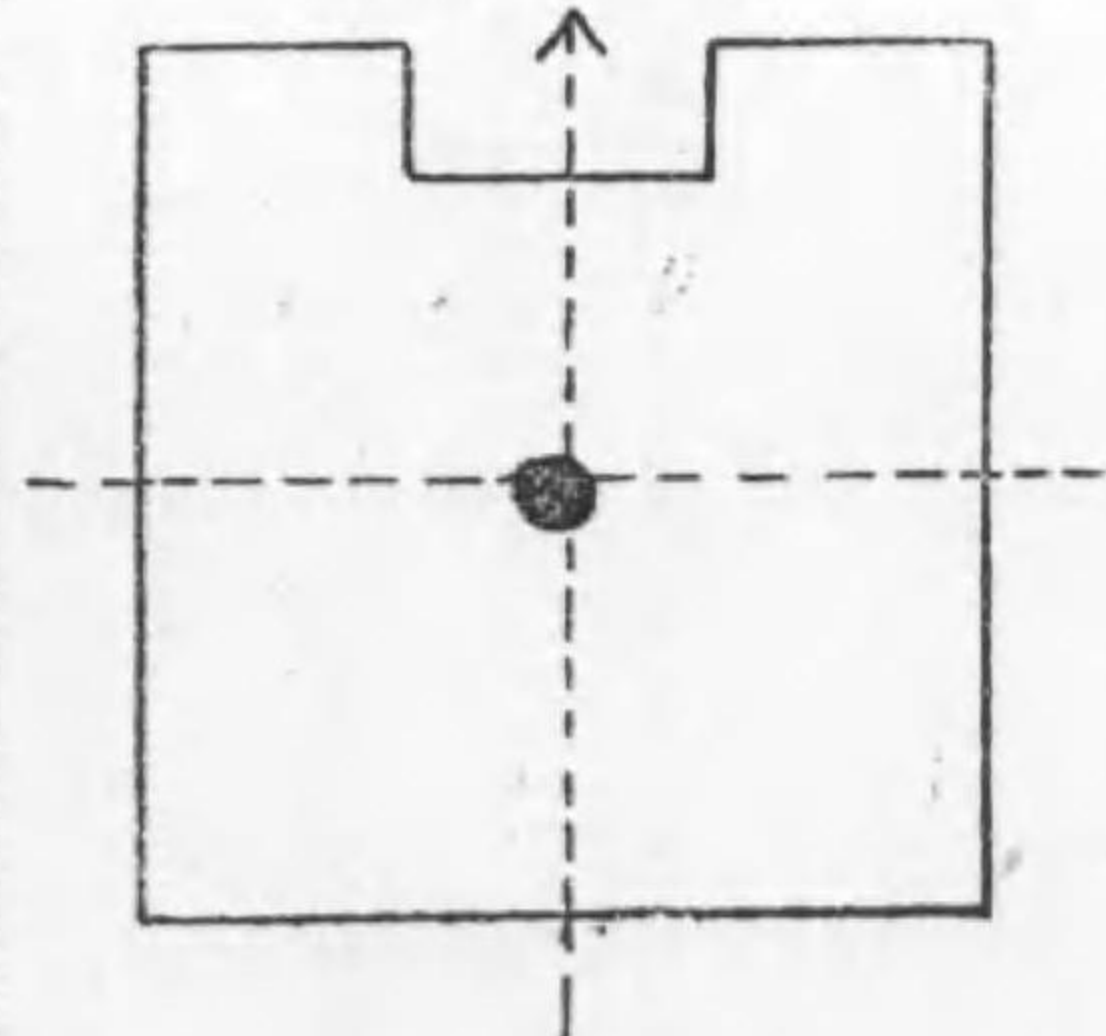
第 十 六 圖 ( 南 缺 )



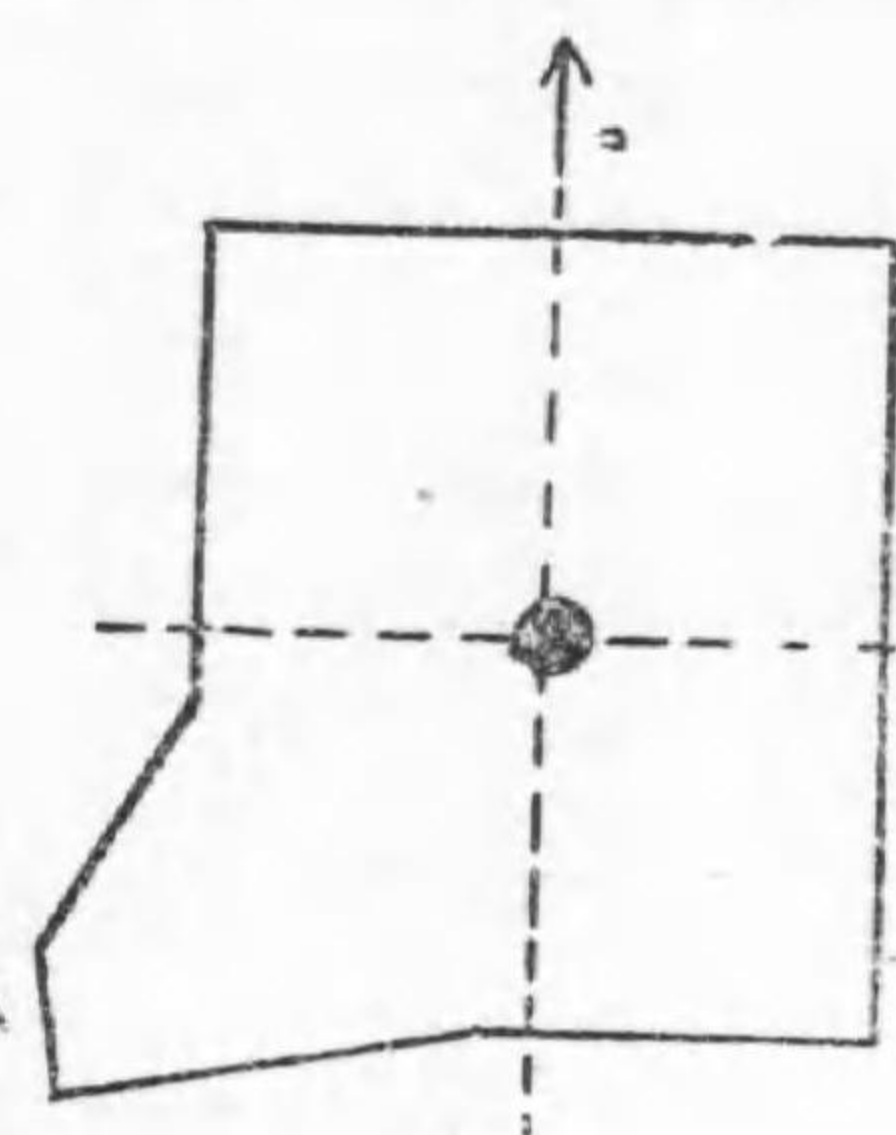
第 十 七 圖 ( 西 張 )



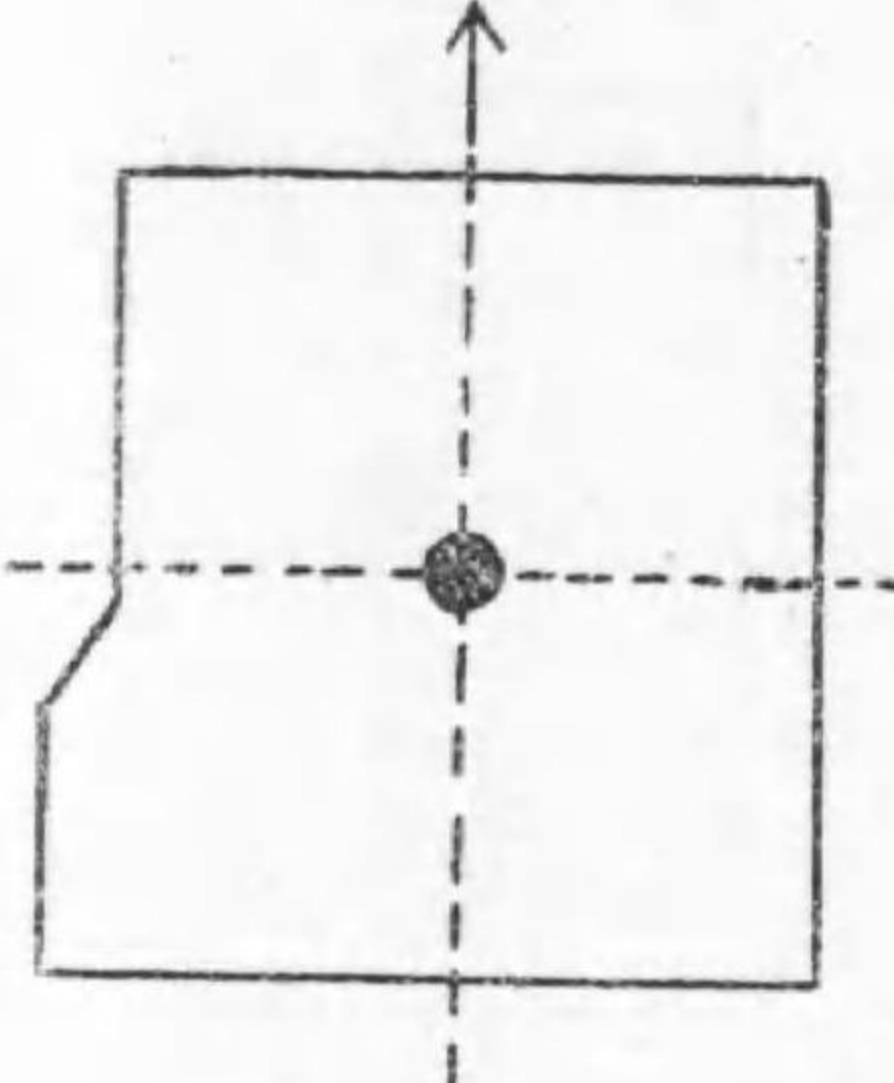
第 十 九 圖 ( 北 缺 )



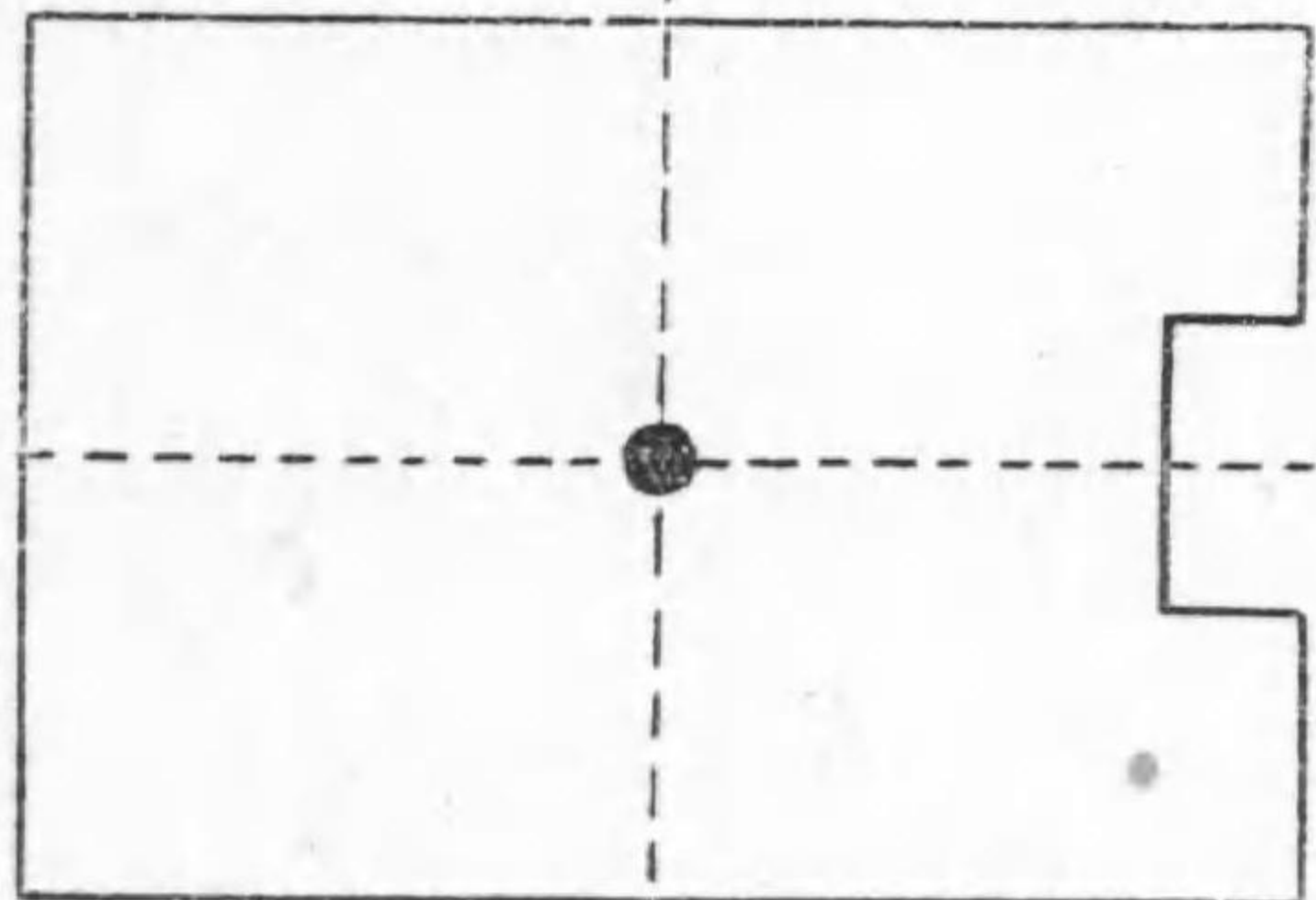
第 十 一 圖 ( 坤 張 )



第 十 二 圖 ( 申 張 )

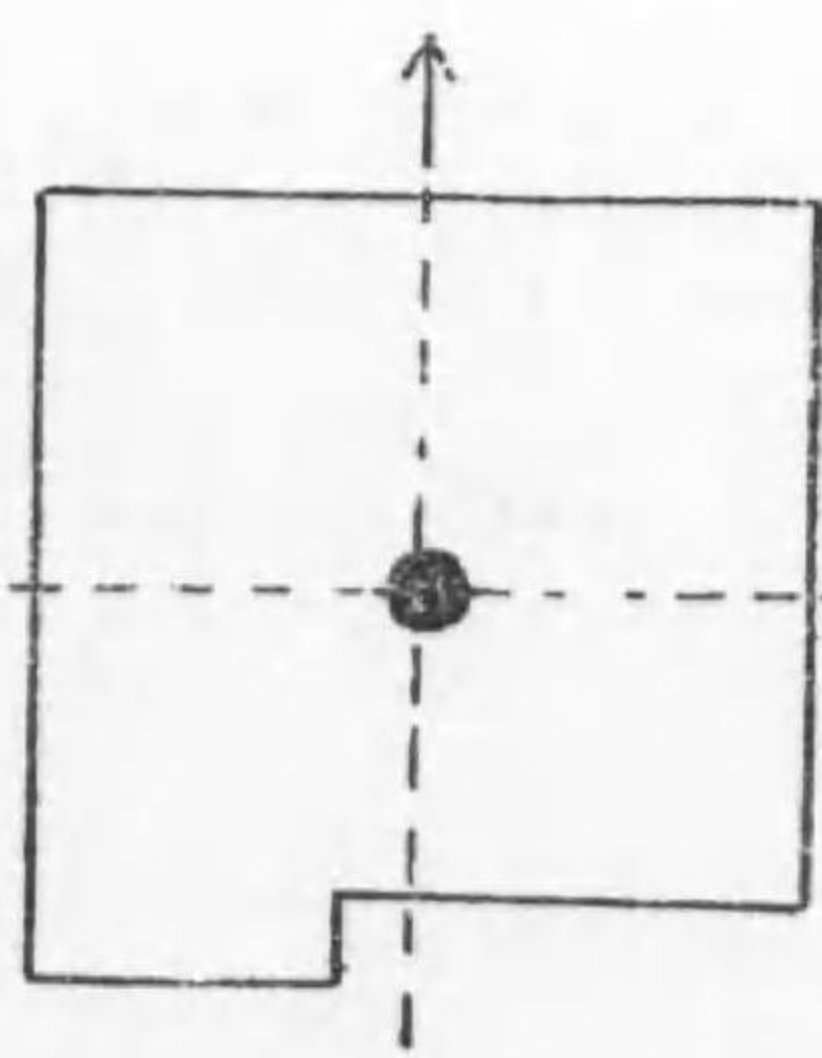


第 十 三 圖 ( 東 缺 )

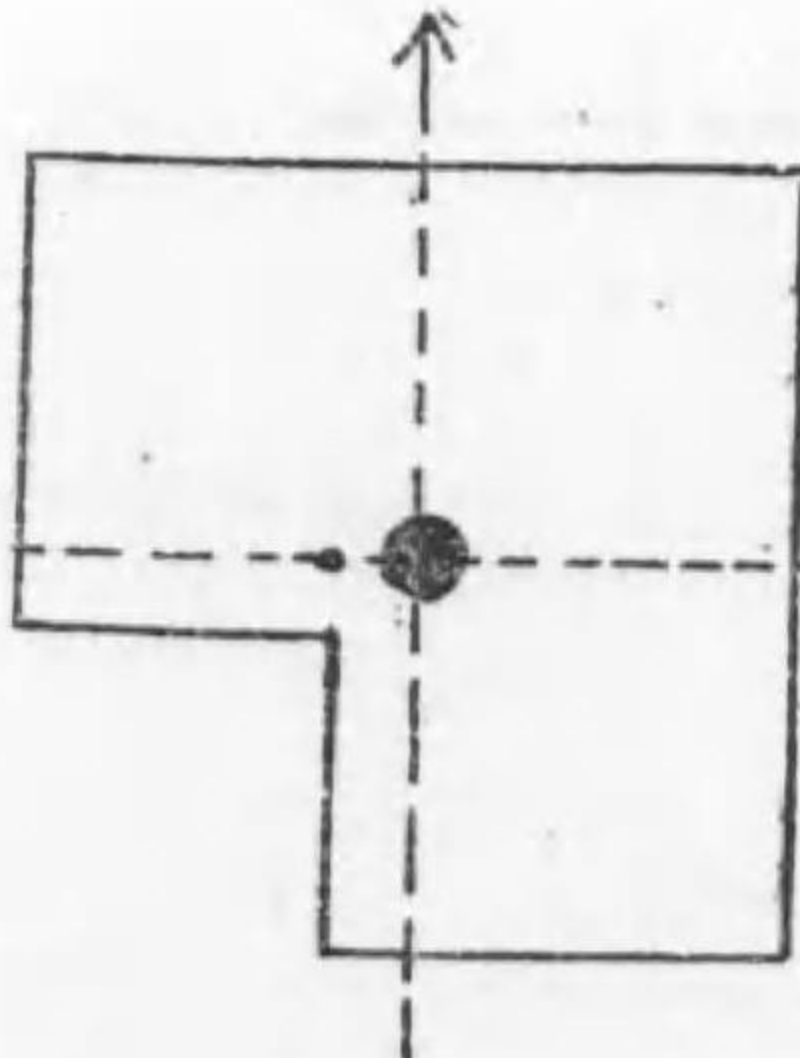


凶相の地相圖解

第 十 四 圖 ( 未 張 )



第 十 五 圖 ( 坤 缺 )



### 第七章 家相の吉凶

家相も原則としては地相と同じく、長方形で奥行が深く、間口がそれに比例して度を失せぬ程度に狭いのを、陰陽の調和を得て吉相とするのであるが、これに陰陽循環の理を配して、その家の部位の色々な缺張によつて吉凶が説かれて居るのは地相と同様である。今左にこれを一括して圖解によつてその吉凶を説明することにする。

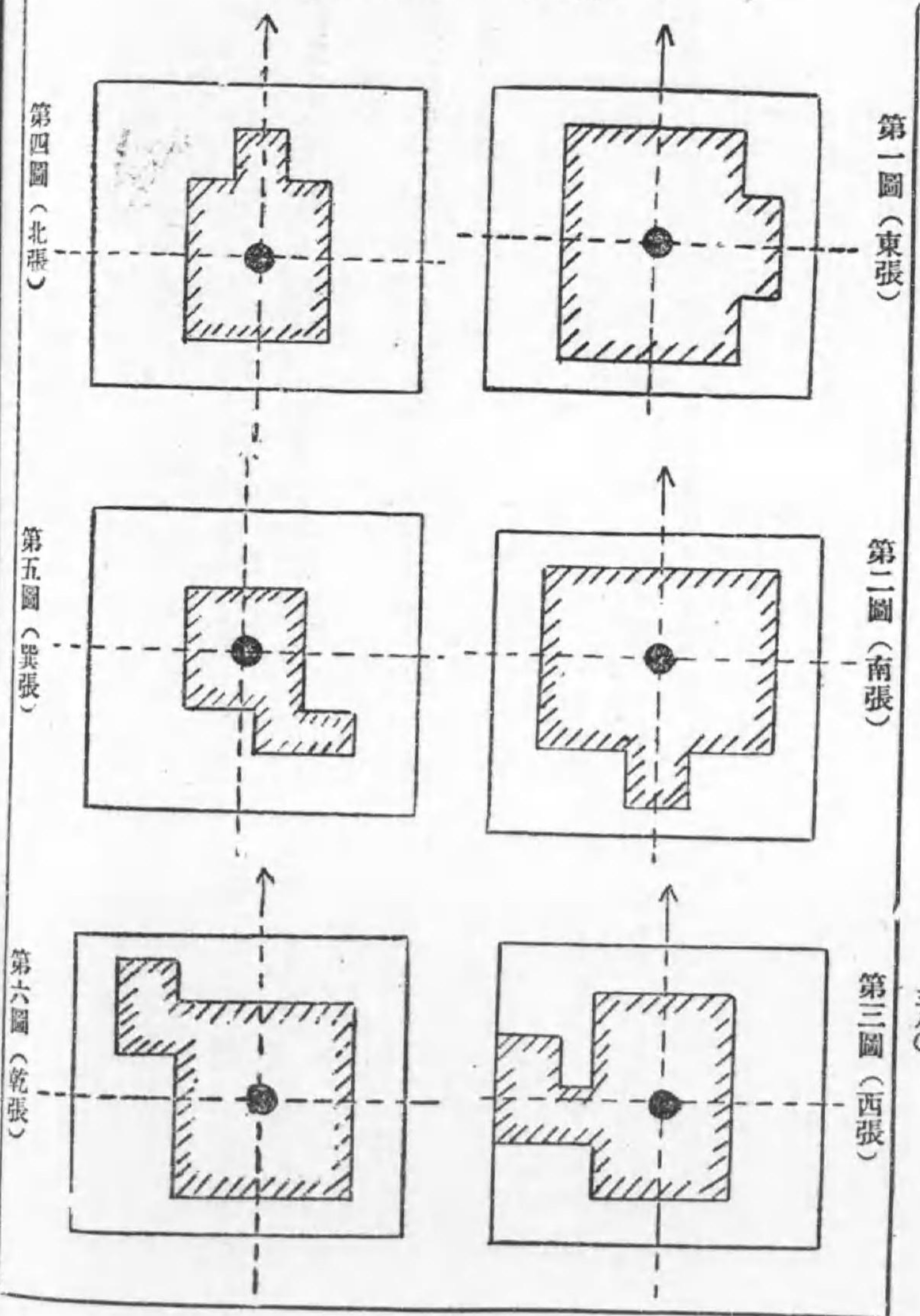
#### 第一節 吉相の家相

- ▲第一圖に示す如く、本宅の東の部位に座敷などの張出して居るのは地相と同様に吉相であつて、家運の繁榮を得るとせられて居る。
- ▲第二圖に示す如く、南の部位の張出して居るのも吉相であつて、家運の繁榮を得るとせられて居る。然しそれも程度であつて、餘り張出し過ぎては却て凶相となつて、家人に災害を招くに至るものであるから注意を要する。
- ▲第三圖に示す如く、西の部位の張出して居るのも吉相であるが、これも程度を失しては凶相になる

ことは同様である。

- ▲第四圖に示す如く、北の部位の張出して居るのも吉相であつて、家人健全財運發達を得るとせられて居る。
- ▲第五圖に示す如く、巽即ち東南の張出して居るのも吉相であつて、家業發達し福運を得るとせられて居る。
- ▲第六圖に示す如く、乾即ち西北の張出して居るのも吉相であつて、家人の出世を見福運を得るとせられて居る。

吉相の家相圖解



第二節 凶相の家相

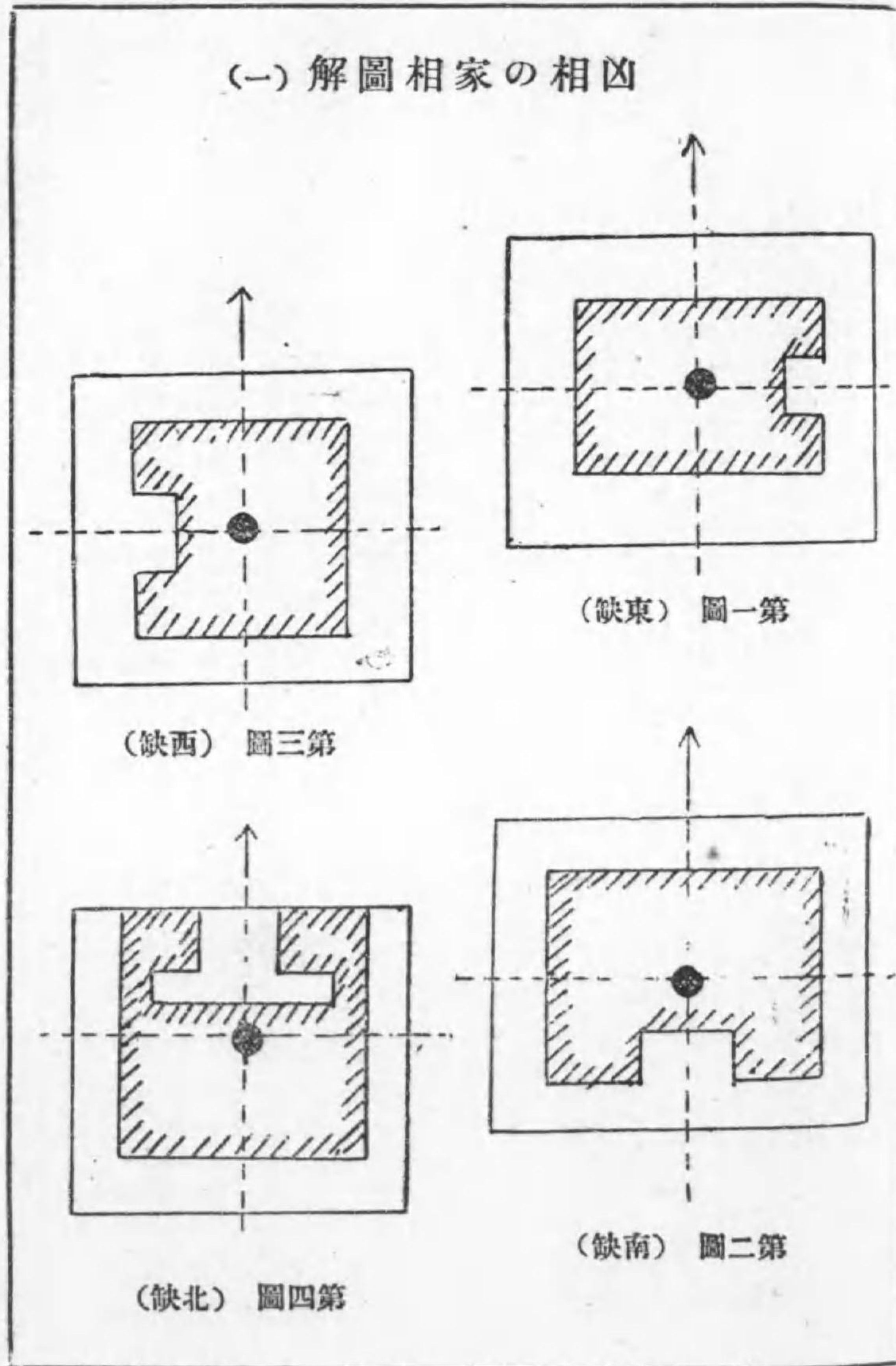
- ▲第一圖に示す如く、東の部位の缺込んで居るのは凶相であつて、家運の發展を妨げ故障災難が多いとせられて居る。
- ▲第二圖に示す如く、南の部位の缺込んで居るのも凶相であつて、一時繁榮を見ることあるも永續しないとせられて居る。
- ▲第三圖に示す如く、西の部位の缺込んで居るのも凶相であつて、家内に口舌争論が絶えないとせられて居る。
- ▲第四圖に示す如く、北の部位の缺込んで居るのも凶相であつて、主人病弱にして家運の衰微を招き主婦に家政の實權が移る様になるとせられて居る。
- ▲第五圖に示す如く、坤即ち西南の部位の張出して居るのは凶相であつて、家内に病人絶えず家産の衰微を招くとせられて居る。
- ▲第六圖に示す如く、坤即ち西南の部位が深く缺込んで居るのは凶相であつて、妻縁に障りがあるとせられて居る。

▲第七圖に示す如く、艮即ち東北の部位の張出して居るのは凶相であつて、主人虚弱に流れ家族にも病人多く、家運の衰微を招くとせられて居る。

▲第八圖に示す如く、艮即ち東北の部位の缺込んで居るのも凶相であつて、一家に故障災難多く家運の衰微を招くとせられて居る。

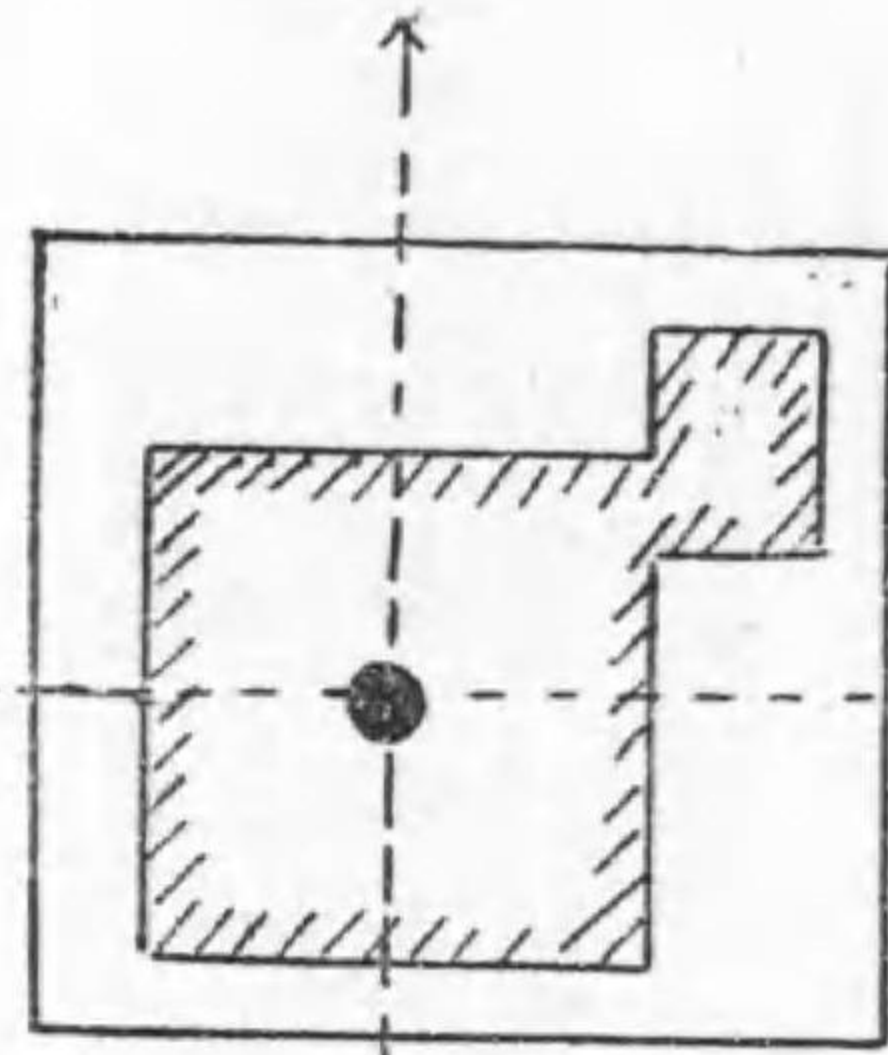
以上に於いて家相全體より見たる吉凶の説明を終つたから、以下家相上各部位の吉凶に就いて説明することにする。

(一) 解圖相家の相凶

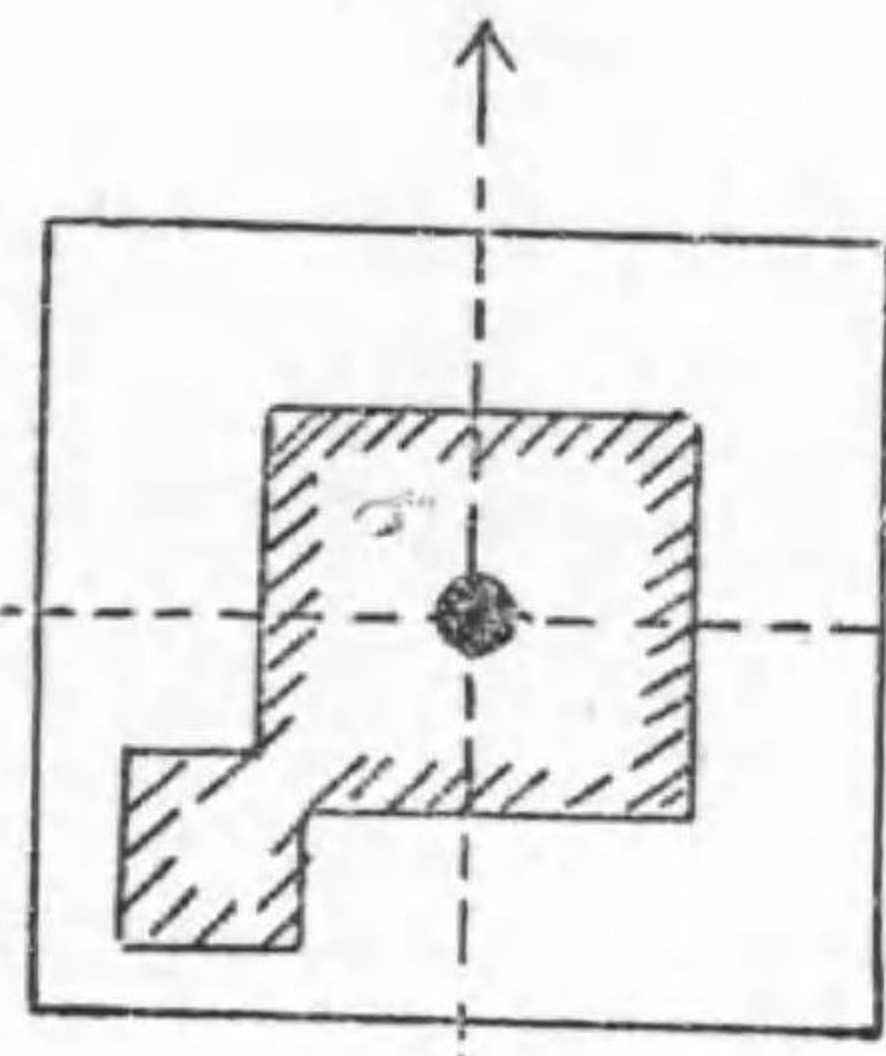




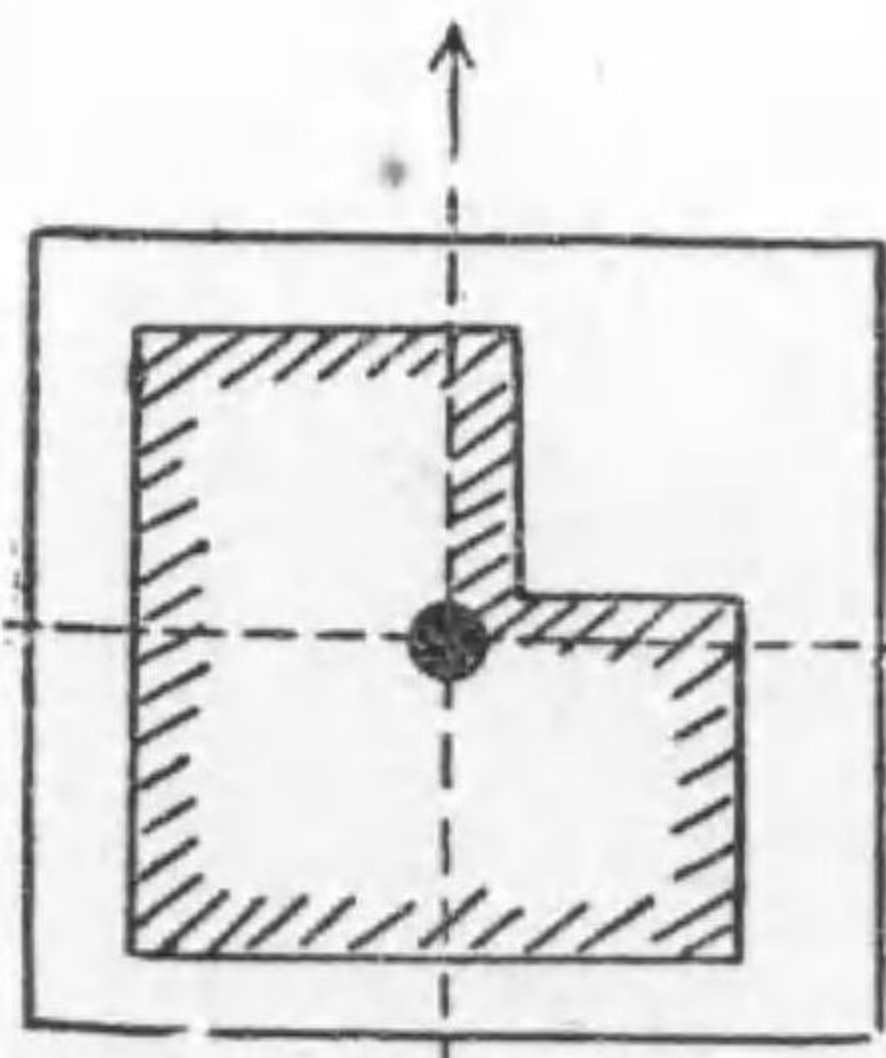
(二) 解圖相家の相凶



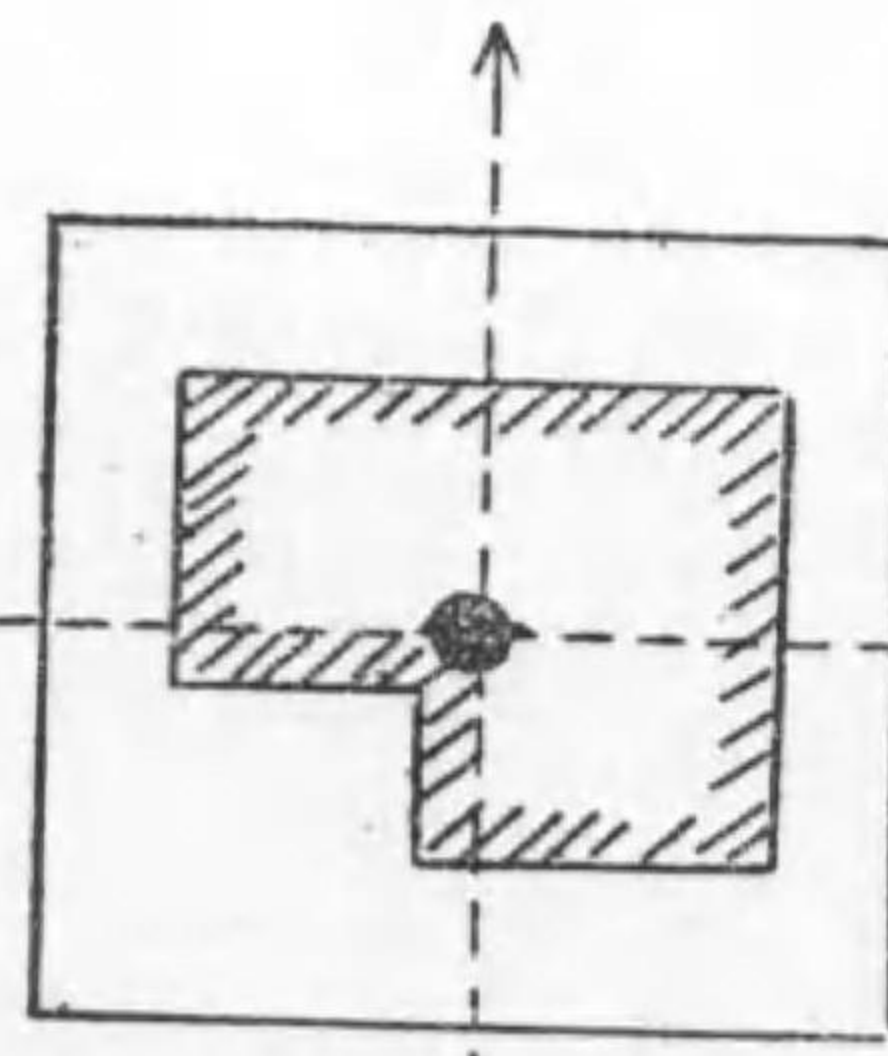
(張良) 圖七第



(張坤) 圖五第



(缺良) 圖八第



(缺坤) 圖六第

第三節 井戸に就いての吉凶

井戸は人間の生活上最も重要である水を得る所であるから、古來家相上特に重んずべきものとして説かれて居るものである。現代は大都會では水道によつて居るから、井戸のことは餘り重要ではないが、全國一般を通じては未だ井戸によつて居る所が多いのであるから、家相上重要な位地を占めて居ると云はなければならぬ。故に第一に井戸に就いての吉凶を説明することにす。

第一項 井戸を設くるに吉相なる部位

- ▲東の方に設くるは家運繁榮し主人の願望を達し、福分備れる大吉相である。
- ▲辰巳に設くるは家運繁榮子孫發達し、財寶集る大吉相である。
- ▲西の方に設くるは福運備れる吉相である。
- ▲戌の方に設くるは家族和合を得る吉相である。
- ▲戌亥の方に設くるは目上の引立を受ける吉相である。
- ▲その他、未の方、午と未との間、寅の方に設くるは吉相と迄は云はれないが、無難の相とせられて

居るから、都合上では用ゐて差支へない。尙北の方に設くるのも無難の相とせられて居るが、ある説では婦人の病氣を招くと云はれて居るから用ゐない方が良いであらう。

### 第二項 井戸を設くるに凶相なる部位

- ▲丑寅の方に設くるは、福運を失ひ養子相續となりその他凶兆が多いとせられて居る。
- ▲真南に設くるは家内に病難者を生ずる凶相とせられて居る。
- ▲未申の方に設くるは、家運衰微を見、特に婦人に障りがあり、養子相續となる凶相とせられて居る。
- ▲丑の方に設くるは凶相で、色々と障りがあるとせられて居る。
- ▲申の方に設くるは、幾分福運があるが家族に病難の憂ひがあるとせられて居る。
- ▲その他、井戸と竈との向合へること、井戸と竈及び厠との餘り接近すること、井戸の眞上に天窓のあること、井戸の上に物乾場や涼臺のあること、宅地内に古井戸のあること等は良くないとせられて居る。

以上第一項及び第二項に於いて、井戸を設くる吉凶の部位に就いて説明したが、勿論吉凶の部位と云ふことのみで囚られて、水質の良否と云ふことを度外視してはならないことは云ふ迄もないことである。

ある。

### 第四節 厠に就いての吉凶

家相上厠即ち便所のこと重要なる事項の一つとなつて居る。これは衛生上の見地から來て居ることは云ふ迄もないことであるが、陰陽循環の理に合致せしめると云ふ考へも加はつて居ると考へられる。

### 第一項 厠を設くるに吉相なる部位

厠を設くるに吉相の部位は、本篇家相秘傳の初めの所に掲げて置いた、家相二十四部位の中、甲乙丙丁庚辛壬癸の八部位即ち傍位を以て吉とするのであるが、その中でも、庚壬の部位に設くるを最も吉とし、甲乙の部位に設くるを次に吉とする。又厠はなるべく本棟と棟續きに設けず、別棟として建てるのが家相上理想的とするものであるが、これは田舎家では實現することも出來るであらうが、一般的には實際問題として困難なことであるから、なるべく本棟より張出して附屬の建物として設ける様にすることが良いと考へる。

### 第二項 廁を設くるに凶相なる部位

▲辰巳の方に設くるは大凶相で、福運を失ひ家運の發展を妨げるとせられて居る。これは辰巳の方は陽氣の最も活動する部位であるから、廁の如き不淨のものを設けては陰陽循環の理に逆らひて、陽氣の活動を阻害するからである。

▲丑寅の部位に設けるのも大凶相で、家内に病難を招き主人に禍ひを及ぼして、家運の衰微を來すとが甚しいとせられて居る。これも陰陽循環の理に逆らひ且衛生上の見地から見ても良くない爲めであると考えへる。

▲未申の部位に設けるのも凶相で、病難不幸を招き、特に婦人に禍ひが多く、家運の衰微を來すとせられて居る。これは陰陽循環の理から來て居ると考へる。

▲戌亥の部位にあるのも凶相で、福運を失ふとせられて居る。これも陰陽循環の理から來て居ると考へる。

▲東、西、南、北の正當に設けるのは何れも凶相であるから、正當を少しづつ、外づして設けるやうにすることが大切である。

以上廁を設くるに凶相なる部位に就いて説明したのであるが、實際に當つては凶相の部位に少しも掛らないやうに設けることはなかく至難なことであるから、廁の一部分が凶相の部位に掛つたとし、ても、廁の中心と凶相の部位の中心とが合致することのないやうに避けて作れば良いのである。勿論全然凶相の部位を外づして吉相の部位の範圍内に設けることが出来るならば、それに越したことがないと云ふことは云ふ迄もないことである。

### 第五節 竈に就いての吉凶

竈も人間生活に缺くべからざる飲食を調へる所であるから、家相上重要な一つとせられて居る。而して竈は使用の性質上臺所に置くものであることは云ふ迄もないことであるから、竈の位置の吉凶は自然臺所の位置の吉凶と一致する譯である。

### 第一項 竈を設くるに吉相の部位

竈は、東西南北の正當をどちらかへ片寄りたる部位、即ち甲、乙、丙、丁、庚、辛、壬、癸の八部位に設けるのを吉とする。而してこの他に、辰巳と戌亥との部位の正當を外づしたる部位へ設け

るのも差支へない。

又竈はその火口の向方にも吉凶があるとせられて居つて、東の方、辰巳の方、南の方に向けたのは吉相で幸運を齎すとせられて居る。

### 第二項 竈を設くるに凶相の部位

竈は、東西南北の正當、戌亥及び辰巳の正當、丑寅及び未申の方、家の中央に据へるのは凶相であるとせられて居る。

又竈の火口を、西、戌亥、北、丑寅及び未申の方向へ向けたのは凶相で災害があるとせられて居る。

### 第六節 湯殿を設くるに就いての吉凶部位

湯殿は人間の垢を洗ひ落す不淨の場所で常に濕氣を帯んで居るから、陰濕の場所に構へるのは凡て悪いとせられて居るが、尙陰陽循環の理をも合せ考へて色々と言凶が説かれて居るから、次に一括してその吉凶を説明することにする。

湯殿は、辰の方、巳の方、申の方、亥の方、寅の方に設けるのを吉相とし、未の方、戌の方、丑の

方に設けるのは無難の相で差支へないとせられて居る。

次に東西南北共にその正當に設けるのは凶相で不幸災害があるが、少し片寄せて傍位に設けるのは差支へない。又、未申、戌亥、丑寅、辰巳の方も凡て正當に設けるのは凶相であつて、災害不幸を招くとせられて居る。

### 第七節 窓を設くるに就いての吉凶部位

窓は採光通風の點から云つて大切な所であるから、これも亦家相上重要なものゝ一つとなつて居る。而してその吉凶は左の如くである。

東、辰巳、南に設けるのは吉相とせられて居るが、その理由は説明する迄もなく明白なことである。次に、戌亥の方と西及び北の方は、正當を避けてどちらかへ依つて居れば差支へないとせられて居る。次に窓を設けるのに凶相の部位は、未申の方と丑寅の方である。

### 第八節 門及び玄關に就いての吉凶

門も玄關も一家の出入口で訪客に第一印象を與へる所であつて従つて家の盛衰に重大なる關係のあ

る場所であるから、これも亦家相上重要なもの、一つとなつて居る。而してその吉凶は次に説明する如くである。

▲辰巳の方と戌亥の方は、門及び玄關を構へるに最も吉相の部位であつて、この部位に門及び玄關を構ふれば一家の繁榮長久を齎すとせられて居る。次に東の方と南の方も吉相の部位とせられて居るが、南の方の門は陽氣の極る所で火難の懼れがあるから、少し東へ寄せて建てれば一層吉相であると云はれて居る。以上は凡て陰陽循環の理に基いたものである。

▲玄關は西又は北に構へるのは、東又は南に構へるのに次いで吉相とせられて居るが、門の方は西又は北に構へるのは凶相とせられて居る。然し西又は北の方でも正當を避けて、少しどちらかへ片寄せれば差支へない。

▲長(東北)又は坤(西南)の方は、門を構へるにも玄關を構へるにも大凶相の部位であつて、この部位に門又は玄關を構へる時は、家運の發展を妨げて衰微を招くとせられて居る。これは陰陽循環の理に逆らつて居るからである。

▲門柱は真直ぐなるものを吉とし、繼木とか曲つたものは凶相である。

▲門口の二つあること、表門と裏門とが一直線となれる構へ、家屋に不釣合な立派な門を構へること

殊更に風變りの門を建てること等は凶相である。  
▲玄關が門の突當りにあつて一直線になつて居るのは凶相であるから、少しどちらかの方向へ片寄せて建てるべきである。然し、神社佛閣、官衙、高貴なる人の住居等は一直線になつて居つても差支へない。

以上で門と玄關との構へに就いての吉凶を説明したのであるが、門と玄關とは密接な關係にあつて兩者相俟つて始めて本來の目的を果すものであるから、双方をよく考へ合せて構へることが肝要である。

### 第九節 土藏に就いての吉凶

土藏は一家の財寶を收藏する所であるから、これも家相上重要なもの、一つである。而して土藏は本來の目的から見て、濕氣を呼ぶやうな陰氣な所に建てるのは悪く、なるべく日當りのよい陽氣な場所に建てるを吉とするが、その他に陰陽循環の理に基いて色々と吉凶が説かれて居るから、次にこれを説明することにする。

第一項 土藏を建てるに吉相なる部位

▲土藏は本宅の中心より見て、辰巳か戌亥の部位に建てるのを最も吉相とし、家運の繁榮、財寶の増殖を得、子孫の長久を得るとせられて居る。

▲次に南及び西の方に建てるのを吉相とし、北の方は正當より少し西寄り即ち壬の部位へ建てれば差支へなく、東の方は正當より少し南即ち乙の部位へ建てれば差支へない。

第二項 土藏を建てるに凶相なる部位

▲丑寅の方に建てるのは大凶相であつて、家内に病難災害多く、主人短命にして相續上の故障を生じ家運の衰微を招くとせられて居る。

▲未申の方に建てるのも大凶相であつて、家内に病難災害を招き、主人短命にして矢張相續上の故障を生じ家運の衰微を來すとせられて居る。

第十節 神棚及び佛壇のこと

◎神棚を祭るに就いては色々な説があるが、予の研究ではその家の主人の本命に當る場所に祭るべき

であるといふ説を最も正しいと考へる。即ち

▲一白の人は家の中心より見て北に當る場所に祭るを吉とし、

▲二黒の人は家の中心より見て坤(西南)に當る場所に祭るを吉とし、

▲三碧の人は家の中心より見て東に當る場所に祭るを吉とし、

▲四緑の人は家の中心より見て巽(東南)に當る場所に祭るを吉とし、

▲五黄の人は家の中央に祭るを吉とし、

▲六白の人は家の中心より見て乾(西北)に祭るを吉とし、

▲七赤の人は家の中心より見て西に當る場所に祭るを吉とし、

▲八白の人は家の中心より見て艮(東北)に當る場所に祭るを吉とし、

▲九紫の人は家の中心より見て南に當る場所に祭るを吉とする。

而して神棚は神聖なる神靈を祭る所であるから、以上に述べた部位に於いて最も清淨なる場所を擇んで祭るべきことは云ふ迄もないことである。

▲次に神棚の向きの吉凶に就いては、東向、辰巳向、南向を吉とし、未申や丑寅の方向へ向けて祭るのは凶である。

◎佛壇も神棚と同じく清浄なる場所を擇んで祭らねばならぬことは云ふ迄もないことである。而してその部位及び向方の吉凶は左の如くである。

- ▲家の中心より戌亥に祭りて南向きにするのを最も吉とし、東向き又は西向きにするのも吉である。
- ▲家の中心より北に祭りて南向きにするのは吉であるが、丑寅又は未申に向けたのは餘り宜しくない。
- ▲家の中心より西に祭りて東向、南向、辰巳向にするのは吉である。
- ▲家の中心より東に祭りて南向き又は西向きにするのは吉であるが、北向きにするのは凶である。
- ▲家の中心より南に祭りて北向きにするのは吉であるが、東向きにするのは凶である。
- ▲家の中心より辰巳に祭りて南向きにするのは吉であるが、その他の方向へ向けるのは凶である。

### 第十一節 納屋を設くるに吉凶なる部位

納屋即ち物置は、不浄の物を納めて置く所であるから、これも家相上注意を要するもの、一つであるが、その吉凶の部位は左の如くである。

▲東西南北共に正當を避けて傍位即ち、甲、乙、丙、丁、庚、辛、壬、癸の部位へ設ければ差支へない。

### 第十二節 その他の雑事

▲亥の方、巳の方に設けるのは吉相であり、戌亥の方、辰巳の方も正當を避けて設ければ差支へない。

▲離座敷及び茶室の事 離座敷とか茶室とか云ふものは住宅に取つて必需のものではなく、云はゞ、贅澤に屬するものである。故に餘り無理をして迄も設けるべきものではない。従つて家相上にもそれ程重要視すべきものではないが、その吉凶は次の如くである。

▲離座敷 はその本来の性質上兎角閑静な場所へ設けるやうなことになるものであるから、なるべく陰陽循環の理を考へて陽氣の巡る部位へ設けるやうにすることが大切である。而して良の部位及び坤の部位へ設けるのを最も凶相とするのである。

▲茶室 も離座敷と同様に兎角陰氣になり易いものであるから、なるべく陽氣を取入れるやうに考へて、極めて簡粗な構へにすることが大切である。而して離座敷と同じく良及び坤の部位に設けるのを凶相とするのである。

▲塀の事 塀や垣は餘りに高きに過ぎては陰に傾き、餘りに低きに過ぎては陽に走り過ぎて凶相にな

るから高からず低からず家に相應して中庸に構へることが大切である。

▲階段及び板間の事 階段は勾配が餘り急に過ぎても亦緩に過ぎても凶相であつて中庸を得たるを吉相とする。又家の中央に設けるのも凶相であり、上り切つた所が主人の居間の眞上に當るやうなものも凶相である。次に板間を家の中央に設けるのも凶相である。

▲泉水及び築山の事 泉水も築山も住宅に取つて必需のものでなく、贅澤に屬するものであるから、強いて設けるのは家相上良いことではない。而して兩者共に陰濕の氣を呼び易いものであるから、これを設ける場合には充分注意する必要がある、その吉凶は次に説明する如くである。

▲泉水は巳の方と亥の方に設けるのは差支へなく、東、西、北の三方も正當を避ければ差支へない。

▲南の方に泉水を設けるのは凶相で病難が絶えぬとせられて居る。

▲築山は北の方及び戌亥の方に設けるのは差支へないとせられて居る。

▲泉水も築山も共に、丑寅の方及び未申の方に設けるのは大凶相で、不幸災害を招くとせられて居る。

▲吸込み及び排水の事 吸込みも排水も衛生上から見て住宅に重大な關係があるから充分注意せねばならぬ。而してその吉凶は次に説明する如くである。

▲吸込み は東西南北共に正當を避けて傍位に設ければ差支へないが、丑寅及び未申の部位に設ける

のは大凶相で、特に病難を招く憂ひがあるとせられ、又本命星の定位に設けるのも災害が多いとせられて居る。

▲排水 は、東方、西方、戌亥及び辰巳の方へ流出するのは差支へないが、丑寅の方及び未申の方へ流出するのは最も凶相であつて病難災害を招くとせられ、南の方及び北の方へ流れ出づるもこれに次ぐ凶相とせられて居る。要するに排水は右の吉凶相を考へた上で、一時も早く宅地内から排出されるやうに設計することが肝要である。



神宮館講師 松田定象著

四〇〇

### 家業繁榮 家相の見方

日本紙美裝箱入  
定價金一圓五十錢  
送料金十二錢

【家相はごうして見るの歟】 假りに斯る問ひを提出すると、自ら家相見と稱する大先生も各人各様の差つた答へを爲すは元來此家相の事を書いた唐本は至つて難解の字句多く、且つ支那と我國とは家屋構造に相違あると、又斯道の先哲が徒らに秘傳奥傳と稱して其原理を秘せし故、反つて謬説邪論の世に行はれし故である、著者大いに之を憂え、古今の宅相、地相の群書を涉獵し、其原理より説き起して家相、地相はごう鑑定するものかと云ふことを、一々圖解によりて説明し、なほ其家に如何なる吉凶禍福があるかと云ふことをば四方四隅二十四山に就ての判斷の仕方と惡しき家相を良き家相に直す秘傳及び其鑑定の例證は著者の實例を示して現代の進歩せる衛生學上より見ても家相學には一の眞理があると云ふことが認められるなどは、本書の確かに他の類書より優れるものである、然も文章は至つて平易なれば苟くも一家を持ちて業務の盛大、子孫の繁榮を望む人は勿論、家相鑑定家も亦本書を繙かば首肯する所多からん。

## 第十編 骨相秘傳

### 序 說

骨相學と云ふのは獨逸語の「フレンロギー」のことで、これは西曆一千七百九十六年即ち我が天明五年に、獨逸のフランツ、ヨセフ、ガルと云ふ有名な醫者が始めて唱へ出した説であつて、當時隨分盛んに行はれたものであるが、後ガルの友人である、スプルツハイムと云ふこれも可なり有名な解剖學者が、ガルの説を補訂して面目を一新するに至り、講演により又専門の雜誌をも發行して大いに宣傳に努めたので、十九世紀の初頭には可なり盛んに世に行はれたものである。然し兩氏の死後適當なる後繼者を得なかつた爲に、一時下火になつて世に忘れられるやうになつたのを、英國のコムと云ふ人が一千八百四十二年にハイデルベルグで骨相學の講演をしたので再び擡頭して來て、専門の雜誌も出るやうになり、勢力を盛上げて來たのである。尙色々と骨相學の沿革や發達の歴史を述べて居ると長くなるから省略するが、このガルやスプルツハイムの主張した骨相學の基礎とする所は、これを

平易に説明すれば、人間の脳髓は精神作用の器官であつて凡ゆる精神作用の根元をなして居るものであるが、その各の部位によつて精神作用を司る官能の差違があるもので、理性、情緒、衝動、感情その他色々な精神作用を司る部位が一定して居るものであるから、従つてその各器官の發育の強弱は、その部位に相當する所の頭蓋骨の表面の、凸凹、不平等、陥没等の様子を研究すれば判断することが出来ること云ふのであつて、この主張を擴張して、頭蓋の形狀を表面から見ても、その人の天稟の精神、即ち性格とか能力とか云ふものを判断することが出来、従つてその人の運命を切開いて行く參考資料となすことが出来ること云ふことを唱へるに至つたのである。このガルやスブルツハイムの説に對しては、始めから賛成者と反對者とがあり、當時柏林に於ける大醫フーフエランドは大なる賛成者であり、ハイデルベルグ大學の解剖學教授アツケルコンなどは大いに反對攻撃したものである。儲子はこの篇に於いて、さうした骨相學の沿革又は是非の點をも論じたのであるが、今はその暇がないから、茲には單にその概要を述べるに止め、委しいことは他日發表の豫定である、運勢叢書中の「骨相學精義」の篇に於いて説述することにし、本篇に於いては現在行はれて居る、骨相學の四十二部位に就いて説明することにする。

骨相二十四部位圖解



- 一、愛情機關
  - (1) 色慾部位、(2) 愛兒部位、(3) 配偶部位、(4) 友愛部位
  - (5) 血族部位、
- 二、自衛機關
  - (6) 生命部位、(7) 飲食部位、(8) 破壞部位、(9) 抵抗部位
  - (10) 秘密部位、(11) 理財部位、(12) 造構部位、
- 三、智力機關
  - (13) 形狀部位、(14) 個體部位、(15) 大小部位、(16) 輕重部位、
  - (17) 色彩部位、(18) 秩序部位、(19) 計數部位、(20) 事實部位、
  - (21) 位置部位、(22) 時間部位、(23) 音調部位、(24) 言語部位、
- 四、意力機關
  - (24) 持續部位、(25) 警戒部位、(26) 名譽部位、(27) 自尊部位、
  - (28) 強硬部位、
- 五、推理直覺機關
  - (30) 推因部位、(31) 比較部位、(32) 調和部位、(33) 鑑識部位、
- 六、審美機關
  - (34) 宏大部位、(35) 美麗部位、(36) 模擬部位、(37) 諧謔部位、
- 七、道德宗教機關
  - (37) 正義部位、(38) 希望部位、(39) 靈妙部位、(40) 尊崇部位、
  - (41) 仁惠部位、

### 第一章 愛情機關に屬する部位の説明

愛情機關に屬する部位は、後頭部即ち小腦の所であつて、この部位には、色慾、配偶、愛兒、友愛、血族の七種の精神作用を司る器官があつて、各その部位が定つて居るものである。以下節を別ちて各の部位に就いて説明することにすから、前に掲げた四十二部位の圖解と對照して了解せられたい。

#### 第一節 色慾部位の説明

色慾部位は圖解の如く小腦で、この部位が発達して居る人は色慾が強く、男女共に貞操の觀念に缺けて居つて、破倫亂行に陥り易いものである。ガル氏は患者中の十歳位の小女で、色慾に就いて十四五歳位に發達して居る者を研究して見た結果、小腦が異常に發達して居ることを發見した例を述べて居り、又動物の睪丸を抜取つて研究した所、小腦に變化を來したことを述べて居る。又彼の有名な法醫學の大家ロンブローは幾多の研究の結果、犯罪性を有する女は小腦が発達して居ると云ふことを述べて居る。これ等の實例は小腦が色慾を司る部位であると云ふことを示して居るものである。

#### 第二節 愛兒部位の説明

愛兒部位は圖解の如く、色慾を司る部位の少し上部で右寄りの所であるが、この部位の適度に發達して居る人は、子を愛する情が深く、反對にこの部位の發達が不完全で、削げて居るやうな人は、子を愛する情に缺けて居るものである。動物の中でも猿は子を愛する情が強いものであるから、この部位が他の動物に比して發達して居るものである。而して子に對して情愛の深い人は、従つて又凡てのものに對して慈愛が深いことは勿論のことであるから、この部位の發達して居る人は、自分の子だけではなく、凡てのものに對して慈愛心が深いものである。尙この部位は自然の理として女子の方が男子よりも發達して居るものである。

#### 第三節 配偶部位の説明

配偶部位は圖解の如く、愛兒部位の外側、色慾部位の少し上にある部位で、この部位の發達して居る人は、貞操の觀念が強く、よく一夫一婦の道を守る人で、貞操上間違ひのない人である。而してこの部位も自然の理として、愛兒部位に於けるが如く、女子の方が割合に男子よりも發達して居るもの

である。これに反して男子は、色慾部位が愛兒部位及び配偶部位よりも割合に發達して居るのが普通である。

### 第四節 友愛部位の説明

友愛部位は圖解の如く、配偶部位の上部にあつて、この部位は友人に對する信愛の情を司る所であるから、この部位の發達して居る人は、友愛の情が強く人に對して誠實温和であり、争つたり我儘勝手な行ひをするやうなことがないものであるが、反對にこの部位の發達の不完全な人は、我儘勝手に流れて友愛の情が薄く、交際なども好まず従つて人の集合するやうな所へ出掛けて行くことなどは嫌悪する傾きがある。又この部位の發達し過ぎて居る人は、自分のことは忘れて人の爲に盡すと云ふ風があり、犠牲心に富んで居るものである。曾てガル氏は、友人と一緒に居れば快活であるが、孤獨になると愛憎に傾いて病的になる、ある一婦人に就いて研究した結果、この友愛部位が半月状をなして長く大きく變態的に盛上つて居るのを發見したと云ふ例を述べて居る。而してこの友愛の情は、これを押廣めて行けば團體を形成する要素となるものであつて、國家社會を形成する人間の精神的要素も結局はこの部位に於ける器官の能力の發動によることになるのである。

### 第五節 血族部位の説明

血族部位は圖解の如く、愛兒部位の上にあつて、血族を愛する精神作用を司つて居る所であるから、この部位の適度に發達した人は血族を愛する情に富んで居り、従つて家庭の圓滿一族の和合を得るものである。而してこの血族を愛する情が進んで行けば、郷土を愛し、國家を愛する情に發達するものであるから、この部位の發達して居る人は又、愛郷心、愛國心にも富んで居る人である。これに反してこの部位の發達が不完全な人は薄情で、犯罪人などにはこの部位に缺陷のあるものが多いのである。

## 第二章 自衛機關に屬する部位の説明

自衛機關に屬する部位は、圖解の如く顛顚部に當る所で、額骨から耳の方へ弓の如き形になつて居る額骨弓の中央即ち截根と云ふ所から、上内側と乳様突起の上外側に當り、後頭結節の上一時の所からズット眉骨へ線を引いた範圍がこれに當るのである。而してこの部位には、生命、飲食、破壊、抵抗、秘密、理財、造構の七種の精神作用を司る器官があつて、各その部位が定つて居り、この

凡ての器官は生存競争に打勝つに必要なる自衛の働きを勤めるものである。以下節を別ちておの／＼の部位に就いて説明することにするから、前に掲げた骨相四十二部位の圖解と對照して了解せられたい。

### 第一節 生命部位の説明

生命部位は圖解の如く、耳の後にある所で、この部位は人間の生存の根元である生命を守る働きを司つて居る所であるから、この部位の發達して居る人は、自己の生命を大切にし、従つて攝生を重んじて亂暴なことをしないものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎて居ると死に對する恐怖が強くて卑怯に陥るものである。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、自己の生命を尊重する念が薄く、攝生自衛等の心が缺けて居り、自殺者などにはこの部位の發達の不完全なものが多いものである。

### 第二節 飲食部位の説明

飲食部位は圖解の如く、生命部位の反對の側即ち耳の前の所であつて、この部位は飲食に關する作

用を司つて居るから、この部位の適度に發達して居る人は、飲食に對して節制もよく趣味も優れて居るものであるが、この部位が發達し過ぎて居る人は、飲食に對する慾求が強くなつて節制を缺き、暴飲暴食に流れるやうになるものであり、これに反してこの部位の發達が不完全なる人は、飲食に對する趣味と云ふものがなく、何んでも飲食さへすれば良いと云ふやうな風に殺風景で没趣味になるものである。

偕この部位が飲食に關する器官の中樞であると云ふことを斷定した人は、ドクトル、フエリアーと云ふ人で、氏はこの部位に電氣をかけたたりその他色々な方法によつて研究した結果、これを斷定するに至つたのである。

### 第三節 破壊部位の説明

破壊部位は圖解の如く耳の上部に當つて居る所であるが、茲に破壊と云ふ意味は、人間が生存競争の社會に立つて打勝つて行くには、我れに向つて攻撃して來る敵を打破つて進んで行かねばならぬのであつて、この働さを指して破壊性と云ふのである。故にこの部位の發達して居る人は、元氣で攻撃力が強く従つて物事をズン／＼運んで行く實行家である。然し餘りこの部位が發達し過ぎて居ると、

亂暴に流れ、徳性を缺くに至る惧れがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、愚圖々々して元氣がなく、實行力に乏しい爲に一生頭が上らずに終るやうな惧れがあるから、努めて實行的氣力を養ふべきである。

### 第四節 抵抗部位の説明

抵抗部位は圖解の如く、破壊部位の後部生命部位の上の所であつて、この部位も人間が生存競争に打勝つて向上發展して行く働き、即ち抵抗力を司つて居る所である。故にこの部位の發達して居る人は、奮闘心が強く勇氣に富んで居つて、成功家の素質を備へて居るものである。然し餘りこの部位が發達し過ぎて居ると、口論争闘を好み人と争ひを起し易く、従つて家庭に於いても社會に立つても圓滿平和を缺いで身を過る惧れがある。これに反してこの部位の發達の不完全な人は、奮闘心に乏しく勇氣がない爲に失敗を招き易い憂ひがある。而してこの部位は自然の理として、一般に男子の方が女子よりも發達して居り、犖猛な動物は非常に發達して居るものである。

### 第五節 秘密部位の説明

秘密部位は圖解の如く、破壊部位の上にある所であるが、人間が世の中に立つて行く上に於いては自衛上秘密を保つと云ふことは必要なことであつて、何もかも明け放しであつては自己を守つて行くことが出來ず、失敗者にならねばならぬやうな結果に陥るものである。この部位は以上の如き自衛上必要である秘密性と云ふ精神作用を司る所であるから、この部位が適度に發達して居る人は、秘密を保つべきことゝその必要のないことゝをよく調節して行くことが出來て、世の中を巧みに渡つて行くものであるが、餘りこの部位が發達し過ぎて居る人は、掛引が強く平氣で僞を云ふやうな、所謂猫被りと云ふ型の人で、信用の出來ない人である。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、大事なことでも秘密が保てず、従つて自分を守ることにも出來ず、人からも信用を得ることにも出來ないことになるものである。

### 第六節 理財部位の説明

理財部位は圖解の如く、飲食部位の上に當る所であるが、この部位も人間の自衛上必要である精神

作用の一つである、勤勉貯蓄即ち貨殖性を司る所である。故にこの部位が適度に發達して居る人は業務に精勵し貯蓄心に富んで居つて財を積むものであるが、餘りこの部位が發達し過ぎて居る人は、吝嗇に流れ又は盜僻を持つ懼れがある。ガル氏は盜人の頭腦を調べた結果、この部位が異常に發達して居つた例を述べて居る。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、理財の才に缺け貯蓄心が乏しく、無益の散財をして富を失ひ一生貧乏に終る憂ひがある。

### 第七節 造構部位の説明

造構部位は圖解の如く、理財部位の前にある所であるが、この部位は物を組立てる能力を司る器官のある所であつて、この部位が發達して居る人は、物を組立てる能力に優れて居るから、工業家又は技術家などに適して居り、發明家にはこの部位の發達して居る人が多いものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎて居つて正義心が缺けて居る人は、賈物を作り不正を働くやうな懼れがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、物を組立てる能力に缺けて居つて不器用である。

## 第三章 智力機關に屬する部位の説明

智力機關に屬する部位は、圖解に示すが如く額部に當る所であつて、世間一般にも額の廣い人は智慧があると云はれて居る。而して同じ額部でも、上額の部位は主觀的智力即ちこれを俗に云へば高等な智力の働きを司つて居り、下額は客觀的智力即ちこれを俗に云へば下等な智力の働きを司つて居るものである。この章では下額即ち下等な智力を司つて居る部位に就いて説明することにしよう。この下等な智力を司つて居る各部位は、形状、個體、大小、輕重、色彩、秩序、計數、事實、位置時間、音調、言語の十二に別れて居るのであるが、この各部位の説明は簡單であるから、便宜上節を別けずして次に順次に説明することにしようから、前に掲げた四十二部位圖解と對照して了解せられたい。

▲形状部位 この部位は物の形態を認識する働きを司つて居る所であるから、この部位の發達して居る人は物の形や姿を見別ける能力が強く、人の顔などをよく見覺えるものであつて、畫家などにはこの部位の發達して居る人が適する譯である。

▲個體部位 この部位は物を觀識する働きを司る所であつて、これは椅子だとか机だとか、又は陶

器だとか漆器だとか云ふやうに見別ける能力は、この部位の器官の働きによるのである。

▲大小部位 この部位は物の大小を見別ける働きを司る所であつて、同じ机でもこの方が大きいとか小さいとか云ふやうに見別ける能力は、この部位の働きによるのである。故にこの部位の発達して居る人は、物の大小を見別ける力が鋭いものである。

▲軽重部位 この部位は物の軽いつかや重いつか云ふことを見別ける働きを司る所であつて、形状、個體、大小の部位の器官と共に働くものである。故にこの部位の発達して居る人は、一寸物を見てその重さを大體考へる力が優れて居るものである。

▲色彩部位 この部位は物の色彩を見別ける働きを司つて居る所であるから、この部位の発達して居る人は色彩に對する感じが鋭いから、畫家などに適することになるのである。西洋の生理學者で色盲に就いて調べた結果、この部位に缺陷があることを發見したと云つて居る人がある。

▲秩序部位 この部位は物の、秩序とか、階級とか、順序とかを立て、行く働きを司る所であるから、この部位の発達して居る人は、物事を整頓する性質が強く、萬事順序正しく運んで行くものであるが、この部位の発達が不完全な人は、無性で物事を整頓したり順序正しく運んで行くことが出来ないものである。

▲計數部位 この部位は計數の働きを司る所であるから、この部位の発達して居る人は諸算などに巧みである。然し代數とか三角とか云ふやうな高等な數理になると、比較とか推因とか云ふ高等な智力の働きによらねばならぬから、この計數部位が発達して居るだけでは人に優れると云ふ譯には行かぬものである。

▲事實部位 この部位は物の形態でなく事實を認識する働きを司る所であるから、この部位の発達して居る人は記憶力が強く、歴史などを覺へることに優れて居るものである。

▲位置部位 この部位は物の位置を調べる働きを司る所であつて、例へば東京はどう云ふ位置にあるとか、京都はどう云ふ位置にあるとか云ふやうなことを考へる働きをする所である。故にこの部位の発達して居る人は、地理の學問などに優れて居るものである。

▲時間部位 この部位は時を記憶する働きを司る所であるから、この部位の発達した人は、事件のあつた年代時日などを記憶する力が強く、矢張歴史などを覺へることに優れて居り、又時と云ふことを重んずる性質が強く、時間を無駄に費すことなどがないものである。

▲音調部位 この部位は音調を聞分ける働きを司る所であるから、この部位の発達した人は生來音樂を好み、從つて音樂に上達する能力がある。然しこの音調部位に就いては色々異説があり、ア



ウエルパツハと云ふ人は顛顛骨の鱗状部の所が音調部位に當ると云ふ説を主張して居るし、又メーピウスと云ふ人もこれ等の人と違つた説を主張して居る。

▲言語部位 この部位は圖解に示せる如く、目の下の所であつて、言語を發する働きを司る所である。故にこの部位の發達して居る人は雄辯家であり、反對にこの部位の發達が不完全な人は辯舌が下手で従つて寡言である。然し餘りこの部位が發達し過ぎて居ると所謂お喋舌りと云ふことになる。

### 第四章 意力機關に屬する部位の説明

意力機關に屬する部位は、圖解に示せる如く後項部に當る所であつて、人間が獨立し發奮して向上發展を計つて行く精神作用を司る所であるが、この部位は、持續、警戒、名譽、自尊、強硬の五部に別れて居つて、各部位がそれ々の働きを司つて居るものである。以下節を別ちてこれを説明することにすから、前に掲げた四十二部位の圖解と對照して了解せられたい。

#### 第一節 持續部位の説明

持續部位は圖解の如く、血族及び友愛の部位の上にある所であつて、この部位はネバリ強く物事を

持續して行く働きを司る所であるから、この部位の完全に發達して居る人は、忍耐力が強く物事をネバリ強く續けて行つて遂に目的を達するものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎて居ると、辛抱強く熱心ではあるが、兎角物事にこだわつて融通のきかぬ人になる憂ひがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、飽性で物事に移氣に流れ、一つの事を貫徹して行くことが出來ず、度々目的や職業を變更して、結局何事も成遂げることが出來ないやうな結果に終る憂ひがある。

#### 第二節 警戒部位の説明

警戒部位は圖解の如く、秘密部位の上部の所であつて、この部位は人間の行動に關して、無暴な進み方をしないやうに注意警戒する働きを司る所であるから、この部位が適度に發達して居る人は、萬事に就いて注意警戒して進んで行くものであるから従つて失敗が少ないものである。然し餘りこの部位が發達し過ぎて居る人は、臆病に流れて進取果敢の氣を缺き、物事に狐疑逡巡して機を失し、その結果成功を克ち得ぬ憂ひがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、無鐵砲に流れ所謂猪武者と云ふ風になつて、失敗を招くに至る憂ひがあるものである。

### 第三節 名譽部位の説明

名譽部位は圖解の如く、警戒部位の上部、自尊部位の兩外側にある所であつて、この部位は人間の名譽心の働きを司る所であるから、この部位が適度に發達して居る人は、自己の名譽を尊重して間違つた行ひをしたり、人間としての道を踏外すやうなことがないものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎた人は、名譽心に走り外の大望を企て、失敗を招くとか、所謂氣障な人間になつて人に嫌れる憂ひがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、名譽心に缺けて居る爲に、人間としての道を踏外しても、自分の利益になれば平氣で居るやうな、厚かましい人間になる憂ひがある。

### 第四節 自尊部位の説明

自尊部位は圖解の如く、名譽部位の上部にある所であつて、この部位は人間の自尊心の働きを司る所であるが、自尊心と云ふのは威張るとか偉がるとか云ふことではなく、自分と云ふものゝ價値を尊重して自重すると云ふことであつて、人間特有の精神の働きのである。故にこの部位の適度に發達して居る人は、人間としての自分の價値を重んずる爲に、獨立の念も強く徳を重んじ人の道を守る心も

固くて、自己の向上發展に努力して行くやうになるものである。然しこの部位の餘り發達し過ぎた人は、無暗に威張り散らしたり、偉がつたりして、人を見下すやうな風になり、人徳を失つて却つて失敗を招いて不遇に終るやうな結果になるものである。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、自分の價値と云ふことを重んぜぬ爲に、獨立心に乏しく卑屈に流れて、一生涯頭の上らぬやうなことになるものである。

### 第五節 強硬部位の説明

強硬部位は圖解の如く、自尊部位の前部、正義部位の上部にある所であつて、この部位は人間の意志の働きを司る所であるから、この部位の適度に發達した人は、意志の力が強く、堅忍不拔の精神に富んで居つて、物に動せぬ氣力があるものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎた人は、我意が強く、頑固我儘に流れて無理でも押通すと云ふ風になり、人和を缺いて運氣を損する憂ひがある。これに反してこの部位の發達が不完全な人は、意志が薄弱で、物事に確乎たる決心が着かず、心が動きがちに流れて物事を成遂げることが出来ぬものである。

### 第五章 推理直覺機關に屬する部位の説明

推理直覺機關に屬する部位は、圖解に示せる如く智力機關の部位の上部に當る所で、即ち上額の所であるが、この部位は人間特有の高等なる智力である推理及び直覺の働きを司る所であつて、この部位は、推因、比較、調和、鑑識の四つに別れて居り、各の部位がそれ々の精神作用を司つて居るものである。以下節を追うてこれを説明することにするから、前に掲げた四十二部位圖解と對照して了解せられたい。

#### 第一節 推因及び比較部位の説明

推因部位及び比較部位は圖解に示せる如く、位置部位及び事實部位の上部にある所で、この兩部位の働きは相關聯して居るものであつて、比較部位の働きは物に比較し概括してその結論を着ける働きを司るものであり、推因部位は物の結果を見てその原因を考へ、多くの事實を集めて一定の結論を下す働きを司るものである。これを換言すれば、比較部位の働きは演繹的であり、推因部位の働きは歸納的である。斯くの如く兩部位は相關聯して高等なる智力の根元となるものであるから、この兩部

位が發達して居る人は、哲學とか、論理學とか、高等數學とか云ふやうな、深遠精妙なる學術の研究に於いて人に優れて居つて、學者とか、思想家として立つことが出来るものであるが、この部位の發達して居らない人は、さうした高等な智力を必要とするには發達する望みがないものである。

#### 第二節 調和部位の説明

調和部位は圖解に示せる如く、推因部位の上部に當る所であつて、この部位は我を去りて自然に調和して行く精神の働きを司る所であるから、この部位の發達した人は、性格に圭角がなく圓滿性に富んで居つて、家庭的にも社交的にも我を張るやうなことがなく、平和圓滑に物事を運んで行くものであるが、この部位の發達が不完全で缺陷のあるやうな人は、兎角調和性に缺けて居つて、家庭的にも社交的にも物事の折合が悪く、圓滿に融和して行くことが出来ないものであつて、人生の幸福に恵まれることの出来ないやうな人が多いものである。

#### 第三節 鑑識部位の説明

鑑識部位は圖解に示せる如く、比較部位の上部に當る所で、この部位は人間の直覺力の働きを司

る所であるから、この部位の發達して居る人は直覺力が鋭く、所謂第六感の働きの人が優れて居るものである。而して普通には女子の方が男子よりも直覺力が強いものであるから、概してこの部位は女子の方が男子よりも發達して居るものである。

### 第六章 審美機關に屬する部位の説明

審美機關に屬する部位は、圖解に示せる如く項側部に當る所であつて、この部位は人間の美を意欲する感情の働きの司る所であるが、この部位は、美麗、宏大、模擬、諧謔の四つに別れて居つて、各部位がそれの働きの司つて居るものである。以下節を追うてこれを説明することにするから前に掲げた四十二部位の圖解と對照して了解せられたい。

#### 第一節 美麗部位の説明

美麗部位は圖解に示せる如く、造構部位の上部に當る所であつて、この部位は美を愛する感情の發する所であるから、この部位の發達した人は、心が高尚優美であつて詩人とか美術家などになるのに適して居るものであるが、この部位の發達が不完全な人は、美に對する愛慕の情が薄く、従つて心性

が卑しくなり人格に奥床しい所がなくて、實利に計り走るやうになるものである。然し餘りこの部位が發達し過ぎて居るやうな人々に、空想的に走つて自分の業務を忘れたり、奇人になるやうな憂ひがあるものである。

#### 第二節 宏大部位の説明

宏大部位は圖解に示せる如く、美麗部位の後部、理財部位の上部に當る所であるが、この部位は崇高偉大なる物に對する愛慕の情の發する所であるから、この部位の發達して居る人は、趣味思想が崇高雄大であつて、従つてその人の人格もこれに伴つて居るものであるが、この部位の發達が不完全な人は、兎角その人の人格の規模が小さいものであり、又餘りこの部位の發達し過ぎて居る人は誇大な想に流れる惧れがある。

#### 第三節 模擬部位の説明

模擬部位は圖解に示せる如く、美麗部位と調和部位との上部の所、即ち髪の生際の所に當つて居るが、この部位は物の眞似をする心の働きの司る所である。物の眞似をすると云ふことは人間の智識

の發達する基となるものであつて、小兒の智慧のついて行くのは他の眞似をすることから發達して行くものである。故にこの部位の發達して居る人は、他に同化して自分の智識を開發して行くものであるが、この部位の發達が不完全な人は、兎角一つ所に停滞して居つて進歩がなく、人の助言とか誘導とか云ふことを受入れられない爲に運氣を損することが多いものである。然しこの部位が餘り發達し過ぎて居る人は、心が定らず移氣に流れて運氣を損するものであり、殊に正義心に缺けて居るものは不正に陥り易い懼れがあるのである。

#### 第四節 諧謔部位の説明

諧謔部位は圖解に示せる如く、美麗部位の下、推因部位の外側に當る所であるが、この部位は、頓智、稽滑、快活等の心の働きを司る所であるから、この部位が適度に發達して居る人は、樂觀的で常に快活で世の中を愉快に暮らして行く得な人であるが、この部位の發達が不完全な人は、悲觀的に流れ嚴肅に過ぎて憂鬱に陥る憂ひがある。然し餘りこの部位が發達し過ぎた人は、慎しみがなく場所柄を考へずして禮儀を失ひ、人に卑み嫌れるやうになる憂ひがある。

### 第七章 道德宗教機關に屬する部位の説明

道德宗教機關に屬する部位は圖解に示せる如く、前頂部に當る所であつて、この部位は人間の道德心及び宗教心の働きを司る所であるが、この部位は、正義、希望、靈妙、尊崇、仁惠の五つに別れて居つて、その各の部位がそれ々の心の働きを司つて居るものである。以下節を追うてこれを説明することにするから、前に掲げた四十二部位の圖解と對照して了解せられたい。

#### 第一節 正義部位の説明

正義部位は圖解に示せる如く、強硬部位の兩側、希望部位の後部に當る所であるが、この部位は人間の正義心又は良心の働きを司る所である。故にこの部位の發達した人は正義の觀念が強いから、不正不義の行ひをするやうなことがなく、良心の働きが強固なものであるが、この部位の發達が不完全で缺陷のあるやうな人は、良心に乏しく正義の觀念が薄弱で、不正不義の行ひをしても耻としないやうな人間として劣等なものになる憂ひがあるから、大いに精神の教化修養に努めねばならぬものである。然しこの部位が餘り異常に發達し過ぎて居る人は、物事の是非に苛酷に流れ過ぎて度量が小さ

くなり、偏狹に流れて人に容れられないやうな片寄つた人になる憂ひがあるから注意を要するものである。

### 第二節 仁惠部位の説明

仁惠部位は圖解に示せる如く、尊崇部位の前部、模擬部位の上部に當る所であつて、この部位は人間の、博愛、同情、仁慈等の心の働きを司る所であるから、この部位の發達した人は慈悲心が強く社會の爲とか人類の爲とか云ふ風に、人を愛し救助して行く心が深いものであるが、この部位の發達が不完全な人は、薄情で冷酷に流れ、博愛とか同情とか云ふ心持ちがなく、自分の利害計り考へて人のことは構はぬと云ふ風になるものである。

### 第三節 希望部位の説明

希望部位は圖解に示せる如く、宏大部位の上部に當る所であつて、この部位は人間の希望抱負等の心の働きを司る所であるから、この部位の發達した人は、遠大なる希望抱負を持ち高尚なる目的を有して、常に活氣に満ちて樂觀的に進んで行くものであり、若し蹉躓失敗を招いても落膽してしまふ

やうなことがなく、再び勇氣を奮ひ起して努力奮闘して行く力があるものであるが、この部位の發達が不完全な人は、希望も抱負も小さく、若し一度失敗挫折するやうなことがあると、勇氣が沮喪してしまつて挽回する力を失つてしまふやうになるものである。然し餘りこの部位が發達し過ぎた人は、無暗に大きなこと計り考へたり、分外の野心を抱いて所謂山師になるやうな恐れがあるものである。

### 第四節 靈妙部位の説明

靈妙部位は圖解に示せる如く、希望部位と模擬部位との間に當る所であつて、この部位は人間特有の心の働きである靈妙なる想像能力の發する所で、靈能作用の優れて居る人はこの部位が他に優れて發達して居る人である。この微妙なる心の働きは動物には見られないものであつて、人間でも文明人程この能力が優れて居り、未開人になる程この能力は微弱なものである。

### 第五節 尊崇部位の説明

尊崇部位は圖解に示せる如く、希望部位と靈妙部位との上部に當る所であるのであるが、この部位は前節に於いて説明した靈妙部位の働きと相關聯して人間の宗教心の生ずる根元となる所であるから

この部位の發達して居る人は、宗教心が強く且その信仰の觀念も高尚であつて、人格に崇高な所があるものであるが、この部位の發達して居らぬ人は、宗教心に乏しく信仰の觀念も低級であつて、人格に於いても卑賤な所があるものである。従つて文明人程この部位が發達して居つて、その信する所の宗教も高尚であるが、未開人程この部位の發達が不完全で、その信する所の宗教も卑俗になるものである。又この尊崇部位は人を尊敬する心の働きを司るものであつて、この部位の發達して居る人は長者を尊敬し禮讓の心も強いものであるが、この部位の發達して居らない人は、人を尊敬する念が薄く、禮讓の心に缺けて居つて我儘勝手に流れ易いものである。

## 第十一編 人相秘傳

### 序 說

人相によつて人の運勢の吉凶盛衰を知る法を、文章を以て完全に傳へると云ふことは頗る至難のことであつて、これを傳へる方法は理想的に云へば、具體的に實例によつて、一々直接に口傳を以て傳へるのになければ完全とは云はれないのである。故に文章を以てこれを傳へやうとすると、自然複雑煩瑣に流れて、却て讀者を迷路に引入れるやうな結果に終る懼れがあるから、在來の説明の仕方にと微に入り細を穿つて説かねばならぬことになり、従つて廣汎龐大な著述になつてしまつて、本著の如く占筮術全般に亘つて樞要なる點を簡潔明瞭に説明しやうとする目的の著書に於いては不可能のことであつて、結局龍頭蛇尾に終つてしまつて、要領を得ないやうなことになる懼れがあるから、予は本篇に於いては讀者の日常の參考になるやうにと云ふことを主たる目的として、圖解などはこれを省略して肝要なる項目に就いて、在來の説明の方法に依らず、新しい試みを以て専門的の部位の名

稱などを用ゐずして、凡て、口とか、眼とか、鼻とか云ふ風に一般的の通稱を用ゐて、簡明直截と云ふことを主眼として説明を試みて見ることにする。果してこの試みが豫期の如き効果を擧げ得るかどうかは新しい試みであるだけに疑問であるが、予の意の存する所を讀者の了解せられんことを希望する次第である。尙、専門的に微り入り細を穿つた説明に至つては、他日運勢叢書の中の一巻として「觀相學精義」の表題の下に發表する考へである。

### 第一章 容姿より見たる人の運勢

容姿は全體の感じが正しくして威儀が備り、然もそれに自然に暖味を持つて居るのを吉相とするが姿勢正しきを缺き人に親しみの感じを與へないやうなのは凶相である。以下色々の點から容姿に就いての吉相と凶相とを説明することにする。

- ▲坐して膝頭の廣がる者は心の定りたる人で、物事に動せず、福分ありて成功の望みがある。
- ▲坐して尻落着く者は心に定りありて福分に富み、往所職業の安定を得る人である。
- ▲歩行の際大船の進む如くゆつたりと歩む人は、福分徳分があつて發達する人である。
- ▲歩行の際側目をふらず眞直に歩む人は心に曇りがなく、福分ありて一生安定を得る人である。

▲眠りてたわいなき様に見ゆる人は心に蟻りがなく、福分ありて人の助けを得る人である。

▲歩行の際道路の中央を歩む人は志望大にして發達する相であり、縁を歩む人は心貧しくして失敗衰微を招く相である。

▲歩行の際仰いで歩む人は心氣高大にして福分があり、成功を得る相であるが、稍もすると傲頑不遜に流れて中途で破れを招く憂ひがあるから注意を要する。

▲坐して膝頭をすばます者又は尻の落着かぬ者は心定らず、従つて住所職業が一定せずして成功の望みがない人である。

▲坐して身體を動かす者は心氣弱く、従つて辛勞事多く愚痴に流れて志望を達する望みのない人である。

▲坐して亂れ崩るゝ者は、心に縮りなく成功の望みのない人で、特に女にあつては色情強くして身を過り、縁運の悪い象がある。

▲坐して息づかひ苦しき者は身體虛弱にして短命である。

▲歩行の際足を地に踏付けぬやうに見える人は、心定らず色慾強くして下賤の相である。

▲歩行の際きよ／＼と側目をする人は下賤の相で、大望を達せず縁運定らざるものである。



- ▲歩行の際俯して歩む人は心倭姦にして下賤の相であり、大事を遂げ大功を擧げることを得ざる人である。
- ▲首を傾けて歩む人又は走るが如く歩む人は、下賤貧相にして心定らず、成功の望みのない人である。
- ▲眠りて貧弱に見える人は、心に辛勞絶えず妻子の縁薄くして、物事の調はざる人である。
- ▲眠りてあかく人は心定らずして志望を達せざる人である。
- ▲枕を外して眠る人は下賤の相で、一生發達の望みのない人である。
- ▲口を開いて眠る人は根氣薄くして苦勞絶えず、口を堅く閉ぢて眠る人は心強くして成功の望みある人なるも、心に工みありて油斷の出来ぬ人である。
- ▲高鼻をかく人、常に寐言を云ふ人、齒ざしりを噛む人は凡て下賤の相で、心定らざるか、苦勞多きか、望み事の叶はぬ人である。

### 第二章 音聲より見たる人の運勢

音聲はその人の性質氣分を現すものであつて、従つてこれによつてその人の性格運勢を知ることが

出来るものである。以下これに就いて説明することにする。

- ▲音聲正しく清き人は、性質も正しく富貴を得る人である。
- ▲身體は小さくとも音聲大なる人、又、身體強大にして音聲も強く雄き人は、心深く強くして大成する人である。
- ▲音聲の丹田より出で、力強き人は富貴發達を得る相である。
- ▲言語の窗切れの良い人は、善にも悪にも強い性質の人である。
- ▲音聲の濁りたる人は心正しからずして下賤の相である。又吃る人は小心にして愚痴な人が多いものである。
- ▲音聲の頭の頂きより出るやうな人は下賤の相で、一生苦勞多く發達の望みのない人である。
- ▲銅鑼聲の人又は早口の人下賤の相で發達の望みのない人である。
- ▲返事早きに過ぐる人は心淺く、大成の望みなき人である。
- ▲人と話をする時に無暗に手振り又は身振りをする者には、心に眞實なく虚言を吐く者が多いものである。
- ▲音聲の調子高きに過ぐる人は、心に徳なく、財を散じ家を破るものが多いものである。

▲人と話をする時に、眼と眼と相對せずして切口上を使ふ人は、理屈つぼくして心に毒のある人が多  
いものである。

▲無暗に溜息をつく人は根氣薄く短氣にして、成功の望みのない人である。

▲その他、聲輕き者、浮き散する者、低き者、小さくして咽ぶが如き者、言語亂れて枯聲なる者、強  
さも圓みなき者等は、凡て下賤の相で成功發達の望みなき人である。

### 第三章 顔の形より見たる人の運勢

顔の形は千差萬別であつて、長い者があり短い者があり、丸い者があり、四角い者があつて、一つ  
として同じ形の者はなく、實に造化の精妙なものには驚嘆の外はないのであるが、この形の差違によつ  
て人の性格運勢にも差別を生ずるものであるから、以下これに就いて説明することにする。

▲顔の形が四角であつて餘り角張らず、肉の豊に肥えた人は吉相で生涯幸福に暮す人が多  
いものである。

▲顔の貌の長方形の人は、男女共に吉相で福運もあり殊に長生きの相であるが、餘り深窓に流れるや  
うなことがあると末に亂れを招く恐れがあるから慎しみが肝要である。而して長過ぎたり瘦せ過ぎ

たる人は吉相とは云はれず、却て凶相となるものである。

▲上部が大きく下部の小さい、三角形を上向けたやうな顔の人は、初運は良いが晩運は良くないもの  
であるから、調子に乗つたり油断に流れぬ心掛けが肝要である。

▲おかめ面のやうに末の廣がつて居る人も、初運は良いが後運の良くないものであるから注意が肝要  
である。

▲上部が小さく下部の大きい、三角形のやうな顔の人は、初年は不運で辛勞困難が多いが、努力奮勵  
すれば中年頃より幸福に向つて來るものである。然し努力を怠れば一生頭の上る望みがないもの  
である。

▲丸顔の人は才氣愛嬌があつて吉相であり、福分に富むものであるが、人間のタイプが小さくなる憂  
ひがあり、特に全體の形が小さく丸きに過ぎる人にこの傾きが多いものである。

▲顔瘦せて身體肥りたる人は性質が冷静で長壽の人が多  
いものである。

▲年齢に比較して顔の若く見え過ぎる人及び老けて見え過ぎる人は何れも凶相であつて、貧賤にして  
成功の望みが少ないものである。

▲顔肥りて身體瘦せた人は、病弱で短命の相である。

### 第四章 眼より見たる人の運勢

眼は人相に於ける各部位の中で最も活動性の部位であり、美醜善悪凡ての物をこの鏡に映して見るものであるから、最も外界の刺激を受けることが多く、従つてその形状の上に最もその人の性格運勢が現れるものである。以下これに就いて説明することにする。

▲眼は全體として清く涼しくその上潤ひのあるのを吉相とする。

▲眼の形細長くして心持ち目尻の上つたのを吉相とし、かう云ふ眼の人は心清く温情に富み福分ありて成功を得る相である。

▲眼は黑白分明にして、瞳孔虹彩共に一點の疵の無いのを吉相とし、かう云ふ眼の人は心正しく明かにして智力優れ、人の上に立つことが出来るものである。

▲眼の形丸くして明かなる人は、富貴にして長壽を保つものである。

▲眼小さくして明かなる人は孝心に富みて親の縁良く、眼長くして明かなる人は富貴にして長壽を保つものである。

▲眼の大きい人は概して大膽であり、眼の小さい人は概して小心であるが、眼の餘りに大に過ぎる人は大きい仕事をする代りに、稍もすると山師に流れたり謀反心を持つ惧れがある。

▲眼に故障缺點のある人は兎角親子の縁の薄いものであり、左の眼に故障のある人は父親に縁が薄く右の眼に故障のある人は母親の縁が薄いものである。又親から云へば左の眼に故障のあるものは男の子に、右の眼に故障のある人は女の子に縁の薄い傾きがあり、兄弟で云へば、左の眼の故障は男の兄弟に縁が薄く、右の眼の故障は女の兄弟に縁の薄い傾きがある。

▲眼の大なる人は男女共に色情の禍ひを招き易く、女は特に夫又は子を剋する惧れがある。

▲四角形の眼の人は富貴の相であるが、三角形の眼の人は心の佞奸なるものが多いものである。

▲餘りに眼の短小に過ぐる人は性急にして貧賤の相である。

▲白眼が黒眼に比例して大に過ぐる人は、盗心があり親を剋し妻を剋する凶相である。

▲眼に血筋の多い人は孤獨にして財を破り、色情の禍ひを招く憂ひがある。

▲瞳定らず常に上下左右に動く者、又は常に上眼を使ふ人は邪心があり、盜癖を有する惧れがある。

▲目尻が魚の尾のやうに垂れた人や、二重瞼の人は淫亂の相で、貞操の觀念の薄い人が多いものである。

▲目尻の筋上りたる人は妻子に苦勞を掛けること多く、目尻の筋下りたる人は才能薄く發達の望みの少ない人である。

▲目尻に缺陷があり釣上りたる人は不敵の心を持つものである。

▲目尻の丸き人は財を保ち難く色情の禍ひを招く憂ひがある。

### 第五章 鼻より見たる人の運勢

鼻は顔の中央にありて中心となり、最も人の目を惹くものであるから、人相上その人の性格運勢を判断するに重要な部位である。以下これに就いて説明することにする。

▲鼻は高からず低からず中庸を得て居り、肉豊かにして鼻筋が通り、小鼻も大に過ぎず小に過ぎずして丸みのあるのを吉相とし、かう云ふ鼻を持った人は、金運があつて一生を幸福に過す人である。

▲鼻が堅くしつかりとして居る人は身體が強壯で長壽であるが、鼻の柔い人は心優しく情に富んで居るけれども、身體が虚弱で短命である。

▲反り鼻と云つて鼻の反つて居る人は孤獨の相である。而して男子で反り鼻の人は、妻子に對して苛酷な人が多いものである。

▲段鼻と云つて鼻の中途に段のある人は、中年前頃に一身上に變動を生ずる象があり、多病孤獨で金運に乏しいものである。

▲餘り鼻の高過ぎる人は我が強く、人和を缺きて孤獨に陥り、運氣の發達を妨げるものである。

▲鼻の小さい人は自尊心に乏しく、氣が弱くして運氣を損じ、金運も薄いものである。

▲鼻の捻ねくれて曲つた人は、心も捻ねくれて曲つて居るものである。

▲鼻の先の赤い人は、野心が強く詭計を弄する性質があり、又妻子に縁薄く苦勞の多いものである。

▲驚鼻と云つて鼻の先の尖つて曲つて居る人は、慾張りで冷酷な性質である。西洋ではこれをジュウ

ス鼻と云ふことはよく人の知つて居る所である。

▲鼻が安坐をかい居る人は、剛情であつて人徳に乏しく、妻子血族に縁の薄い人が多いものである。

▲鼻の穴の大きい人は金の溜らぬ象があり、小さい人は吝嗇である。鼻の穴は小判形をしたのを最も吉相とする。

▲小鼻の大きい人は身體が強壯で福運もあるものであるが、小鼻の小さい人は身體が虚弱で福運にも乏しいものである。

### 第六章 口より見たる人の運勢

口は人間の意志を發表する器官であり、眼に次いで活動性のものであるから、人相上重要な部位の一つである。以下これに就いて色々な點から説明することにする。

▲仰月口と云つて、三日月を上へ向けたやうに兩方の端が持上つて居るのは吉相であつて、かう云ふ口の人には富貴にして向上發展する運勢がある。

▲四字口と云つて、口の形がよく整つて居る人は、聰明にして才智に富み、富貴發達を得るものである。

▲口が小さくして美しい人は、學者とか美術家として成功する素質があるものである。

▲唇が大きく横に張つて居り、しつかりと結んで怒つたやうに見えるのは、意地が強く元氣があつて活動家である。

▲唇が大きくて厚ぼつたい人は金運のある相であるが、好色家である。

▲覆舟口と云つて、舟底を上にしたやうな形で、唇の兩端が垂れて居る人は、薄運で悲觀的に流れ、縁運、子供運が悪く、晩年を淋しく暮すものである。

▲唇の厚く大きい人は愛情が強いが、小さくて薄い人は愛情に乏しいものである。然し餘り厚く且大きくて嫌みに感ぜられるものは下賤の相である。

▲唇の形が整ひ愛嬌があつて然も締りを失はない人は、快活で心も清く、夫婦間が圓滿で家庭の治まる人である。

▲唇から顎へかけて締りのある人は意志が強いものであるが、唇や顎が小さくて締りがなく、口をぽかんと開けて居るやうな人は意志の弱い人である。

▲下唇が引込んで上唇の出張つて居る人は、我意が強く兇暴性を帯んで居るものである。然し男子は幾分下唇が上唇よりも小さい方が吉相で、女子は反對に幾分下唇が上唇よりも大きい方が吉相である。

▲唇が赤みを帯び堅く結んで居るものは吉相で、心の強い中に優しみを持つて居るものであるが、赤みがなくて堅く結んで居る人は、冷酷で無慈悲な人が多いものである。

▲齒並揃つて居て美しい人は吉相で、幸運の人であるが、齒並揃はず亂杭齒の人は凶相で家庭運の悪い人であり、又出齒の人は派手好で出しや張り者が多いものである。

▲齒の悪い人は、初年は幸運であつても晩年は不運に終る人が多いものである。

- ▲上下の唇が特別に大きくて反返つて居るやうな人は、性質が殺伐で、不幸短命に終る憂ひがある。
- ▲上下兩唇共に適度に厚いのは吉相で心の誠實な人であるが、上下兩唇の薄きに過ぐる人は心に誠實がなく、虚言家で子供の縁の薄いものである。
- ▲火吹口と云つて、火を吹く時のやうな形の人は凶相で、一生涯辛勞が多く貧賤に終るものである。
- ▲上唇の反返つて居る人は凶相で、性質が粗忽であり、薄運にして特に子供の運が薄いものである。

### 第七章 眉より見たる人の運勢

- 眉は眼と共に人相上重要な部位であつて、西洋人は眉を以て心の符牒であると云ひ、日本では文野の別を観ると云つて居る。以文これに就いて説明することにする。
- ▲眉の美しい人は吉相で、親子兄弟の縁がよく、生涯を幸福に暮す人である。
- ▲眉の美しい人は智識が優れ、性質も優美高尚であるが、眉の醜い人は智識が劣り、性質が粗野である。
- ▲眉が高く着いて居る人は精神的の人で、低く着いて居る人は物質的人である。故に眉が高く着いて居つて新月のやうに美しい人は、思想が深くして宗教心道徳心に富むものである。

- ▲長男の眉は割合に薄く、次男三男の眉は割合に濃いのが普通である。
- ▲眉の大なるものは膽力が大きく、眉の小なるものは小膽なものである。
- ▲眉の形が醜くかつたり、薄かつたり、短かつたりする人は凡て薄運で、金運がなく、親子兄弟の縁も薄く、壽命も短命である。
- ▲眉の長い人は吉相で、運も強く親子兄弟の縁も良いものである。
- ▲眉頭の上りたる人は、大膽であるが争論を好む惧れがある。
- ▲眉毛の荒き人は兩親妻子に縁の薄いものである。
- ▲眉の八の字の形をした人は心強く、一の字の形をした人は智慮が深いものである。
- ▲眉毛濃きに過ぐる人は疑ひ深く辛勞の絶えぬ象がある。
- ▲眉の太くして短き人は、性質が急激で不運の人が多いためである。
- ▲眉毛に間断缺陷のある人は、早く親に別れ兄弟仲悪しく、妻子と離散する憂ひがある。
- ▲眉迫り眼と眼との間より生ずるが如き人は、短慮にして妻縁薄きものである。

### 第八章 耳より見たる人の運勢

耳は人相上に於ける各部位の中で、人間の意志によつて動かすことの出来ないものである。故に耳は後天的の影響によつて變化することがなく、従つて遺傳的先天的の人間の性格運勢を表示するものである。即ちこれを解り易く云へば、生來持前の性質とか運勢を現すものである。以下これに就いて説明することにする。

▲耳全體の形が整ひ、上部と垂珠とが豊かで美しい人は、父祖の遺傳の良い人であつて、幸運にして福分がある。

▲左右の耳が揃つて居つて、美しく豊かな人も、矢張り父祖の遺傳の良い人で、心身共に圓滿に發達して偉大なる人となることが出来る。

▲耳の大きい人は自信力が強く、發達する運勢があるが、餘り大き過ぎる人は悪心を抱く惧れがある。  
▲耳の小さい人は自信力が乏しく、従つて意志も薄弱であつて兎角心定らず、物事に移り動き易い爲に成功發達の望みが少ないものである。

▲耳の上部が廣くて下が小さく、左右の耳を合せると三角形のやうになる人は、身體の弱い憂ひがあ

るが、學問、音樂、美術等には發達する素質があるものである。

▲耳が長くして確かりして居り、内耳輪の飛出して居るやうな人は、元氣があつて活動家である。

▲耳が割合に上つて着いて居る人は、高等なる智力感情が發達して居る人であるが、反對に耳が割合に下つて着いて居る人は、下等なる智力感情の發達して居る人である。

▲天輪と云つて耳の上部が、尖らずに平たく耳の根元から出て居る人は智力の發達した人であり、天輪が後へ反返つて居るやうな人は自尊心が強く威張家である。又天輪が尖つて居る人は性質の亂暴な人が多いものである。

▲耳全體が尖つた人は、殘忍性を帯びて慈愛の心に缺けて居るものである。

▲垂珠の豊かで大きい人は幸運で福分に富んで居るが、垂珠が小さくて貧弱な人は、孤獨薄運の相で特に福分の乏しいものである。

▲耳柔かくして低き人は智力の劣つた人である。

▲耳の輪知くして縮みたる人は、物覚えが強く風雅の心を持つものである。

▲耳薄くして輪廓明かならざる人は、中年迄に居所職業定らずして流浪する憂ひがある。

▲耳の中に毛の生じたる人は、健康にして長壽を保つものである。

▲耳の動く人は畜生耳と云つて、産を破り身を過つ憂ひがある。  
 ▲耳小なるも缺陷なく、向つて見えざる人は威儀備りて名を爲す人である。

### 第九章 額及び顎より見たる人の運勢

▲額廣くして秀いで且光澤ある人は、智力優れ官祿備り福分に富むものである。  
 ▲額狭くして肉薄く、光澤なき人は卑賤の相で、物事成就せず薄運の人である。  
 ▲髪の生際に缺陷ある人は薄運の相で、特に女は再縁する象がある。  
 ▲額の中央の肉豊かにして光澤あるは、幸運の相で特に目上に引立を受ける運勢があるが、反對に肉落ちて光澤なき人は、目上に嫌れ辛勞の絶えざるものである。  
 ▲印堂即ち眉と眉との間が、豊にして明なる人は、吉相にして發達を得、福分に富むものであるが、この部位に缺陷のある人は、身内の縁薄く萬事に薄運である。  
 ▲顎の肉豊かにしてむつくりとせる人は吉相で、福分に富み發達を得るものである。  
 ▲顎重りて所謂二重顎の人は吉相で、晩年に幸福を得るものである。  
 ▲顎短く肉薄き人は凶相で、物事の成就せぬ人である。

▲顎の反りたる人は目下より災ひを招き易く、顎の後に引きたる人は性質が疎忽で發達の望みの少ない人である。

▲顎の骨の突起せる人は、理屈つぼくて人と和合を缺き、特に目上と折合ひ悪くして、成功の望みのない人である。

▲顎短小にして無きが如く見える人は、心淺く短慮にして成功の望みのない人である。

以上に於いて人相上に於ける重要な部位の説明を終つたのであるが、人相は生來吉相の人でも、生れてから後の修養を缺き、荒みたる生活を送れば凶相に變ずるものであり、反對に生來凶相の人でも、生れてから後の修養と心の徳を磨くことによつて吉相に變せしむることが出来るものであるから、吉相に生れ付いた人でも油断したり行ひを亂すやうなことなく、凶相に生れ付いた人でも悲觀して自暴を起すやうなことなく、共に修養を積み徳を磨きて、自己の人格の向上と運勢の發展を計る心掛けが肝要である。



埃國 コーム氏原著  
日本 松軒永峰秀樹先生譯

# 性相學原論

菊判クローヌ洋裝  
紙數九百六十餘頁  
定價金五圓

現代は何事も科學的基礎に基く研究に非ざれば權威あるものとは云へぬ、性相學は東洋古來の觀相其他の術と異なり、人類の腦間位説と心性機關とを確定し、それによりて各人の特質嗜好性癖等を知悉し、且つ其運命に及ぼす影響等を豫知明斷なし得る科學的解釋の學問なることは今更贅辯を要しない、本書は斯學の經典とも云ふべきコーム氏の性相學原論を翻譯したるものにして、譯者は嘗てギゾウの文明史を譯し洛陽の紙價を高からしめたる松軒永峰秀樹先生なれば其譯文の忠實妥當なるは云ふ迄もなく、且つ先生が老後の一事業として其豊富なる學識と經驗ある翻譯の才筆を振はれ、二年有餘の歲月を費して完成せられたるものなれば、我國性相學界に於ける最も權威ある一著者である、苟くも政治、法律、經濟、教育、感化、懲治、倫理、道德、宗教等の各方面に携はる人々は勿論、卜占、觀相其他人の運命を判斷せらるゝ諸君の良參考書として敢て推奨する次第である。

# 第十二編 手相秘傳

## 序 說

手相學の起源は非常に古いものであつて、既に古代印度に於いて研究せられて居つたことは、文獻によつて明かであり、これが世界の國々へ傳へられ、その國々の民族の考へが加へられて多少の變化を生じたのであるが、今日の如き手相學の明確な組織が出来上つたのは、これを希臘文明の賜物に歸せなければならぬ。希臘に於いては、大哲學者アナクサゴラス、アリストートル等を始め、多くの碩學鴻儒がこれを研究して、その結果を發表して居るのである。斯くの如く手相學の研究は古代に於いては盛大であつたのであるが、中世紀に至つて基督教の壓迫を受けて、一時衰微を見るに至つたのである。然しその後中世紀の末葉に至つて再び復興の萌芽を發して來て、近世に入つて色々な研究が現れて益盛大に向ひつゝある状態である。予はこれ等の手相學の沿革等に就いても委しく述べたのであるが、本書の目的とする所はさうした學說的の方面ではなくして、實際的な應用の方面にあ

るのであるから、茲には單に概説に止めて、これを他日の機會に譲ることにし、直に實際的方面の説明に移ることにする。然し本著はこれ迄度々述べたる如く、占筮術の全般に亘つて骨子となる點を簡明に説明するのが本來の目的であるから、微細に亘つた點は、他日發表の豫定である運勢叢書中の「觀相學精義」の篇に於いて委しく説明することにし、本篇に於いては最も重要にして且讀者の日常生活の參考となる事項に就いて、極めて平易を旨として説明することにする。

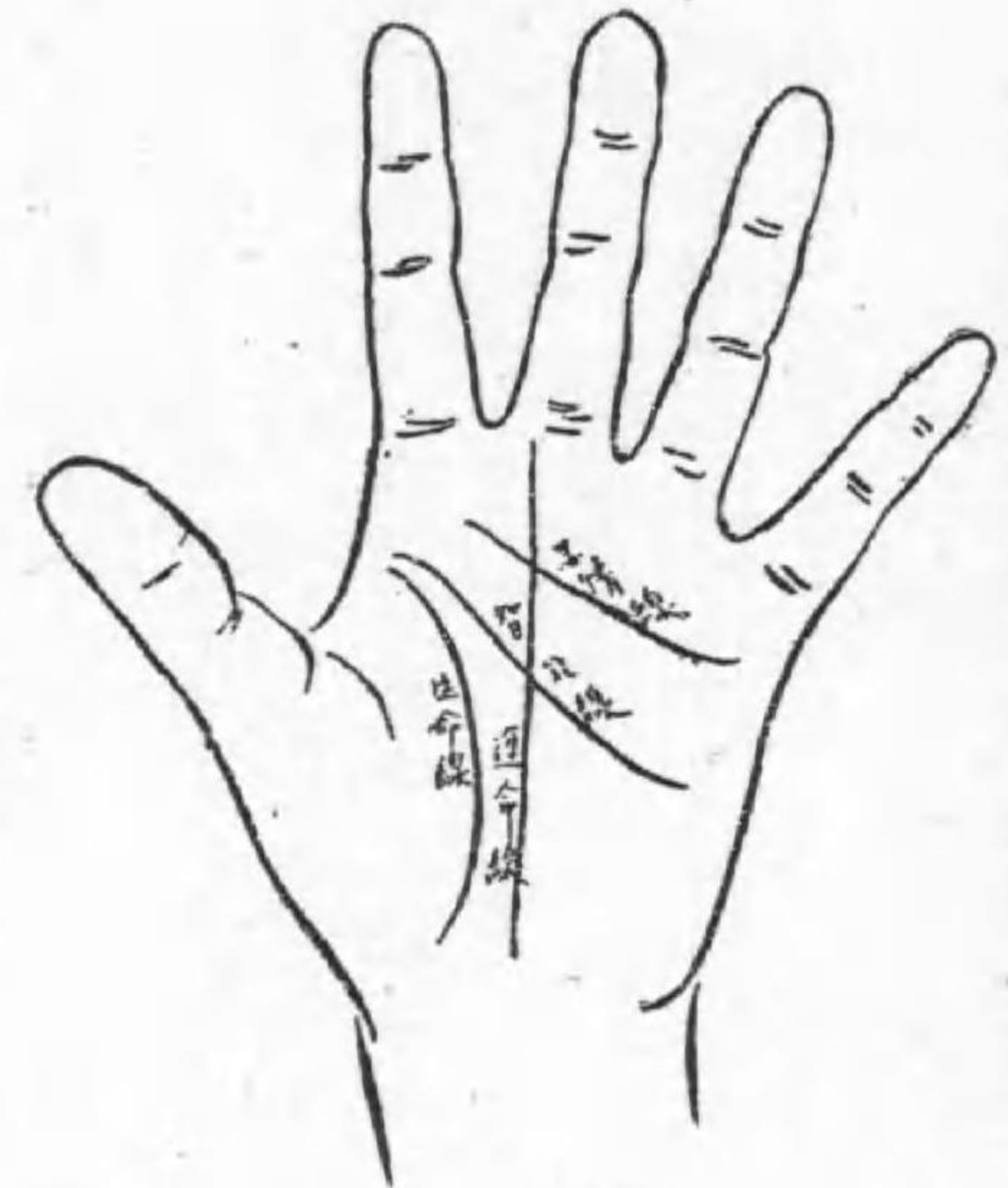
### 第一章 手相に於ける主要線の説明

手の線は手相學上重要なる一部門となつて居つて、これを委しく説明すると、七つの重要な線と、同じく七つの小線とがあつて、その形狀又は色彩等によつて、人間の運命の吉凶盛衰を論ずるものであるが、これを詳細に亘つて説明することは、本著の性質上不可能のことであり、従つて意餘つて筆足らざる結果に終つて、却て讀者をして迷路に彷徨せしむるやうなことになる懼れがあるから、詳細なる説明は他日發表する豫定である。

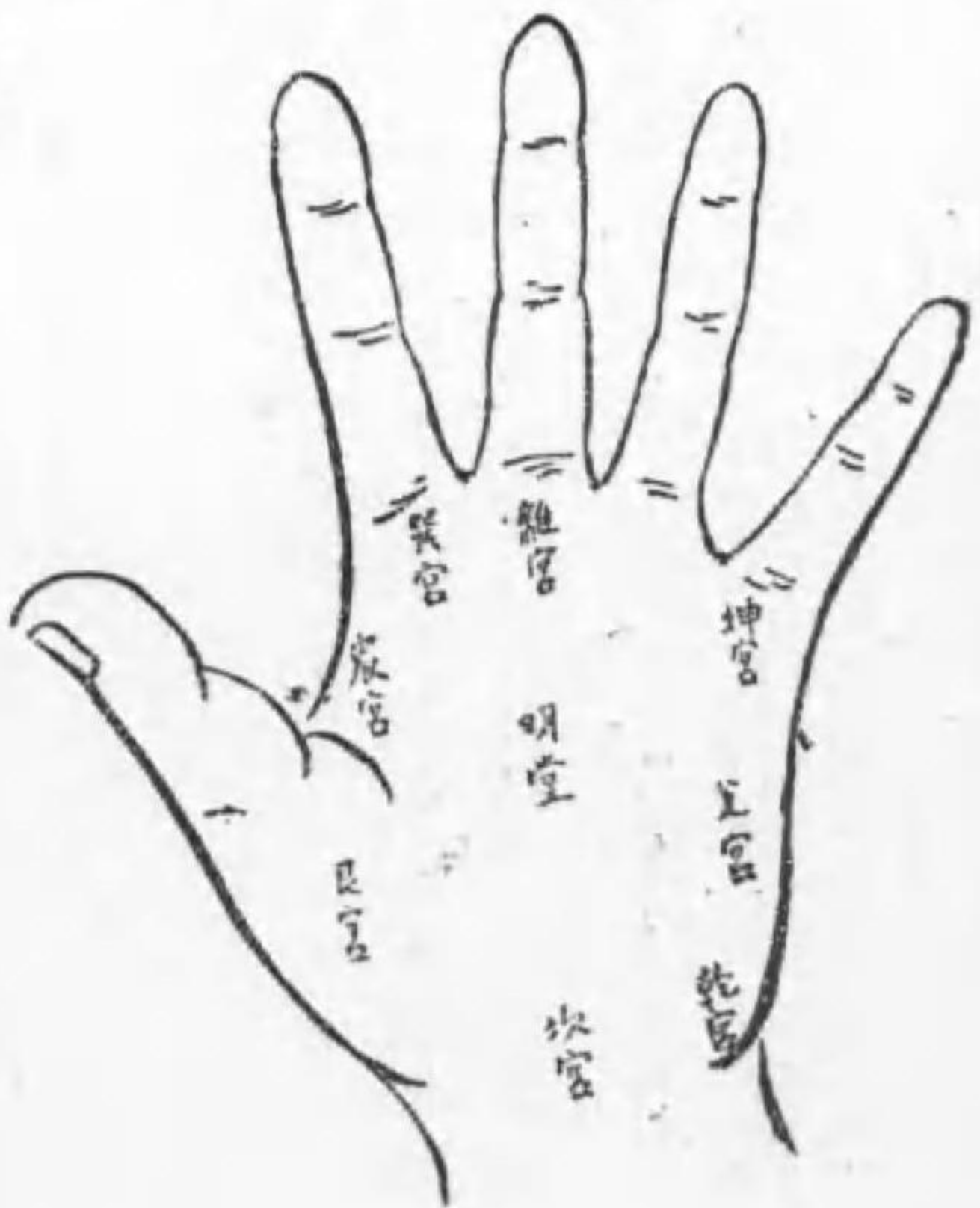
要なる四つの線、即ち、感情線、智能線、生命線及び運命線に就いて説明することにする。

今茲ではその中の最も主

(第一圖) 手相に於ける主要線の圖解



(第二圖) 手相八宮の圖解



#### 第一節 感情線に就いての説明

感情線と云ふのは、手掌の中で最も指の方へ近い部位にある線で、即ち人差指の根元の下の所から、小指の下の方向へ向つて走つて居る線のことである(第一圖参照)。食線又は心の線とも云ひ、日本の手相

學では天紋と稱するものに當る線であるが、この線は人間の感情に關する色々な事柄を表示するものであつて、従つてその形状又は色彩によつて、愛情、戀愛、家庭上の關係、職業等に就いての運勢を現すものである。以下これ等の點に就いて説明することにする。

▲感情線は深くして明瞭なるを吉とし、かう云ふ線の人には、感情が高潔で、従つて運勢も幸福である。

▲感情線は人差指の根元を起點とするのであるが、この起點が高い程吉相であつて、斯う云ふ線の人には愛情が強く且高潔で結婚運が良いものである。

▲感情線が人差指から起る場合には、愛情が強きに過ぎ盲目的に陥る憂がある。

▲感情線が中指と中指との中間から起つて居る人は、愛情の程度が穩健なものであるが忍耐心に乏しい憂ひがある。

▲感情線が全く同形同大の枝に分岐して居る人は、心の誠實なる人で信用して良い人である。

▲感情線が中指の根元より起り、銷狀をなし或はその進路を數多の小線で切斷せられて居る人は、愛情が一定せず常に心の移り動く人で、所謂浮氣な人である。

▲感情線が手の一端から他の一端迄走つて居る人は、感情の非常に強い人で、嫉妬心の深いものであり、若しこの線が掌の外部迄延長して居るやうな場合には、一層嫉妬心が強いものである。

▲感情線が智能線及び生命線と密接に結合せる人は、慘死の懼れがある人である。

▲感情線が小指の方向へ向つて、數個に枝狀に分岐して居る人は、父祖の業を繼がざるか、他家へ養子となる相である。而してこの場合女子にあつては縁の變る人である。

▲感情線が繼續せるか又は他の一個の線によつて切斷せられて居る場合は、家産の散逸、業務の失敗を現すものである。

▲感情線の短い人は職業の定らぬ人であり、又何等の支線がなくて細い人は、愛情に乏しくして冷酷な人である。

▲感情線の傍に更に一個の類似の線が存在する時は、男子は目上の保護を受ける相であり、女子は善良なる子女を設くる相である。

▲左右の手掌を小指の側で接合させた場合に、兩方の感情線が合致する人は、幸運の人で願望の達する相である。

▲感情線の中央で弓形に彎曲して居る人は、物覺えも迅い代りに忘れることも迅く、物事の終りを全うせぬ人である。

▲感情線が末端に近づく程益細くなり、且何等の支線をも出して居らぬ人は子供の縁の薄い人であ

▲感情線が普通よりも手掌の下部にあつて智能線に接近して居る人は理性に乏しくして感情に走る人であり、これと反對に普通よりも手掌の上部にあつて、智能線がこれに接近して居る人は、感情に缺けて居つて冷酷無慈悲に流れる人である。

▲感情線が太くて強く、起點に於いて生命線及び智能線と長く結ばれて居つて、末端が分れて枝になつて居る人は、我々が強く無理を押し通さうとする傾向の人である。

▲感情線が眞赤な色を帯んで居る人は情慾の激しい人であり、着味を帯んで居る人は冷淡な人である。

▲感情線の内部に黄色赤色又は紫色を呈した時は吉兆であり、黒色を現した時は凶兆であり、青色を示した時は病難の相である。

## 第二節 智能線に就いての説明

智能線と云ふのは、拇指と人差指との中央から、手掌の眞中を斜めに小指の側の方へ向つて走つて居る線のことである(第一圖参照)、自然線又は主線とも云ひ、日本の手相學では人紋と稱するものに當つて居る線であるが、この線は人間の精神及び頭腦の状態を現すものであつて、従つてその形状又は色

彩によつて、智力の優劣、性格の長短、才能の方向等を知ることが出来るのである。以下これに就いて説明することにする。

- ▲智能線が長くして眞直なる人は、健全なる判断力と強固なる意志とを持つて居る人である。
- ▲智能線が眞直にして明瞭で且平滑なる人は常識に富み、精神的のことよりも物質的のことを愛好する傾きがある。
- ▲智能線が眞直に手掌を横切つて貫通して居る人は、利己主義の人で金銭に對して特に慾求が強く、實業家として成功する素質がある。
- ▲智能線の尖端が分岐して居る人は不誠實であり、手掌の中央で消失して居る人は優柔不斷である。
- ▲智能線と生命線とが程よく離れて居る人は、自信力に富み機敏なるものであるが、密接して居る人は、自信力に乏しく小心で神経過敏である。
- ▲智能線が長くして尺骨の側に達して居るやうな人は、両親及び子女に縁が薄く、反對に短くして淺く且廣い人は金運がなく、長壽が保てないものである。
- ▲智能線が所々で繼續して居る人は、一生涯の中に重病に罹り又は不幸に遭遇する憂ひがある。
- ▲智能線の尖端が、手の關節の小指の側に向つて分岐して居るものは、他家に養れる相である。

▲智能線が普通の人の如く、手掌の尺骨の側に向つて孤状に走らずして、感情線と平行に横走して居るやうな人は、性質が愚鈍で卑劣な根性を有する人である。

▲智能線が一線をなさずして數線より成れる人は、目的計劃成功せずして流浪者として一生を終る憂ひがある。

▲智能線の上半部が眞直で下半部が稍傾斜して居るやうな人は、精神的と實際的との平衡を得た人で、公平なる精神を有し、常識的に物事を運ぶ人である。

▲智能線の全體が稍傾斜して居る人は精神的の傾向を持ち、甚しく傾斜して居る人は、空想的に走り放縱に流れる懼れがある。

▲智能線が異常に短くして漸く中央に達すると云ふやうな人は、精神上の智能に缺けて物質的に走るものである。

▲智能線が鎖状をなして居る人は、思想一定せず決断力に乏しい人である。

▲智能線の中に、黄色、赤色、紫色の現れて居るのは物事の成功を見る兆であり、青色の現れて居るのは病難の兆か物事に憤怒を抱いて居る兆であり、黒色又は白色の現れて居るのは不幸災害の兆である。

### 第三節 生命線に就いての説明

生命線と云ふのは、拇指の側を廻つて手頸の所に達する線のことである(第一圖参照)。命の線とも云ひ、日本の手相學では地紋と稱するものに當つて居る線であるが、この線は人間の生命の長短身體の強弱を現すものである。以下これに就いて説明することにする。

▲生命線が細く深く且長くして拇指球(拇指の下の膨れたる所)を圍繞して居り、その上瑕斑とか斷絶の箇所がないのは最も吉相であつて、斯くの如き線の人、健康長壽にして活動力の旺盛な人である。

▲生命線が短く淺くして鎖状をなして居る人は、虛弱にして短命の相である。然し斷絶して居なければ、鎖状が消失して普運の状態に復しさへすれば、健康の恢復を意味するものであつて壽命を保ち得るものである。

▲生命線の起點の所が鎖状をなして居るのは、少年時代の病弱を現すものであり、末端に近き所が分岐して居るのは老年に於ける病弱を現すものである。

▲生命線が多數の小線によつて切斷せられたる人は、身内の間に葛藤の生ずることを現すものであり、

又生涯浮沈多くして薄命の相である。

▲生命線に添ひて拇指球上に更に一つの副線のある人は、身體並びに精神の虚弱を現すものである。  
▲生命線が左手に於いて断絶し、右手に於いて連續せる場合には、危険なる病難の來襲を意味し、若し兩手とも断絶せる場合には死相を示すものである。特にその際一尖端が拇指の側へ向つて居る時は危険である。

▲生命線と智能線との間が適度の間隔を保つて居るのは、その人の元氣に富み進取的の氣性を備へて居ることを現すものであるが、餘り間隔が廣過ぎて居るのは、理性に缺け短氣に流れて向ふ見ずであることを現すものである。

▲生命線がその末端に近き部分に於いて二本に分れて居るのは孤獨を現すもので、生地を離れて遠國で死亡する相である。

▲生命線の中に二個の小十字形がある時は母と和合を缺き、又生命線の外に一個の類似の線のある場合は繼母に養育せらるゝ相である。

▲生命線の中に、黄色、赤色又は紫色を見る時は家庭に吉兆があり、青色、黒色又は白色を見る時は反對に凶兆があるものである。

### 第四節 運命線に就いての説明

運命線と云ふのは手掌の中央にある垂直の線のことである(第一圖參照)、所謂天下筋と稱するものゝことであつて、日本の手相學では眞直なるものを天喜紋と呼び、迂曲せるものを千金紋と呼んで居る。

この線は人間の運命の幸不幸を現すものであるが、以下これを説明することにする。

▲運命線が生命線から起つて、上に登るに従つて益々著しくなつて居る人は、努力次第で成功を克ち得る人である。

▲運命線が手頸から起つて、眞直に手を昇つて居る人は、大なる幸福と成功とを克ち得る人である。

▲運命線が若し中指迄上昇して居る場合には、東洋の手相學では衝天門と稱して高貴の人となる相とせられて居るが、西洋の手相學では却てこれを危険として居る。その理由はかゝる線を有する人は、萬事度を越えて節制することを知らないからであると説いて居る。

▲運命線が智能線から起り、その線が極めて明瞭である場合には、その人の才能によつて奮闘の後晩年に於いて成功を克ち得るものである。

▲運命線が感情線によつて阻止せられて居る場合には、感情に走りて成功を破ることを現して居るも

のであり、又智能線によつて阻止せられて居るのは、その人の愚昧なるが爲に成功を破ることを現して居るものである。

▲運命線の不規則なる人は、運勢に浮沈みが多く、成功失敗の定らざる人である。

▲運命線の重複して居るのは吉相であつて、一事業のみならず多くの事業に成功する運勢を現すものである。

▲運命線の中斷して居るのは、失敗、不幸、損失等を現すものである。

### 第二章 手相八宮の説明

手相の八宮と云ふのは、手掌を八つの部位に別ち、これを易の八卦、即ち、乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤に割當たもので（第二圖参照）、その部位の形状及び色彩によつて、その人の運勢を説明せるものである。以下その各宮に就いて説明することにする。

▲乾宮 これは小指の下、手頭の上に當る部位で、この部位の肉豊かにして光澤のあるのは、富貴の家に生れ、子孫に優秀なるものを得て、生涯を幸福に送り家運の繁榮を見る相である。

▲兌宮 これは乾宮の上に當る部位で、この部位の肉豊かにして光澤があり、紅色を帯ぶものは、子

孫に關する運勢が良く、目下の者の助けを得て幸運を克ち得る相である。

▲離宮 これは中指の根元に當る部位であつて、この部位の肉豊かにして光澤があるものは、官録ありて立身出世し、人の目上に立ちて多くの人の尊敬を受ける相である。

▲震宮 これは拇指の肉の中央に當る部位で、この部位の肉豊かにして光澤があり色美しきものは、願望を達し兄弟身内の縁が良く幸運を克ち得る相であるが、この部位に缺陷があれば、妻、兄弟を剋し、身内に薄縁く不幸に終るものである。

▲巽宮 これは人差指の根元に當る部位で、運勢上命運の有無を現して居る所であるから、この部位の肉豊かにして光澤があるものは、金運に富み生涯を富貴に送るものであるが、この部位に缺陷があれば、財を散じ家庭を破り一生を貧賤に終るものである。

▲坎宮 これは手頭の中央から手掌の中央に移る部位に當る所で、この部位の肉豊かにして光澤があり且筋正しきものは、根氣強くして晩年に至り必ず幸福を克ち得るものであるが、この部位に缺陷があり、殊に筋切れ又は横筋のあるものは、根氣薄くして成功の望みがなく、特に水難の懼れがあるものである。

▲艮宮 これは拇指の下部に當り、乾宮と相對する部位で、この部位の肉豊かにして光澤があるもの

は、財寶に富み幸運であるが、この部位に缺陷があり、肉薄く光澤なきものは貧賤にして災害多きものである。

▲坤宮 これは無名指の真下に當る部位で、この部位の肉豊かにして光澤があるものは、晩年の運強く福徳備り、特に母の縁の深いものである。

### 第三章 手の形状と運勢との關係

手相學は手及び指の形状によりて人間の性質の遺傳的影響を研究するもの、即ちキログノミーと、手掌の線及び紋象によりて過去現在未來の出來事を判断するもの、即ちキロマンシーとの二部に分つことが出来るものであるが、一般には手掌の線及び紋象によつて判断する方法が重んぜられて居つて手及び指の形状に就いての研究は閑却せられて居る傾きがある。然し手相學に於いてこの研究は必要なるものであつて、兩者相俟つて始めて完全を期し得るものである。而して手の形状は線又は紋象に比して外觀より容易に觀察の出來るものであつて、従つて日常の生活に參考となり易いものであるから、以手下の形状に就いての説明を述べることにする。

### 第一節 原始的の手

原始的の手圖解



この手は圖解の如く、手掌が大にして厚く、指も太くして短く、特に拇指が短く且肥つて居つて、その尖端が方形をなしてゐるのが特長であつて、一見して醜く且粗野である。斯くの如き形の手を持つた人は、凡てが原始的であつて道德觀念がなく、従つて情慾を抑制する力がなくて、何事も本能を満足して行かうとするものであり、才智も殆んどないと云つて差支へなく、遲鈍で懶惰である。特に美的觀念とか藝術心とかは皆無であるのが普通である。故に性質も兇暴で殘忍であつて、これを内面的精神的に教導することは、至難と云ふよりは寧絶望のことである。斯くの如き形の手を持つものは文明人には見出されないものであつて、未開人が極めて低級野卑なるもの、間に見出し得るものである。



### 第二節 學者的の手

學者的の手圖解



この手は圖解の如く、節が太く手掌がよく發達して居て彈力があり、指骨と指骨との結び目がしつかりして居り、節々がはつきりと區切が付いて大きく、爪が長いものであつて、どことなく骨つぼくて角張つては居るが、そこに何となく味のあつた手である。斯くの如き形の手を持つた人は、蓄財の觀念には乏しいものであるが、智識慾が強烈で、神秘的のことに好み、美とか哲學とか云つたやうな方面の研究に没頭して、物質的の方面には沈鬱で神秘的である。而して斯くの如き形は萬事に几帳面で頭腦が論理的に出來て居り、獨立心の強いものである。この形の手の人は以上に述

べたる如く、その性格が學者的哲人的であるから、従つて一般に學者とか、ある特種の問題を専門に研究して居る人に斯くの如き形の手を持つた人が多く、世界の民族では、東洋人殊に印度に多いものである。

### 第三節 活動家の手

活動家の手圖解



この手は圖解の如く、各指の尖端が篋状をして居るので一名篋状の手とも云ふものであるが、他の特長としては、手頸の部分若しくは五指の底部に於いて殊の外廣く、これも篋の形に似て居るのである。斯くの如き形の手を持つた人は、精力が強く従つて活動家である。而してこの篋状の手が硬くして頑丈の場合には沈着を缺いて激しい性質を示すものであるが、又一面には意志が強く固で物事に熱心な性質をも示すものである。然し

反對に柔い場合には、單に沈着を缺いで激し易い性質のみを示すものである。この形の手を持つた人は前にも述べた通り、精力的で活動家であつて、元氣に富み獨立の意志が強いもので、個性が顯著にはつきりして居つて萬事に獨創的な所がある。この手は、大航海家、大探險家、大發見家、大機械師、聲樂にあらざる機械的の音樂家等に多く見出し得るものであり、特に機械的音樂家の天才にこの形の手を持つて居る人が多いものである。

實際家の手圖解



第四節 實際家の手

この手は圖解の如く、手頭と手掌との境界及び五指と手掌との境界が廣く、指の結節が高くしてその先が四角になつて居り、爪が一般に短いものである。故に俗に四角の手又は方形の手とも云ふものである。この形の手を持つた人は、忍耐力が強く萬事に規則正しい性質であり、時の觀念が強く物事が正確で義理堅く、法律とか慣習とか云ふ

ものを重んずるものである。故にこの形の手を持つた人は、精神的學問のことよりも、物質的實際的のことを好み、従つてその方面に成功を克ち得るものである。又獨創力や想像力には乏しいものであるが、事業上に於いては應用の才とこれを實行する強い意志とを有するものである。缺點としては利慾に走り過ぎる象があり、餘りに理屈に流れる傾きのあることである。

第五節 技術家の手

技術家の手圖解



手相秘傳

この手は圖解の如く、一般に中位の大きさで、結節が目立たず、手掌は上になる程稍狭まり、指の根元が太くて尖端になる程細くなつて圓錐狀をして居り、一寸女の手のやうに細々して居るものである。この形の手を持つた人は、感性的で物事に感じ易く、本能的衝動的であつて理性の働きに缺けて居り忍耐力に乏しいものである。故に思想に於いて巧妙敏速であるが移氣で物事に倦き易く

自己の目的を遂行する能力に缺けて居るものである。又同情心に富み友情にも厚いものであるが、兎角性急で我儘な性質があるから、自己の快樂を満すことが妨げられるやうな場合には勝手な行動に出でる風がある。金銭上の事には比較的冷淡な方で、無意味に散ずる憂ひがある。缺點としては、四圍の事情境遇に感化影響を受け易い爲に心身の安定を缺く象があり、喜怒哀樂の情に支配され易く、人を溺愛したり毛嫌ひするやうな傾きがあり、奢侈淫蕩に流れ酒色に耽溺する憂ひがある等のことである。而してこの形の手を技術家の手と云ふのは、



理想家の手圖解

この形の手の人が技術に巧みであると云ふよりも性質上技術的事柄に感化影響を受け易いと云ふ意味である。尙、この形の手を持った人は、俳優、聲樂家、演説家等専ら感情に訴へて人の心を動かす職業に適して居るものである。

### 第六節 理想家の手

この手は圖解の如く、どちらかと云へば形の小さい

さい方で、弱々して居て優美に感ぜられるものであり、第五節に於いて説明した技術家の手と混同され易いものである。この形の手を持った人は、非常に空想的、若しくは理想的であつて、實際的、規律的論理的の觀念に乏しく、夢のやうな生活を追ふ傾向があり、性質が物靜かで優長で依頼心が強いものである。故に兎角周圍の感化を受け易く、浮沈が烈しく生活が安定せぬ象がある。



複雑なる手圖解

### 第七節 複雑なる手

複雑なる手と云ふのは一定の形がなく、前に説明した色々な形が混合して居つて、どつちとも付かぬ形の手である。斯くの如き形の手を持った人は、どの方面に向つても一寸小才の儼く方であるが、さうかと云つてこれと云つて纏つて一つのことの上達せぬ風があり、所謂萬能利

きの一藝叶はずと云ふ型の人である。又交際が上手で、周圍の境遇に應じて變通自在に振舞ひ、利巧

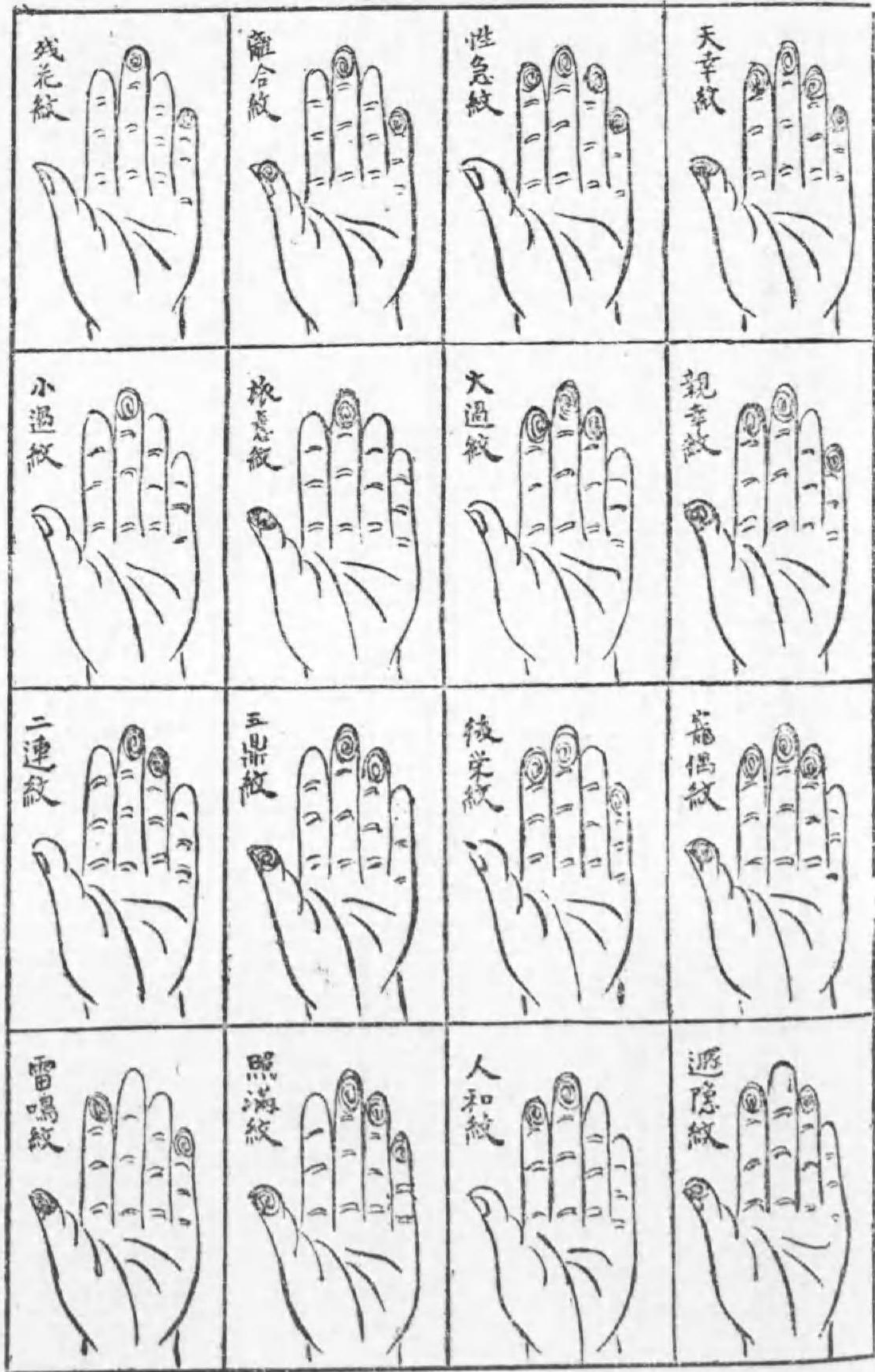
ではあるが自分の才の爲に却て過ちに陥る憂ひがある。この形の手を持つた人は以上の如き性質傾向を持つて居るから、従つて一定の職業、一定の住所に落着くことが出来ず、新奇なことを好んで轉々として移り變り、結局纏つた成功を得ることが出来ぬものである。

### 第四章 指紋と運勢との關係

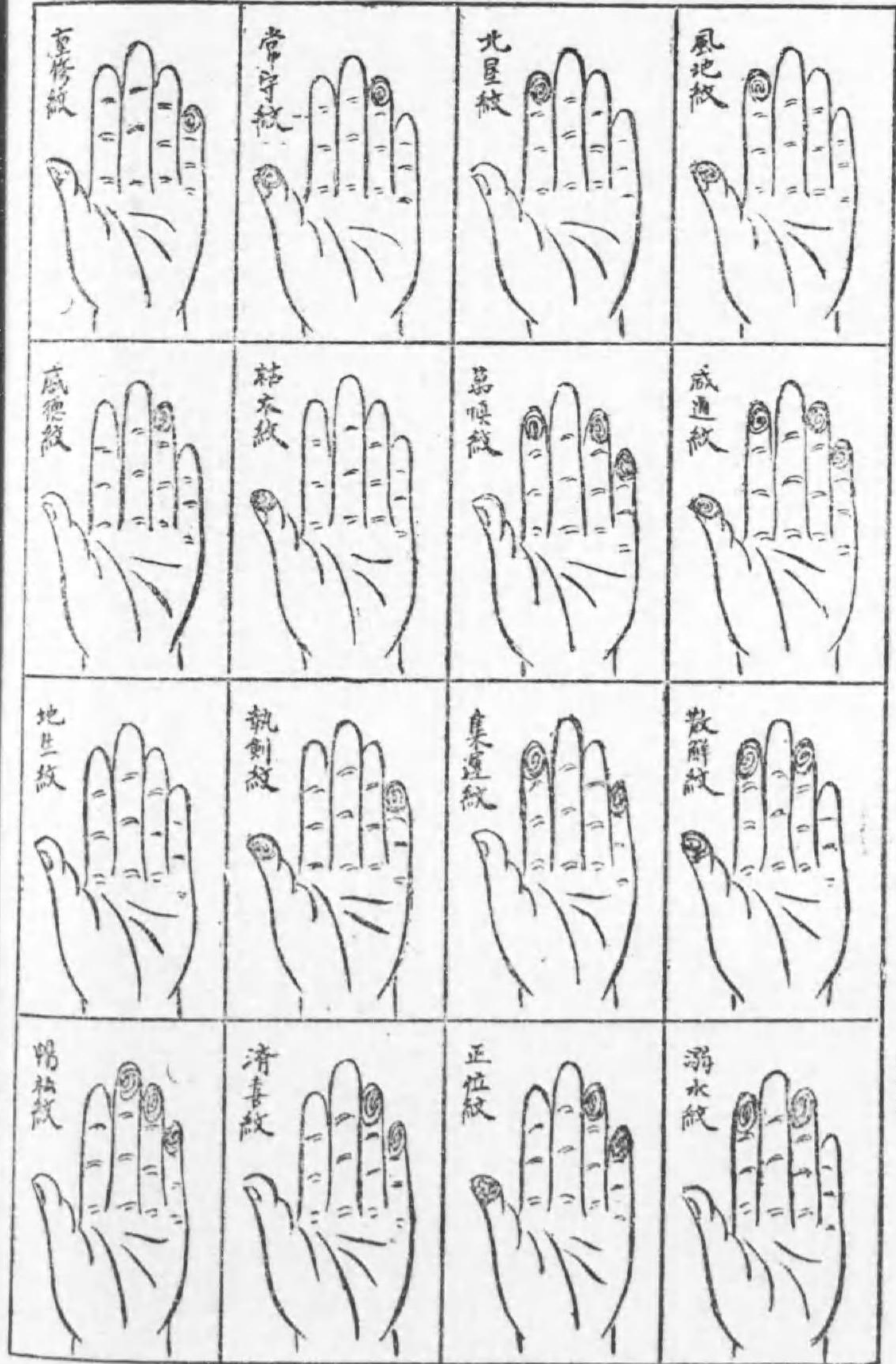
指紋は萬人萬様であつて、一人として同様の指紋の人がないと云ふことは、茲に説明する迄もなく讀者の熟知せられる所である。斯くの如く指紋は萬人共に差違のあるものであるから従つてこの指紋を研究すれば、その人々の運勢を知ることが出来るものである。以下この指紋と運勢との關係に就いて説明することに於て、次に掲ぐる圖解と對照して了解せられたい。

▲天幸紋 これは圖解の如く左の手の指全部に渦卷のあるものを云ふのである。この紋の人は、自尊心が強く人と親しみを缺き、親兄弟等とも和合を得ず、早く生家を離れ他郷に出て、苦勞する象がある。要するにこの天幸紋は高貴な人には良いが、通常人は位負けする傾きがあつて、辛勞困難が多く、物事が中途で蹉跎齟齬するものである。故にこの紋の人は、學者、官吏、宗教家等には適するが商人とか、人に世辭を云ふやうな職業には適しないものである。

### (一) 指紋圖解



(二) 解圖紋指



▲親幸紋 これは圖解の如く、渦巻が、親指と、食指と、中指と、小指とにあつて、薬指だけにな

いものを云ふのである。この紋の人は、同情心に富んで居つて人に親しみが深く、友情にも身内に對する情にも厚いものであり、従つて人に親愛せられ引立てられて將來立身出世する運勢がある。然し女でこの紋の人は色情が強く、縁の變る憂ひがあるから注意を要する。

▲龍偶紋 これは圖解の如く、渦巻が、親指と、食指と、中指と、薬指とにあつて、小指だけにないものを云ふのである。この紋の人は、心が定らずして物事に迷ひ易く、従つて依頼心が強く住所職業等も變動の多い象がある。故に心を強く持ち物事に迷はずして進むことが肝要であるが餘り我意に走らず人に親しみをもち、人の意見を重んじて進むのが運勢を開く上に於いて有利である。而してこの紋の人は縁運の良くない人が多く、夫婦間の和合を缺くとか、縁の變る憂ひがある。

▲遷陰紋 これは圖解の如く、親指と、食指と、薬指とだけに渦巻のあるものを云ふのである。この紋の人は、思慮分別が浅くして物事に迷ひ易く、勞して功の擧らぬ象があり、金運も薄い方である。然し忍耐努力して進めば晩年には運の向いて來る望みがある。女子でこの紋の人は、言行の一致せぬ風があり、縁が遅く産の重い憂ひがある。

▲性急紋 これは圖解の如く、親指にだけ渦巻がなく、他の四指には渦巻のあるものを云ふのである。

この紋の人は、決断力に富み運勢も強い方であるが、性急で知慮に流れ、折角成功したことを最後の五分間と云ふ所で破る憂ひがあるから、萬事に知慮を慎しむことが肝要である。尙、人を毛嫌ひする性質があつて損失を招く象があり、住所の苦勞、證文事の間違ひ等に注意を要する。又、二つの家を持つか二種の職業に携はる象がある。女子でこの紋の人は、男勝りで手腕家であるが兎角苦勞性である。

▲大過紋 これは圖解の如く、渦巻が、食指と、薬指とだけにあつて、他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、我意が強く物事に無理をして後悔を招く象があるから、なるべく柔和に心掛け人の言葉に従ひて進むことが大切である。一代の運勢としては外觀は良く見えて内實の伴はぬ象があるが、堅實慎重に進めば晩年には幸運を克ち得るものである。尙、共同事業に成功する運勢があるが、不慮の災ひ、人に欺かれての災害等に注意を要する。

▲後榮紋 これは圖解の如く、食指と、中指と、小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、幸運であるが運勢の開けて來るのは中年以後であつて、中年迄は辛勞困難に遭遇する象があるから、この時代に自棄を起さぬ心掛けが肝要である。尙利慾に走り過ぎて失敗災害を招く憂ひがあるから慎しみが大切であるし、女でこの紋の人は、縁の遅い傾きがあり、短

氣から禍ひを招く惧れがあるから慎しみを要する。

▲人和紋 これは圖解の如く、渦巻が、食指と中指とだけにあつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、人に親愛せられて立身出世する運勢があるが、我意に任せて進む時は折角の幸運を破るものであるから注意が大切である。尙養子となつて大いに幸運を得る象があるが、男女共に青年時代に色情の過ちを招く憂ひがあり、又争ひ事から災害を招く惧れがあるから慎しみが肝要である。

▲離合紋 これは圖解の如く、拇指と、中指と、小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋は、地位の高い人には吉相であるが、普通の人には凶相であつて、親子兄弟友人などに縁が薄く、強情で我意が強い爲に人と和合を缺きて運勢を損する象があり、色情の過ち、病難等の憂ひがあるから注意を要する。然しこの紋の人は、學者宗教家などになれば成功して名を揚げ得るものである。

▲旅意紋 これは圖解の如く、親指と中指とだけに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、住居の苦勞が多く流浪するやうな惧れがあり、旅へ出て難儀をする象がある。尙、客番に流れて人望を失ふ傾きがあり、争ひ事から災ひを招く惧れがあるから注意を要する。又男女

共に縁の遅い方であり、女は産に悩む憂ひがある。

▲三鼎紋 これは圖解の如く、親指と、中指と、薬指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、不正直で悪計を企らむやうな象があり、我意が強くて人と争ひを生じ易い傾きがあるから、心を清く大きく持つやうに修養することが大切である。以上の注意を守りて進めば追々運勢が開けて来るものである。

▲照満紋 これは圖解の如く、渦巻が食指を除いた他の指全部にあるものを云ふのである。この紋の人は、日の天上に輝くが如き強い運勢の生れて、人の頭に立つことの出来る人である。然し短慮に流れて運氣を破る惧れがあり、金錢の使ひ方が荒くて保てぬ象があるから注意を要する。尙男女共に色慾が強くと爲に身を過つ憂ひがあるから、慎しみが肝要であり、女は少し縁の遠い方で、流産又は産に悩む憂ひがある。

▲殘花紋 これは圖解の如く、中指と小指とだけに渦巻があつて、他の指にはないものを云ふのである。この紋は、運氣の盛大なる象を現すものであるが、普通の人には少し強過ぎる嫌ひがあり、進み過ぎて運勢を破る憂ひがあるから、なるべく控目に心掛けることが大切である。以上の注意を守れば、智慮も深く人情にも厚い生れであるから、大いに成功を克ち得ることが出来るものである。

尙縁運は初縁の變る憂ひがあり、子縁はどつちかと云へば薄い方である。女でこの紋の人は、貞女で妻としての務めを全うする人である。

▲小過紋 これは圖解の如く中指だけに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、小事は成し遂げることが出来るが、大事は成し遂げ難き象がある。若しこの運勢に逆らつて分外の大望を企てるやうなことがあると、失敗墜失して、妻子に別れ、他郷に流浪するやうな悲運に陥る憂ひがあるから慎しみが肝要である。然し高貴な人でこの紋を持つた人は大いに吉相で幸運を得るものである。普通の人でも分外の大望を抱かず、小を積み大を成す心掛けて、物事に移氣に流れず堅實に進んで行けば、追々發達して成功を克ち得るものである。

▲二連紋 これは圖解の如く、中指と薬指とだけに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は薄運で、親に早く別れ、老いて子に先立たれる憂ひがある。然し忍耐努力して進めば初年は不幸薄運であるが、中年後晩年に至つて幸運を克ち得ることが出来るものである。

▲雷鳴紋 これは圖解の如く、拇指と、食指と、小指とに渦巻があつて他の二指にはないものを云ふのである。この紋の人は、短氣で一轍でその爲に運氣を破り身上に波瀾を招く憂ひがあるから、なるべく心を廣く大きく持つやうに心掛けることが肝要である。以上の注意を守れば成功を遂げ幸

運を克ち得ることが出来るものであり、特に醫師又は學者として立身出世することが出来るものである。

▲風地紋 これは圖解の如く、拇指と食指とだけに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、幸運で人の目上に立ち尊敬を受ける運勢があるが、丁度晴天に雲の巻起るが如く、途中で運勢の頓挫する憂ひがあるから、何事も調子に乗過ぎぬやうに心掛けること大切である。尙、幼年時代に両親の中どちらかに先立たれる憂ひがあり、色情の過ち、住所の辛勞、夫婦間の故障等を招く惧れがあるから注意を要する。

▲咸通紋 これは圖解の如く、拇指と、食指と、薬指と、小指とに渦巻があつて中指だけにないものを云ふのである。この紋の人は、誠實で物事に丁寧であり、人に親愛せられて幸福を得、望み事も成就するものである。尙親子の間も親密で家庭的にも幸福である。然し女でこの紋の人は色情が強く不貞に陥る惧れがあるから慎しみが肝要である。

▲解散紋 これは圖解の如く、親指と、食指と、薬指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は心に纏りがなく、従つて氣紛れで物事に執着心が乏しく、色々と職業を變更する象があり、運勢にも波瀾が多く浮沈みの烈しいものである。然し以上の點に注意して忍耐心を

を養ひ、堅實に進めば晩運の方ではあるが幸運を克ち得ることが出来るものである。

▲溺水紋 これは圖解の如く、食指と薬指とだけに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、物に掩はれて居るやうな運勢で、兎角物事が意に任せぬ象があるものであるから、何事も焦燥らずして氣長に進むことが大切である。以上の注意を守れば追々運勢が開けて行くものである。尙、男は女の爲に身を過ち、女は男の爲に身を過つ憂ひがあり、病難、盜難、住所の辛勞等の象があるから注意を要する。又男女共に縁は遅い方であり、急がぬ方が良縁を得るものである。

▲北星紋 これは圖解の如く、食指だけに渦巻があつて他の指には全部ないものを云ふのである。この紋の人は幸運で、家庭も和合し、友人知己にも親愛せられて幸福に世を送ることが出来るものである。又願望も成就し、共同事業によつて成功する運勢がある。縁談は男女共に比較的早い方が吉である。而して女でこの紋の人は、行ひが正しく愛情の深いものである。

▲萬慎紋 これは圖解の如く、食指と、薬指と、小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は吉運の方であるが、自分で進み過ぎたり慎しみを缺きて運勢を破る惧れがあるから、身を慎しみ控目を守りて折角の運勢を完うする心掛けが肝要である。尙、縁運は良い方であるが子供の出来るのが遅い象があり、不慮の災ひ、旅行中の災難等を招く惧れがあるから注意



を要する。又男は學者として成功し、女は音楽家として成功する運勢がある。

▲集運紋 これは圖解の如く、食指と小指に渦巻があつて、他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、氣性が烈しく大事を好み、無暗に大望を企て、失敗する憂ひがある。然し運勢は強い方であるから、功を焦燥らずして徐々に進めば、大事を遂げ、財を積み家を起すことが出来るものである。吳々も慎しむべきことは性急に流れぬことであり、又一度成功しても挫折する惧れがあるから、調子に乗つたり油斷安心に流れぬ心掛けが肝要である。尙縁の變る憂ひがあり、女は産に悩む惧れがある。

▲正位紋 これは圖解の如く、拇指と、薬指と、小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、吉運で末になる程立身發達を得るものであるが、奢りを生じて失敗を招く憂ひがあるから慎しみが肝要であるし、初年は多少辛勞困難を免れぬ象があるから、忍耐を守り自棄を起さぬ心掛けが大切である。又同情心の深い性質があるから、身内とか他人のことで苦勞する象があるが、徳を積めば後に報いの来るものである。尙男女共に縁運は良い方である。

▲常守紋 これは圖解の如く、親指と薬指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、智力才能の發達が遅いものであるから、初めは人から鈍物のやうに思はれるものであるが、段々年を取るにつれて腦力が發達して来て、後には人に優れた能力を現して、意外の働きをなすに至るもので、所謂大器晩成と云ふ型の人である。故に運勢も中年後より開けて来て、晩年になる程幸運を得るものであるから、何事も急がず落着いて一步一步進む心掛けが大切である。

▲枯木紋 これは圖解の如く、親指にだけ渦巻があつて他の指には全部ないものを云ふのである。この紋の人は、運勢に波瀾盛衰の烈しいもので、一時大いに成功したと思へば又失敗に陥り、失敗に陥つたと思へば再び挽回して勢ひを盛返すと云つたやうに、浮沈みを繰返すものである。故に萬事勝身に出るよりも受身に出た方が、運勢を切開く上に於いて有利である。又金運もあり、勝負事にも運の強い方であるが、餘り調子に乗過ぎると失敗を招くものであるから、何事も度を守ると云ふ心掛けが大切である。尙、盜難、女難に注意を要する。

▲執劍紋 これは圖解の如く、親指と小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、大體平安な運勢で望み事も成就するものであるが、獨立して進むよりは人に従つて進む方が、運勢を開く上に於いて有利である。又この紋の人は養子となつて幸運を得る人が多く、長男でも他國へ出で、成功する人が多いものである。尙、争ひ事、女難を慎しむことが大切である。

▲濟喜紋 これは圖解の如く、薬指と小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。こ

の紋の人は、交際好きで人に親しまれ、目上の愛顧を受けて運勢が開け成功を得る象がある。故に出来るだけこの持前の性質を守り、我意強情に走らぬやうに心掛けることが大切である。尙、進み過ぎの失敗、住居の苦勞、色情の過ち等に注意を要する。而して女でこの紋の人は、男よりも一層幸運であつて、特に縁運及び子供運が良いものである。

▲重修紋 これは圖解の如く、小指だけに渦巻があつて他の指には全部ないものを云ふのである。この紋の人は、中年頃迄は餘り運勢の伸びないものであるが、中年頃より急に運氣の開ける象があり特に思掛けぬ人に引立てられて幸運を得ることがあるものである。而して親兄弟には縁の薄い方で早く生家を出で、他郷で身を立てるものである。

▲威徳紋 これは圖解の如く、薬指だけに渦巻があつて他の指には全部ないものを云ふのである。この紋の人は、吉相で威徳が備はり、人の信服を受けて目上に立つ運勢があるが、普通人には少し強過ぎる傾きがあつて、人と衝突を起し易く敵を作る象があるから、精神の修養に心掛け、徳を磨き度量を大きく持つことが肝要である。又智謀術策を好む風があつて、人に奸佞に思はれて運氣を損する象があり、淫慾を慎しまざる爲に災ひを招く憂ひがあるから注意を要する。而して女でこの紋の人は特に色情が強くて身を過つ憂ひがあり、夫を尅するか、初縁の納まらぬ象があるから注意を要する。

要する。

▲地生紋 これは圖解の如く、五指共全部渦巻のないものを云ふのである。この紋の人は、女ならば非常に吉相であつて、縁運も子供運もよく、一生を幸福に暮すものであるが、男の場合は中運であつて、色々の妨げが起つて成功を遂げ目的を果すことが遅いものであり、殊に意志が弱い爲に人に迷されたり、自分にも迷ひを生ずることが多いものであるが、その僻分外の大望を抱きて力が足らぬ爲に失敗困難に陥る象があるから、常に意志の錬磨に努め、萬事分に應じて徐々に進む心掛けが肝要である。

▲暢私紋 これは圖解の如く、中指と、薬指と、小指とに渦巻があつて他の指にはないものを云ふのである。この紋の人は、盛大なる運勢を持ち、願望も成就し、家庭身内も和合して悦び事が多く、特に中年後大いに發達する象がある。然し盛運に慢心して分を忘れ、調子に乗過ぎて折角の吉運を破る憂ひがあるから慎しみが大切である。而して女でこの紋の人は、少し運勢の強過ぎる傾きがあつて、その爲に餘りに目を上に付け過ぎたり、虚榮に走つて身を過ち、縁運も自分から破れを起すやうな憂ひがあるから慎しみが肝要である。

實地 經驗 人相極秘傳

定價 金壹圓  
送料 十二錢

四八四

社會に立つて大活動を爲さんとする人は、己を知り人をも知ることが肝要である、彼人は善人か悪人か、愚者か賢者か、自分に害を加える人か、利得を興える人かを直ちに知ることが出来たなら、交際上、取引上、結婚、備入れ等に當つて大なる利益がある、又其性能の發達によりて自己の長所短處を知り、面部に顯れし血色によつて禍福吉凶を前知し、所謂凶を避けて吉に趨くことが出来たなら、如何に大なる成功を收めることが出来るであらう、是等の事を知らんとするには是非とも觀相術即ち人相を観る方法を知らねばならぬ。

本書はそれ等の方法を知らうとする人には良參考書にて、面部十二宮三停六府百三十部位に於ける肥瘦厚薄黒子缺陷及び氣血の二色等によりて、貧富壽夭榮枯盛衰を前知する方法を詳記し、且つ百數十の圖解を挿入したれば初めて人相を學ぶ諸君にも、直ちに了解が出来る故苟くも社會に起つて成功を欲する人々は勿論、他人の身上を判斷せんとする人々にも必ず座右に備ふべき良參考書である、敢て一本を奨むる所以である。

第十三編 名前の付け方秘傳

第一章 姓名と運勢との關係

姓名と運勢との關係に就いては、予は卷頭に於いて自序として述べた通り、人の運勢は凡て姓名の吉凶如何によると云ふやうな極端な説には賛同し難いのであつて、特に凶姓名であるから二十何歳迄しか壽命がないとか、必ず不具者になるとか、夫婦親子の縁が絶たれるとか云ふやうな過激な説を主張して、人心の弱點に附入つて利慾を逞うするが如き徒は、徒に世を感し人心を不安に陥れるものであつて、予の飽く迄排斥する所であるが、さうかと云つて、人の姓名とか物の名前などは單に符號に過ぎないもので、自他の區別さへ附けば、人の姓名などは、權太でも、八兵衛でも、太吾作でも良いのであつて、人の姓名とか物の名前によつて、運勢に吉凶が生じたり、物の繁榮に影響を及ぼすやうなことはあり得る筈がない。それは詰らぬ迷信に過ぎぬと頭から排斥してかゝる説にも、予は賛

姓名と運勢

四八五

同することが出来ないのであつて、斯くの如き説をなす人は、人間の微妙なる心理状態とか、人間生活に於ける趣味とか云ふものを考へない人であると思ふのである。

予は易占を業として立ち、人の運命を豫断して居る立場から見ても、姓名學と云ふものも、運命豫断の學説として相當の根據があり、従つて人の姓名とか物の名前とか云ふものは、その人の運勢、その物の榮枯盛衰に影響を及ぼすものであると信するのである。然らばその理由とする所は如何と云ふに姓名と云ふものは、その人の容貌風采が初対面の人に第一印象を與へて、好感を與へるか、悪感を與へるか如何によりて、その後には於ける對者との關係上利害得失に多大なる影響を及ぼすものであるのに次いで、その人の姓名が對者に與へる第一印象も、その感じとか、音調とか、その他色々な點に於いて、將來に於ける利害得失に重大なる影響を與へるものであると信するからである。而して物の名前に於いても同様の意味に於いて、その物の榮枯盛衰に關係する點が多大であると考へるのである。これを歷史上に就いて考へて見ても、予の少年時代に於いて、戦争ごつこなどをして遊んだ際に、大抵の者が源氏方にはなりたがつたものであるが、平家方になることは嫌がつたものであり、豊臣秀吉と徳川家康とを例べると、どうしても秀吉の方に味方が多く、家康の方には人氣がないものである。又明治の偉人にしても、伊藤博文公と山縣有朋公とは、何んとしても伊藤公最負が多いものである。

これは勿論その歴史的背景とか、人物の風格とか云ふ點に基因することは争はれないことではあるが單にそれ計りてなく、源氏と平家、豊臣秀吉と徳川家康、伊藤公と山縣公と云ふそれ々の名稱より受ける感じにも云ひ知れの關係があると考へるのである。

これをごく近い例に取つて見ても、今回行はれた普選に於いて、候補者の當落が、その姓名が平易で解り易いとか、感じが良いたか云つたやうな點に、多大の影響を受けたであらうと云ふことは何人と雖否定し得ないことであると思ふ。又極めて卑近な例ではあるが、先年鬼熊事件が天下を騒がしたことがあつたが、あの事件の主人公が熊と云ふ名でなかつたならば、天下の興味は恐らく半減したことであつたらうと考へる。その他人の姓名でなく、物の名前でも、これ迄はとんと賣れなかつた書物や商品が、名前を取替へて賣出した爲に非常に賣れ出したと云ふやうな實例や、商店の屋號を變へて新しくした爲に、その店が非常に繁昌し出したと云ふやうな實例は世間に數多く見受けることである。その實例の一つとして、曾て法律が改正された時に、改正の法律書を方々の書店から賣出したものであるが、その中で確か春陽堂であつたと記憶するが、大改正と大の字を頭に附加して賣出した爲に、春陽堂の發賣のものが他を壓して飛ぶやうに賣れたことがあつたが、これなども名前と云ふものが商品の賣行に對して多大なる關係を持つて居ると云ふ確かなる實例である。

それで姓名學に信仰を持つて居る人は云ふ迄もないことであるが、姓名學に信仰も興味も持つて居ない人でも、自分の子供が生れたとなれば、出来るだけ良い名を付けやうと苦心するものであり、又新しく賣出す商品の命名とか、新規に開業する店舗の屋號の附方とかには色々苦心するものであるが、これは世人が暗々裡に、人の姓名とか、物の名前とか、その人の運勢又はその物の盛衰に關係があると云ふことを認めて居るからであつて、姓名學と云ふものも運命學上研究する必要があると云ふ予の主張を裏書するものである。

以上に述べた如く、人の姓名とか、物の名前とか云ふものは、對者に與へる印象の好悪とか、感じの如何等によつて、その人の運勢、又はその物の盛衰に多大の影響を及ぼすものであるが、人の姓名とか、物の名前とか云ふものは、單に斯くの如き對外的の關係計りから、その運勢又は盛衰に影響を及ぼすのみではなく、自分の姓名が良いとか、自分の物の名前が良いとか云ふことは、自身の感情上に好影響を與へ、從つて其所に自信を生じ活氣を生じて、對内的にも自己の運勢を吉兆に向はしめるものである。

予は上述の如く、人の姓名又は物の名前は、對外的にも對内的にも、兩面よりその運勢に影響を及ぼして、その人を幸福にし、その物を繁榮に導くものであると信ずるから、人の姓名を附ける場合

又は物の名前を附ける場合には、充分に研究し熟慮した上で、出来るだけ吉祥なる姓名又は名前を附けることが必要であると主張するのである。故に以下章を別ちて、人の姓名を選び、物の名前を附ける場合に、幸福と繁榮とを齎らす上に於いて、予の研究の結果重んずべきであると信ずる點及び姓名學上一般に用ゐられて居る重なる條項に就いて、正しく且解り易く説明したいと思ふのである。幸に予の説く所が讀者諸士の參考となり、幾分でも世人の幸福と繁榮とを増進する助けとなることが出来たならば、著者の満足は此上もないのである。尙終りに特に注意として一言附加して置くが、世の中には、大山殿と云ふ姓名の人で電車の車掌をして居つた人があり、桂太郎と云ふ姓名の人で小使をして居るものがあるが、若し姓名が人の運勢を支配するものならば、同じ姓名のもので、一は元老宰相となり、他は車掌小使である筈がないと云つて、姓名が運勢に關係するなどと云ふ譯はないと否定する人があるが、これは運勢と云ふものは萬人一様のものではないのであつて例へば茲に百萬圓の財産を父何故ならば、一體運勢と云ふものは萬人一様のものではないのであつて例へば茲に百萬圓の財産を父祖より受継いだ人と、その日稼ぎの一労働者の子に生れたものがあつたとして、この百萬長者の子が一代にして百萬圓の遺産を五百萬圓にも千萬圓にも殖すことが出来たならば、それは幸運の人と云へるが、單に親譲りの百萬圓をその儘に受継いで一生を終つたとすれば、一労働者の子が裸一貫から

一萬圓を積上げることが出来たものよりも遙に運勢は劣つて居るのである。乃ち運勢と云ふものは比較上の問題であつて、姓名がその人の運勢に影響を及ぼすものであると云つても、大山巖と云ふ姓名を附ければ、誰でも公爵となり元勳となることが出来、桂太郎と附ければ萬人が宰相となること出来る。と云ふやうな極端なことを云ふのではない。例令一車掌であり、一小使に過ぎないと云つても、その車掌なり又は小使なりが、姓名が吉祥であるが爲に、その地位に相應して他よりも比較上に於いて、幾分でも運勢に好影響を受ければ、姓名がその人の運勢に幸運を齎したものと云ふべきである。予は斯くの如き見地から、姓名が運勢に關係を持つものであると云ふことを主張するのであつて、前にも述べた通り、一部の姓名判断家のやうに、運勢の吉凶は姓名の如何にあつて、姓名さへよければ吉運幸福は天から降つて来るやうなことを説き、姓名が悪ければ悲運不幸の極に沈むと云ふやうな極端な説をなすものには飽く迄反對すると共に、姓名の吉凶が運勢に影響を及ぼすと云ふやうなことは絶対にある譯がないと、頭から反對説を稱へる人にも、前述の如き理由から賛同することが出来ないのである。どうか讀者諸士が予のこの意見を充分に諒解せられて、拙著を熟讀含味せられたる上で人の姓名又は物の名前を選名せられるに當つて、参考として應用して頂きたいことを希望する次第である。

## 第二章 姓名學の沿革

姓名判断に關する書物はこれ迄世間に澤山出版されて居るが、姓名學の沿革と云ふ點に就いては説明してある書が少なく、稀にこれを記してある書でも、無理にこじ附けたり、好い加減に胡麻化してお茶を濁したものが多いのである。予の考へではこれは最もなことであると思ふのである。それは姓名學と云ふものは、他の占ひの學問、乃ち易學とか、九星とか、推命學とか、觀相學とか、家相學とか云ふやうなものやうに、古い傳統と體系とがあるのではなくして、明治時代になつてから新しく姓名學として體系を作上げられたものであるから、組織立つた沿革と云ふものはないのであると考へるのである。最も古代に於いても人の姓名と云ふものは非常に重んぜられたことは確かであり、又姓名によつて吉凶とか運勢とかを占つた例はあるのであるが、今日の如く組織立つた體系と云ふものはなかつたのである。故に予は本章に於いて姓名學の沿革を組織立つて系統的に述べる材料を持つて居ないから、單に姓名と云ふものが昔から重んぜられて居つたと云ふことと、人の姓名によつて吉凶運勢を占つた例があると云ふことを擧げて説明するより以上のことは不可能なのであるが、この點は讀者諸士の諒承を乞ふ次第である。若し讀者諸士の中に、この姓名學の沿革に就いて組織立つた研究

を積んで居られる方があつたならば、禮を厚くして切に高教を仰ぎたいのである。

先づ支那に於いて姓名を重んじた例としては、「名は體を現す」とか「名は實の實なり」とか、孔子の「必ずや名を正さんか、名正しからざれば（中略）則ち民手足を措く所無し」と説かれた章句などは、何の姓名判断家も金科玉條として引用する言葉であるが、その他にも、禮記及儀禮にも「冠而字之敬ニ其名也」とあり、事物起源にも「冠而字成人之道也、字ハ所以ナリ貴ブレ名ナ」とあり、顔氏家訓にも「名ハ以テ正レ體ヲ字ハ以テ表レ徳ヲ」とあり、事文類聚にも「古者名ハ以テ正レ體ヲ字ハ以テ表レ徳ヲ」とありその他にも名を重んじた意味の章句は數多くあつて、茲に一々列挙する暇がないから省略するが上に挙げた例を以て見ても、支那に於いて昔から名を重んじたと云ふことは明かなる事實であつて、名を重んずる餘り唐代に至りては上奏詩文等に於いて諱を犯し又は父祖の名と同一の字を有する官職に就く時は、刑罰に處せられる規則が出来た位である。又印度に於いても名は非常に重んぜられて、命名の際には「サンスカラ」と云つて崇嚴な儀式が行はれたものである。

日本に於いても古代から名は非常に重んぜられたもので、本居宣長翁もその著古事記傳の中に「大かた名と云ふ物は貴きも賤きも皆其人を美稱へたる方にて名を呼は其人を敬ひ賞るなり云々……」と云つて居られ、小中村博士もその著陽春廬雜考の中に「いと上代人は甚く我が名を重みして、永

く世に傳へん事を冀ひたり云々……」と述べて居られ、和田英松氏もその論文中に「かく古は名を避くるならはし見えざるのみならず、なか／＼に我名を重んじ、永く後葉に傳へんことをねがへる風なりき云々……」と説いて居られる。

上述の如く、印度、支那、日本共に古代から名と云ふものは非常に重んぜられたものであるが、その他の諸國でも名は重んぜられたものであつて、名を重んずる觀念より人の實名を呼ぶことを不敬とした、實名敬避の習俗、乃ち諱は殆んど世界通有のものであつて、以て世界の凡ゆる民族が名を重んずる觀念を持つて居つたと云ふことを窺ひ知ることが出来るのである。

次に姓名によつてその人の吉凶運勢を占つた例も屢見る所であつて、茲に和漢の例を二三挙げて見ると。

支那に於ける例としては、普の穆公が條北の戰に大勝を得て歸つて來た時に、その夫人が長男を生んだので、それに因んで戰には勝つたけれども敵と仇怨を結んだことになることと云ふ意味からこれを仇と名附けたが、その後又千畝と云ふ所で勝利を得て歸つて來た時に次男が生れたので、成師と名づけた。これは師は軍旅の意味であり、又多數の意味であるからそれに因んで附けたのである。所が子服と云ふ人がこれを聞いて、成師と云ふ名は意味も良いし語調も良いが、仇と云ふ名は意味も語調も

悪いから、これに依つて兩者の將來の運勢を占ふと、名分正しからず上下轉倒せるを以て、兄は弟に劣り、弟は兄に勝るべく、將來必ず兄弟争ひを生じ互に仇敵となるが如き不幸を見るに至るであらうと云つたが、後果して兄弟相争ひて晋國大に亂れ、弟の運勢は日に盛大を加へたが、兄の運勢は反對に日々に衰ふるに至つたと云ふことが、左傳の三卷に記されて居る。又晉侯が畢萬に魏國を賜つた時に、卜偃と言ふ人が、異萬の萬の字は數の滿ちたるもので、魏國の魏は魏々堂々の魏の字と同一義で、高く大いなる貌であるから、天運必ず魏國の將來を盛大ならしめるであらうと云つたが後果して畢萬の子孫が大に勃興して、五霸の一人として有名なる文侯を出すに至つたと同じく左傳の八卷に記されて居る。

日本に於ける例としては、埃囊抄二卷に人は名によつて吉凶のあることは尤ものことであると云つて色々な例を擧げて居るが、その中に明雲僧正と云ふのは、上に日月の光を列べてその下に雲があるのは凶であると云つてあるが、果して左遷された上に流矢に當つて横死して居る。又た同じ卷の中に仁徳天皇の御右は大鶴鶴命と申し弟君の御名は隼總別命と申したのであるが、隼は鷹の一種で大鶴鶴よりも強大にして勇猛であるから、弟君の方が強くして兄君の方が弱き意を現し、上下轉倒して名分正しからざる故、口舌争論を生ずる原因であると云ふことを説いて居るのも名を以て運勢

を占つた例である。又徳川家康が幕府を江戸に開くに當つて、天海僧正がこれを祝して「凡そ天下を治むるに武斷のみを以てすれば人心離反す。故に王者の徳を以て天下の人心を導くべし。謹んで案ずるに殿下の姓名は既に此義に協へり。徳は川の溢るゝが如く高きより低きに就き此を以て國家安康なり。誠に目出度姓名なり」と云つた例や、僧の玄昉が入唐して知周大師に法相學を學んだ時に、玄昉の同音に還亡と云ふ訓があると云つたが、果して歸朝の後筑紫觀世音寺の供養の時に落雷の爲に惨死したと云ふやうな話は、皆姓名を以て吉凶運勢を占つた例である。

又支那に折字法と云ふ一種の占法があつて、これは春秋左氏傳の中に二首六身と云ふことがあるがこれが折字法の創始であると云はれ、漢時代から唐宋時代に於いて盛んに行はれたもので、その一例を擧ぐれば、宋の太宗が太平と改元した時に、ある人が太平とは即ち一人六十である。故にこの皇帝は六十にして壽を終るであらうと云つたが、果してその言の如くであつたと云つてある如きもので又宋の邵康節の梅花易數は、その見たるものを數字として卦を起して占ふ法を説いたものであるが、これも折字法の一つである。この折字法は日本にも傳へられて行はれたもので、その例を擧ぐれば、大東世語と云ふ書に、藤原道長の時代に、東宮の帷の中で犬が子を産んだので、博士大江匡衡を召してその吉凶を占せられた所が、匡衡が謹んで奏上して云ふには、犬と云ふ字を按ずれば大の字の傍



に一を加へたもので、これが上にあれば天と云ふ字になり、下にあれば太と云ふ字になり、これに犬の子の「子」と云ふ字を附加すれば「太子」となるから、これは太子が御生れになつて天子となり給ふ吉兆であると申上げたが、果して後は太子を御生みになつて、後に即位して後一條帝とならせられたと云ふことが記してある。又徳川時代の同文通考と云ふ書に、易學の大家新井白蛾が、近頃支那の例に習つて文字にて相する者が現れたと云ふことを記し、自分も感れにこれをややつて見たと云ふことを云つて居る。この折字法と云ふものは人の姓名によつて運勢を判断する法ではないが、文字を分解して吉凶を占ふ法であるから、この方法も後來姓名學の生れ出た源となつたものであると云ふことが出来ると思ふ。

以上述べた所は、姓名學の沿革としては組織立つた系統的のものでなく、従つて甚だ不備の點を免れないが、予の今日迄の研究ではこれ以上のことを記述する材料がないのであつて、自ら顧みて慚愧たる所があるのであるが、將來一層研究に志してもつと組織立つた發表をしたいと思ふのである。

### 第三章 姓名の意義及文字の選擇

予は第一章に於いて姓名と運勢との關係を説明して、人の姓名又は物の名前が、その人の運勢又はその物の盛衰に多大なる影響を及ぼすものであると云ふことを説き、その理由を述べたのであるが、この予が姓名又は物の名前と運勢との關係の根據とする點、乃ち姓名又は物の名前が對者に與ふる印象の好悪及び自己の心理状態より生ずる感情と云ふ點から見て、吉姓名及び繁榮を齎らす物の名前を選定する、最も重要な第一要件は、その意義及び文字の選擇であると思ふのである。

この姓名又は物の名前の意義及び文字の選擇と云ふことは、姓名學を重んずる人は勿論のこと、例へてこれを重んじない人でも、自分の子供が生れた時とか、新しい物の名前を附ける場合には、考へに置かない人は一人もないと云つて差支へないのであつて、自分の子供に對しては、健全幸福を意味するやうにとか、感じの良い字又は名を選ぶとか、古事來歴によつて命名するとか、その他色々苦心するものであり、物の名前も出来るだけ吉祥なる名を附けやうと工夫することは、萬人同一の心理状態である。故に以下予が後章に於いて説明する所の姓名學の諸條件が、將來に於いて世に行はれないやうな時代が來たとしても、この姓名の意義と文字の選擇と云ふことは永遠に生命を持續して捨て去

られるやうなことはない、確信するのである。それでこの姓名の意義及び文字の選擇と云ふことは、昔から重んぜられたものであつて、今その例を二三擧げて見ると、曠世の英傑秀吉が信長に使へて未だ微臣であつた時代に、柴田勝家、丹羽長秀の勇名を慕つて、柴田の柴と丹羽の羽を取つて、木下を改めて羽柴と稱したるが如き、由井正雪が、漢の張子房と孔明の人物を慕つて、その堂名を長孔堂と稱へたるが如き、又源頼義がその子を弓矢の神なる八幡様に肖からしめる爲に、八幡神社の社前に於いて元服せしめて八幡太郎と改名させたるが如き皆この例であり、我が朝に於いて歴代の年號を選擇しめ給ふにも、吉祥なる文字を選擇せ給ひ、又奇瑞が現れた場合に年號を改めさせられたる例、譬へば美濃に孝子の奇瑞が現れたるを以て年號を養老と改め給ひたる如き、白雉を獻じたる者ありしを以て白雉と改元せられたるが如きもこの例であり、その他和漢共に人の姓名を選擇し物の名前を附するに吉祥なる名を選擇したる例は澤山あるのである。

上述せる如く、予は姓名の意義及び文字の選擇を、吉姓名を選擇する上に於ける第一要件と信するが故に、先づこれに對する予の意見を述べることにするが、それに先立つて人の姓と云ふことに就いて一言して置く必要があると考へるから、次に簡単にこれに就いて説明することにする。人の姓と云ふものは、支那に於いては最初は種族中の有力にしてその長となれるものが、自己の威

徳を表章する爲に稱へたもので、次いでその部下の功勞ある者に類ち與へてその子孫に繼承せしめたものであつて、例へば伏羲氏は風姓を稱へ、神農氏は姜姓、黃帝軒轅氏は公孫姓、帝堯陶唐氏は伊那姓、帝舜有虞氏は姚姓と稱したるが如きである。日本に於いては皇室は萬世一系であつて姓を用ゐ給ふ必要がなかつたので、支那の帝王に見るが如き姓と云ふものはあらせられぬのであつて、只皇室より岐れて群臣の列に就いた場合には必ず姓を給つたものであつて、源平二氏の如きはその例である。その他臣民に於いては、官職が轉用せられて姓となつたものがあり（例へば連は村主の轉用、物部は上代兵衛の武士の轉用なるが如し）、藤原、豊臣の如く時の皇室より特に賜つたものもあり、その他山川國土の名稱、土地の風景等を取つて姓としたものもあるが、子孫の繁榮に連れて同姓が多くなつて紛らはしくなつた爲に、副姓を附けたり、氏を用ゐたりして、姓と氏とが混交して區別が附かぬやうになつたのであるが、嚴密に云へば、姓は永久に子孫に傳へべき性質のものであり、氏は一時一代の通稱であつたのであつて、連、源、平、藤原等は姓であつて、近衛、楠、北條、足利、新田、徳川、武田等はこれ等の姓から別れた氏なのである。故に戦國時代などに敵に名乗を揚げる場合には六孫王源經基何代の孫、何の某と稱へたもので、これによつて姓と氏との關係を知ることが出来るのである。斯くの如く昔は姓とか氏とか云ふものは變更したり勝手に附けることが出来たものであるが、

現代に於いては戸籍法が制定せられて、姓も氏も一定して變更することが出来なくなつたから、従つて吉姓名を選定する場合には、姓は如何ともすることが出来ないから、吉名を選んで自分の姓に都合よく配合せしめるより外致方がないのである。

借上に述べたる如く、予は姓名の意義及び文字の選擇を、吉姓名を選ぶ上に於いて最も重要な第一要件と信するのであるが、然らばこれを選ぶには如何なる注意を要するかと云ふことを、次に個條を別けて説明することにする。

第一、姓名は時代に適應して附すべきである。我が國に於ける姓名の變遷を考へて見るに、各時代によつて非常に變化があるのである。乃ち神代に於いては、彦火々出見尊とか、大國主尊とか、日本武尊とか、凡て神嚴な意味を以て居るが、下つて奈良朝平安朝に至ると、和氣清麻呂とか、大野東人とか、小野道風、在原業平、紫式部、和泉式部、小野小町など、云ふ風に、温雅優美なる名が行はれ、尙一層後世になつて、源平時代から戰國時代になると、所謂名乗式の源爲朝とか義經とか、或は平重盛、教經、加藤清正、片桐勝元、木村重成とか云つた風に、武張つた名が行はれたのである。以上の如き姓名の變遷は、その時代の風俗情勢又は趣味等から生じたものであつて、それ／＼その時代に適應して居つたのである。而して物の名前に就いても亦同じやうな變遷があつたのである。それで

現代は民衆的の世の中であり、生活状態も昔と違つて複雑を極めて居るから、予は現代に適應した姓名や物の名前は餘り固苦しくなく、難解の文字を避けて、平易で解り易い姓名を選ぶべきであり、それによつて運勢に吉祥幸福なる影響を受けることが出来ると信するのである。

第二、卑俗野鄙に陥らざることである。予は現代に適應する姓名とか物の名前は、平易でなければならぬと云つたが、然しそれが爲に卑俗野鄙に流れてはならないのである。例へば、三吉、權平、八太郎と云ふやうな名は通俗平易ではあるが、その人に與へる感じが野卑で品がないから、従つて人に悪感を引き起したり輕侮の念を抱かせて、運勢にも悪い影響を與へるものである。故に姓名又は物の名前を選ぶには、平易明解であつて然も品位を失はず、優美高尚、雄大嚴正、崇重深淵等の趣きを備へた名を選ぶことが大切である。

第三、奇矯に流れざることである。姓名を附けるに當つて、奇を衒つて人に異様の感じを與へるやうな名とか、滑稽な感じを與へるやうな名を選ぶのも凶名であつて、従つてその人の運勢に凶惡を齎らすものであるから避くべきである。然し商品とか屋號とか云ふやうなものは、人の注意を惹くことが大切であるから、ある程度迄は奇抜な意味を持つた名前を附けて差支へないものであるが、これも程度問題であつて、餘り疑り過ぎたり突飛な名前を附けることは、一時は繁榮を見ても永續せぬ運勢

を持つものであるから避くべきである。

第四、姓と名とはなるべく意味の通るやうに配合して附けるべきである。姓と名とが全然懸放れて居て、何の意味をも持たないやうなものも凶姓名であるから、なるべく名は姓に關聯して意味の通るやうな名を附けるべきである。然し姓に對して餘りに態とらしい名を附けること、例へば、田と云ふ姓に對して米作と附けるとか、山上と云ふ姓に對して高と附けるが如きは、姓と名とが完全なる意味をなして居るが、これ等は餘りに態とらしくなつて、第三の注意に述べたやうに奇矯に失するものであるから凶名である。故に斯くの如き姓名の附方も避くべきである。

第五、父祖の名に因みて附けること。これは我が國に於いては昔から行はれたものであつて、例へば源氏では、義家、義朝、義平、義經等の如く義の字を取つて附け、平家では、忠盛、清盛、重盛等の如く盛の字を取つて附け、又徳川氏では家康の家の字を取つて附けた名が多いと云ふが如きはこの例であつて、此父祖の名に因んで附けることは、我が國の美風である家系を重んずる風習から生れたものであるが、これは自分の家を重んずる觀念を強めて、従つてその人の心理状態に好影響を與へ、引いてはその人の運勢を吉祥に導くものであるから、姓名を附ける場合に用ゐて良いと考へるのである。又屋號などを生國に因んで、越後屋、近江屋等と附けるのも此條項に叶つて居つて吉祥である。

### 第四章 姓名と易卦との配合

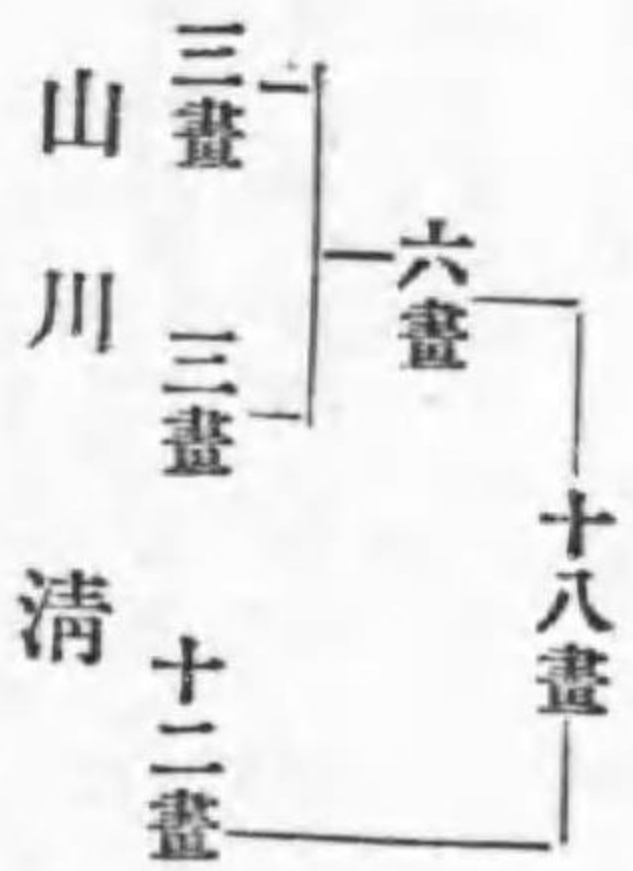
予は運勢を豫斷するに當つて、易學、九星、干支學、推命學、洵宮術、骨相學、觀相學、家相學等凡ゆる運命豫斷に關する學說を參照し、これに基きて綜合的の斷定を下して居るのであるが、これ等の學說中に於いて、東洋獨特の哲學であつて、その哲理の深奥にして然も幻妙なる易學を主として居るものであるから、従つて姓名の吉凶を定める上に於いても、前章に述べた姓名の意義及び文字の選擇に次いで、この易卦と姓名との配合と云ふことを重要視して居るのである。故に次にこの姓名と易卦との配合と云ふことに就いて、實例を以て解り易く説明することにする。

#### 第一節 姓名を易卦に配合する方法

姓名を易卦に配合するには如何なる方法によるかと云ふに、先づ姓の字畫數を八で拂ひ(易は八卦より成立つ故八で拂ふのである)、一が残れば乾、二が残れば兌、三が残れば離、四が残れば震、五が残れば巽、六が残れば坎、七が残れば艮、八が残れば坤と云ふ風に、易の八卦、乃ち、乾☰(天)、兌☱(澤)、離☲(火)、震☳(雷)、巽☴(風)、坎☵(水)、艮☶(山)、坤☷(地)の順序に従ひて上卦を割出

し、又名の字畫數から、姓の字畫數より上卦を割出した方法と全く同一の方法によつて下卦を割出し、これによつて上卦下卦を合せて本卦を得、次に姓名の合畫數を六で拂つて（易の六十四卦は總き六爻より成立つもの故六にて拂ふのである）、その残りの數が、一なれば一爻變、二なれば二爻變、三なれば三爻變、四なれば四爻變、五なれば五爻變、六なれば六爻變と云ふ風に變卦を割出すのであつて、斯くの如くして、割出した本卦と變卦とによつてその姓名の吉凶及びその姓名の現す運勢如何を判断するのである。これを例を以て解り易く説明すれば、茲に山川清と云ふ姓名があるとすれば、これを字畫によつて分解すれば左の如くなるのである。

(例の一)



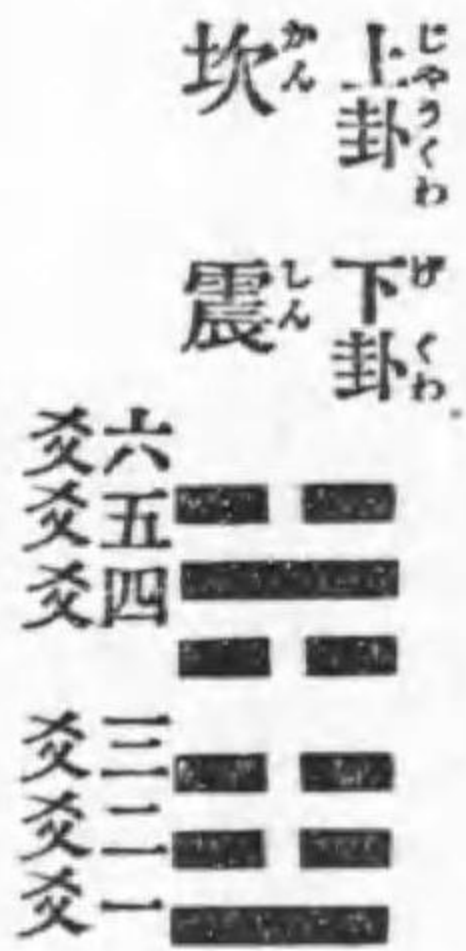
姓 六 畫……………坎の卦  
名 十二畫……………震の卦

姓名 十八畫……………六 爻變

上記の分解によると、姓の山及び川は共に三畫であるから姓は六畫であり、名の清は扁と作りとを

合せて十二畫である。故に姓名の合畫數は十八畫である。そこで姓の字畫數六を八で拂つてその残りの數によつて上卦を得るのであるが、この例では姓の山川は六畫で八の數に満たないから、直に、乾、兌、離、震、巽、坎……と八卦の順に數へて六つ目に當る坎を上卦とするのである。次に名の字畫數は十二であるから、同じく八で拂ふと一度拂へて四の數が残るから、又、乾、兌、離、震……と八卦の順に數へて四つ目の震を下卦とするのである。これで上卦下卦共に得られた譯で、乃ち左圖の如く本卦は水雷屯となるのである。

本卦を得たる順序の圖解

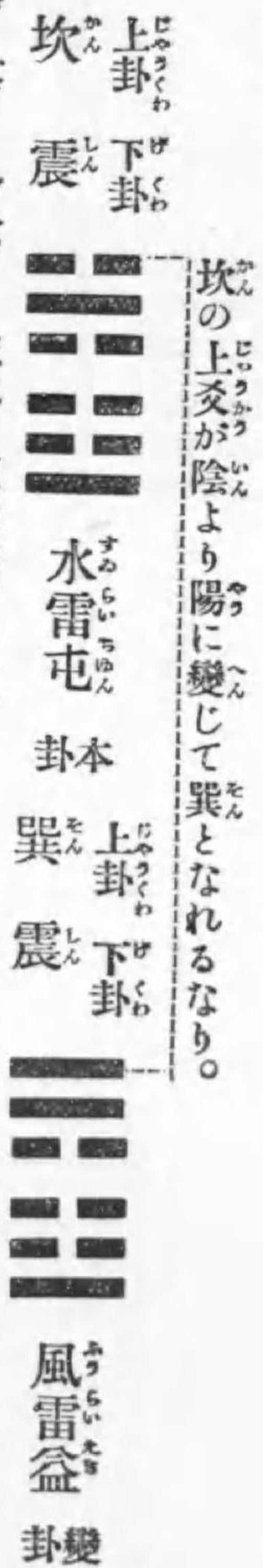


上卦は姓の畫數六なる故乾兌離震巽坎と八卦の順に數へて六つ目の坎を取り、下卦は名の畫數十二を八にて拂ひ残りが四となる故同じく乾兌離震と數へて四つ目の震を取れるなり。

以上の如くにして本卦を割出すことが出来たから、次には變卦を割出すのであるが、その方法は、爻の數は前圖の如く一爻より六爻迄乃ち六であるから、姓名合畫數（姓の畫數と名の畫數とは加へ合せた數）を六で拂つて、その残りの數によつて割出すのである。この方法を前掲の例に當嵌めると、

姓の山川は六で、名の清は十二であるから、合せて十八となり、これを六で拂ふと二度拂へて残りがないことになるが、これは二度拂へて六残つたと同じ譯であるから、一爻から二爻三爻と上へ數へて丁度最後の六爻（上爻とも云ふ）が變することになり、乃ち左圖の如く水雷屯☵☳の六爻に當る陰爻が陽爻に變じて風雷益の卦となるのである。

變卦を得たる順序の圖解

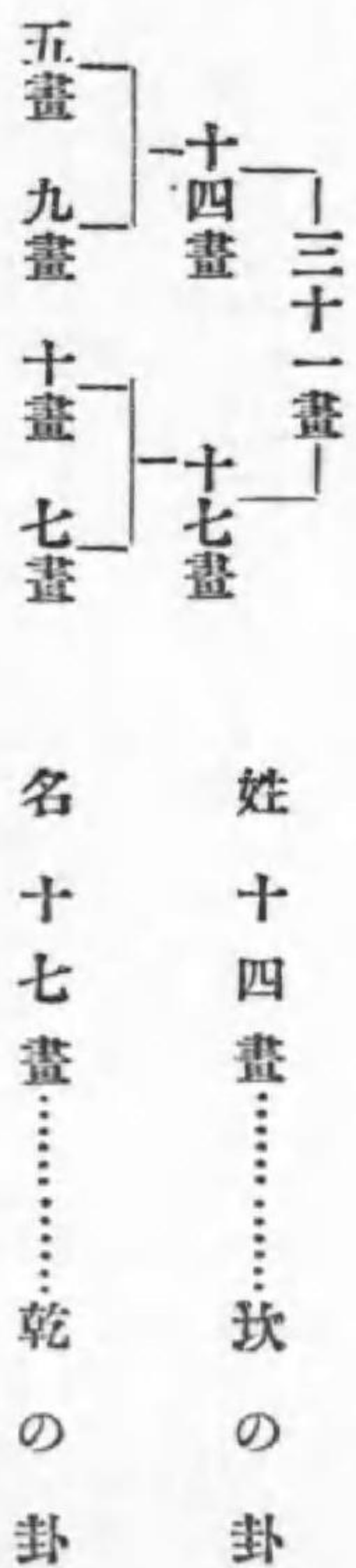


右に掲げた圖解は、上圖は水雷屯で、下圖はその六爻（乃ち上爻）の陰一が陽一に變じて變卦風雷益となつたのを現したのである。

以上になつて姓名の字畫數から易の本卦と變卦とを割出す方法を説明したのであるが、この本卦と變卦とに基づき、第四節の六十四卦の吉凶を適用して、この姓名の吉凶及びその運勢を判断するのである。乃ち本卦の水雷屯は草木の萌芽が地中より發生した計りでその力が弱く、風雨の難に悩む意味の卦であるから、山川清と云ふ姓名の人の運勢は、初年は微運にして辛勞困難を免れぬ象があるが、變

卦風雷益は雷地中より出で、風天上を行き、陰陽の二氣交合して萬物を鼓動し發育を助ける意味の卦であるから、初年は辛勞困苦に悩む象はあるが、中年以後は盛運に乗じて立身出世を得、特に金運、目上の引立を得る運氣があるのである。故に山川清と云ふ名は易卦の配合より見て吉姓名であると斷定するのである。

(例の二)



田畑耕作 姓名三十一畫……一爻變

上記の分解によると、姓の田畑は五畫と九畫で合せて十四畫であり、名の耕作は十畫と七畫で合せて十七畫である。これを例の一と同様の方法で割出すと、姓の十四は八で拂ふと一度拂へて六が残るから、八卦の順に數へて、乾、兌、離、震、巽、坎と六つ目の坎☵を上卦に取り、名の十七は八で拂ふと二度拂へて一が残るから、八卦の順による最初の乾☰を下卦に取るのである。乃ち上卦は坎で下

卦は乾となるから、本卦は水天需<sup>三三</sup>の卦となるのである。而して姓名合畫數は三十一であるから、これを六で拂ふと五度拂へて一が残ることになるから、一爻（初爻とも云ふ）が變ずることになり、下卦の乾<sup>三三</sup>の初爻陽一が陰一に變じて巽<sup>三三</sup>となつて、變卦は水風井<sup>三三</sup>の卦となるのである。そこでこの本卦と變卦とを六十四卦の吉凶に適用して見ると、水天需の卦は晩運を現す卦で、中年頃迄は故障困難ありて辛勞を免れざるも、功を急がずして忍耐努力すれば漸次運勢が開けて、晩年に至る程吉祥幸福を得るものであり、變卦の水風井は運氣平靜にして安泰を得る意味を現して居るから、田畑耕作と云ふ姓名の人は、中年頃迄は辛勞困難の象があるが、忍耐努力すれば中年後運勢が開けて、晩年に至る程吉祥幸福を得る運勢であると判断するのであつて、これも吉姓名と見て良いのである。その他、姓が三字以上のものでも、亦名が三字以上のものでも、前述の例に従つて姓の字畫數を合せた數を八で拂つて、その残りの數によつて上卦を割出し、名の字畫數を合せた數を八で拂つて、その残りの數によつて下卦を割出し、又姓名の合畫數を六で拂つて、その残りの數によつて變卦を割出し、斯くして本卦と變卦とを得て、それによつて姓名の吉凶及び運勢を判断すれば良いのである。倍以上に於いて、姓名の字畫數より易卦を割出す方法を説明したのであるが、新しき名を選ぶ場合には、この割出法を應用して選定するのである。例を以てこれを説明すれば、茲に木村と云ふ姓があるとするば

木は四畫、村は七畫で合せて十一畫となり、これを八で拂ふと一度拂へて三が残り、姓は離の卦になるから、これに適合するやうに名を選ぶのであつて、例へば修三と云ふ名を選ぶとすれば、修は十畫三は三畫で合せて十三畫となり、これを八で拂ふと、一度拂へて五が残るから巽の卦となり、姓が離で名が巽であるから、木村修三と云ふ姓名は、易卦に配合すると本卦は火風鼎の卦となり、鼎の卦は六十四卦の吉凶の説明を参照して見ると、中年頃は多少辛勞を免れぬ象はあるが、一生を通じては幸運を現し、特に目上の引立を受けて將來大いに功を遂げ名を揚げる運氣を備へて居るから吉祥であり又變卦を考へて見ると、姓名合畫數が十一と十三で二十四となり、これを六で拂ふと四度拂へて残りが無いから六爻變になることになり、本卦の火風鼎<sup>三三</sup>が變じて雷風恒<sup>三三</sup>の卦となるのであるが、この變卦の雷風恒は、これも六十四卦の吉凶の説明の所を参照して見ると、運氣平順の生れで漸次發展昇進する意味を現して居る卦で吉祥であり、而して姓名の意義及び文字の選擇も第三章に於いて説明したる條項に合致して居るから、木村修三と云ふ姓名は吉祥の姓名であると云ふことになるのである。

### 第二節 物の名前を易卦に配合する方法

第一節に於いては、人の姓名を易卦に配合する割出法及び姓に對して吉祥なる配合となるやうに名を選ぶ割出法を説明したのであるが、本節に於いては物の名前に易卦を配合する割出法を説明することにする。

借人の姓名に於ける場合は、姓と云ふものが一定不變のものであるから、その人の姓を基礎として易卦の配合が吉祥になるやうに名を選ばば良いのであるが、物の名前に於ける場合には人の姓の如き一定不變の基礎とすべきものがないから、その物の性質によつて色々な方法を取る必要が生ずるのである。先づ物の名前の中で屋號とか店舗の名とかを選定する場合には、何々屋とか、何々商店又は商會と云ふが如き、名前の下に附く屋又は商店商會等を基礎として、これによつて下卦を割出し、それに對して名前の字畫數より上卦を割出し、それが吉祥なる易卦の配合になるやうに選ぶのである。例へば、屋と云ふ字は畫數が九であるから、易卦の割出法によりて八で拂ふと一度拂へて一が残るから、下卦が乾となる譯である。それで寶屋と附けるとすると、寶と云ふ字は畫數が十七であるから、これを易卦の割出法によつて八で拂ふと二度拂つて矢張一が残つて、これも亦乾の卦となることにな

り、従つて上卦下卦共に乾で、本卦は乾爲天の卦となるのである。次に寶屋と云ふ名前の合畫數は十七と九で二十六となり、これを六で拂ふと四度拂へて二が残るから二爻變となつて、變卦は天火同人の卦となるのであるが、この本卦の乾爲天も、變卦の天火同人も六十四卦吉凶の説明にあるが如く、盛大繁榮を現して吉祥の卦であるから、寶屋と云ふ屋號は吉祥な屋號であると云ふことになるのである。その他、商店、商會、舖、會社、銀行、病院、旅館、會等の如きもの、選名も、この例に従つて同様に割出せば良いのである。次に商品の名前の如きは、花王石鹼とか、ライオン齒磨とか、福助足袋とか云ふやうな風のもの、選名は、石鹼とか、齒磨とか、足袋とか云ふやうに固定した種類名を基礎として、その字畫數より下卦を割出し、それに對して名前の字畫數より上卦を割出し、それが吉祥なる易卦の配合になるやうに選べば良いのであつて、前に説明した何々屋、何々商店等の屋又は商店等を基礎として、これに基づいて名前を選んだのと同様の形式方法である。然るに同じ商品であつても、例へば、正宗、月桂冠と云ふやうに固定した種類名の附せられてないものもあるのであるが、斯くの如き性質のもの、選名は基礎とすべき所がないのであるから、その名前全體の字畫數から割出すより外に仕方がないのであつて、その方法は、先づ易の八卦の中で、乾、離、震は勢ひの盛大な卦であるからこれを吉祥として、なるべくこれに當嵌めるやうに全體の字畫數を取るを最も吉とし、兎



巽、坤はこれに次いで吉祥の卦であるから、その名前を選ぶべき物の性質上、どうしても、乾、離、震の卦に當嵌めるやうに字畫數を取ることが出来なかつた場合には、兌、巽、坤の卦に當嵌まるやうに字畫數を取つて名を選ぶべきであつて、坎と艮の卦は凶、惡の卦であるから、字畫數が坎と艮の卦に當嵌まるやうになる名前は避けるべきである。例へば、その物の名前の全體の合畫數が、十七となれば易卦の割出法によつて乾となり、十一であれば離となり、十二であれば震となつて、その名前は最も吉祥であり、十八であれば兌となり、二十一であれば巽となり、二十四であれば坤となつて、乾、離、震となつた場合に次いで吉祥であり、若し二十二になれば坎、二十三になれば艮となつて凶惡である。と云ふ譯である。これを前に擧げた正宗と云ふ名前に當嵌めて考へて見ると、正宗の字畫數は合せて十三であるから、八で拂ふと一度拂へて五が残るから巽の卦となつて吉祥の名前に屬することになると云ふが如くである。

以上に於いて説明した何れかの方法によれば、物の名前を附ける場合にその吉凶を定めることが出来て、吉名を選び得るのである。

### 第三節 姓名又は物の名前を易卦に配合する

#### 場合に於ける字畫數の取方

姓名學に於いて吉凶を定める場合に、姓名又は物の名前の文字の畫數の定め方には二説があつて、一説は文字の正確なる畫數を取るべきであるとなし、他の一説は一般的に用ゐられる普通の數へ方によるべきであるとするのである。例へば、第一節の姓名を易卦に配合する方法を説明した所で例の一として引用した、山川清と云ふ姓名に於ける清と云ふ字は、普通では扁の、は三畫として數へられて居るから清と云ふ字は十一畫として取るべきであると主張する人と、扁は本來は三水で水であるから四畫として取るべきであつて、清と云ふ字は十二畫に數へるが正しい取方であると主張する人があるのである。この二説に對する予の意見は折衷説であつて、姓名の吉凶を定める條項の如何により、或は正確なる數を取るべきであり、或は普通の數へ方を取るべきであると主張するのである。乃ち、易卦に配合する場合及び陰陽の配置を定める場合には、易卦は數を基礎として割出すものであり、又その文字が陰に屬するか陽に屬するかと云ふことは、その文字の本質より見て定めるのである。

から、正確なる數へ方を取るのが正しい取方であると主張するものであり、單に姓名の文字の字畫數に基づいてその姓名の吉凶を考へる場合には、日常用ゐる字體より數へて定めるのが正しい取方であると主張するのである。

以上の予の主張によれば、姓名又は物の名前を易卦に配合する場合及び陰陽の配置に當る場合には、立心扁（イ）は四畫、ま扁は四畫、草冠は六畫、小里扁は右にあるものは邑で七畫、左にあるものは阜で八畫と云ふ風を取つて、その本來の正確な數に基づいて割出すべきであり文字の數より吉凶を論ずる場合には、立心扁（イ）もま扁も普通の如くに數へて三畫に取り、草冠は四畫、小里扁は三畫と取つてそれによつて文字の畫數を定めて考へれば良いことになるのである。

### 第四節 六十四卦吉凶の説明

姓名又は物の名前を易卦に配合して吉凶を定める爲には、六十四卦の各の吉凶を知つて居らねばならぬのであるから、次に簡單明瞭に各卦の意味と吉凶とを説明することにする。

☰ ☰ 乾上 乾 爲 天

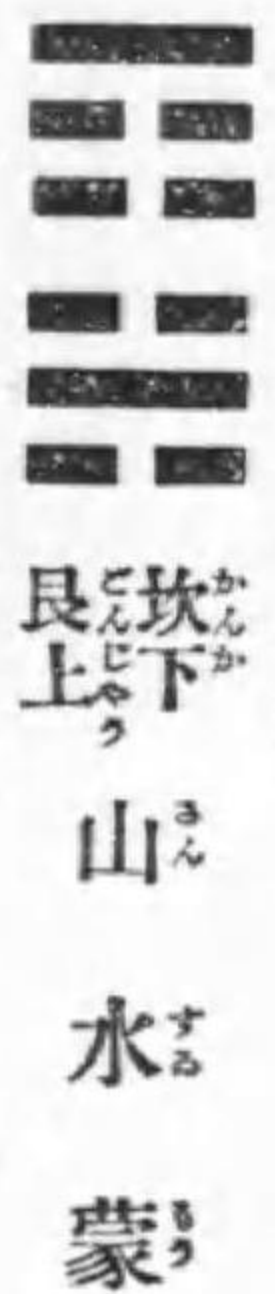
乾の卦は天に象つた卦で、盛大なる運勢を現し吉祥の卦であるから、選名に配合して大吉であるが勢ひに乗過ぎて運氣を破る惧れがあり、特に女子には強過ぎる傾きがある。

☷ ☷ 坤下 坤 爲 地

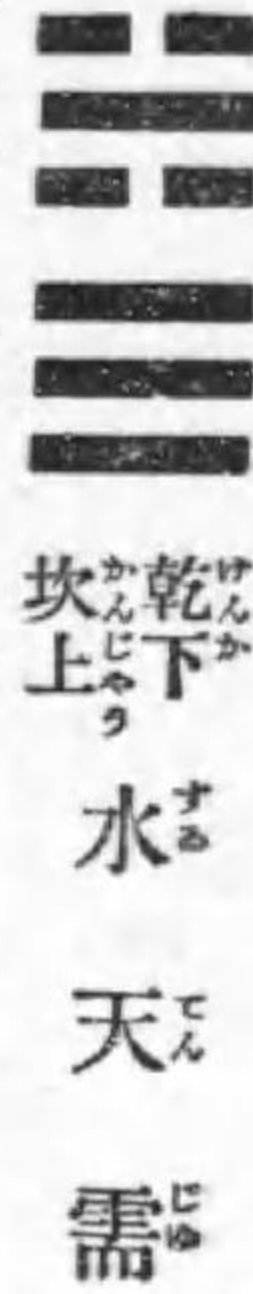
坤の卦は乾を天に象れるに對し、地に象つた卦で、花々しい運勢を意味して居らぬが、その代りに平穩にして波瀾浮沈少なく、分を守りて進めば、漸々に運勢の開けて行く象を現した卦で、吉祥に屬する卦であるから、選名に配合して吉である。

☳ ☵ 震下 水 雷 屯

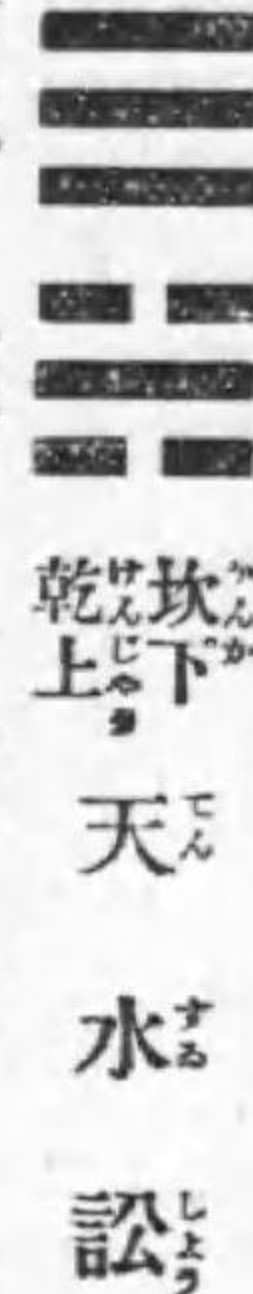
屯の卦は、草木の種子が始めて地を破りて萌芽を發し、風雨の難に逢ひて伸擡む意味の卦で、初めは微運の象があつて辛勞困難を免かれざるも、漸次に運氣開けて末になる程盛運幸福に向ふ象を現し先づ吉祥に屬する方の卦であるから選名に配合して差支へない。



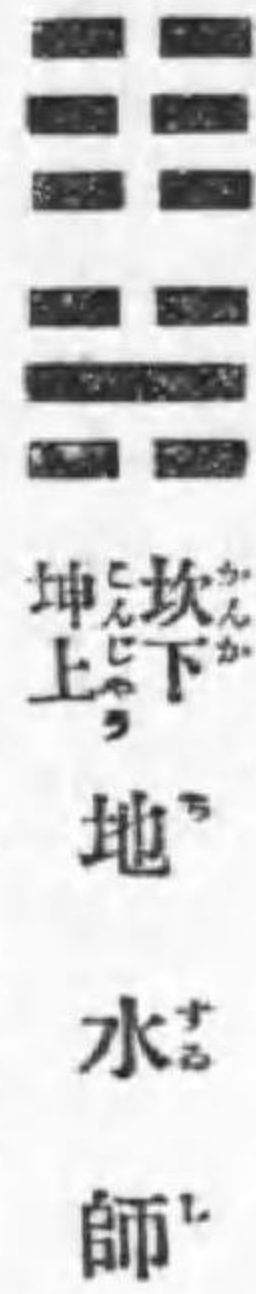
蒙の卦は、幼童の智能開けずして事理を辨せざる意味の卦で、初めは微運の傾きがあつて、兎角迷ひがちに流れ物事の定らざる象があるが、末になれば夜の明け行くが如く吉運幸福を得るに至る卦で先づ吉祥に属する方の卦であるから、この運氣さへ注意すれば選名に配合して差支へない。



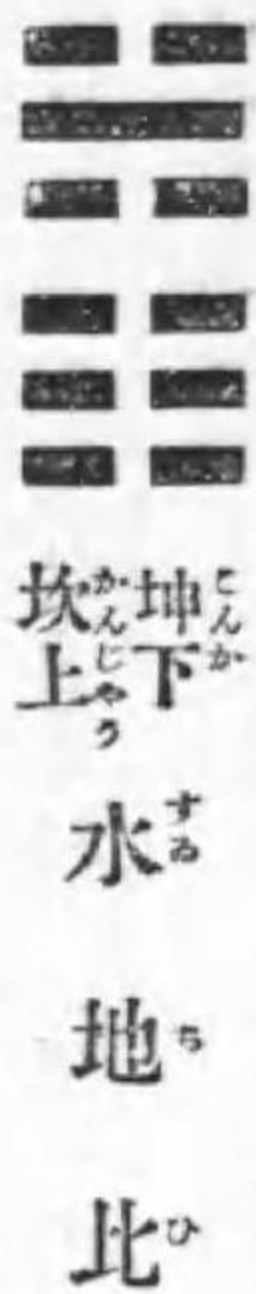
需の卦は、進まんと欲するも險難前にありてこれを阻むるが故に、進む能はずして時節の到来を待つ意味の卦で、初めは辛勞困難を免れざるも、功を急がず忍耐努力して時を待てば、運氣漸次に開けて後になる程盛運幸福を得る卦で、吉祥の卦であるから選名に配合して吉である。



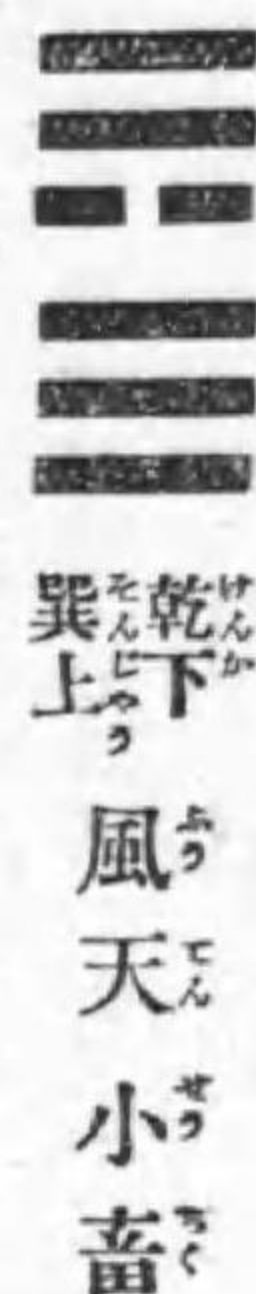
訟の卦は、陰陽の二氣相反し相背きて交らざる意味の卦で、運氣に波瀾多く、浮沈盛衰の定らざる象があつて、凶惡の卦であるから選名には配合せぬが良い。



師の卦は軍旅を意味する卦で、初運より中運へかけては波瀾がちに流れ、危険困難に遭遇する象があるが、正道を守りて忍耐努力すれば、遂に危険困難を排除して後運は功を遂げ幸福を得る象があつて吉祥に属する卦であるから、選名に配合して吉である。



比の卦は、親比和合を意味する卦で、平安穩健の運勢を現し選名に配合して大吉の卦であり、特に女子の姓名に配合するに吉祥である。



小畜の卦は、畜積又は畜止を意味する卦で、運勢の開けるのが晩く、初運より中運へかけては兎角意に任せぬ象があるから、凶惡の卦と云ふ程ではないが、餘り吉祥の卦とは云はれないから、選名には先づ配合せぬ方がよい。

乾上 兌下 天澤履

履の卦は禮を意味する卦で、これも急進妄動を慎しみ、忍耐温和を守れば末には幸福を得る望みはあるが、初速中運は辛勞艱難多く、危険に處する象があるから、大凶の卦と云ふ程ではないが、餘り吉祥の卦とは云はれないから、なるべく選名には配合せぬ方が多い。

乾下 坤上 地天泰

泰の卦は、天地陰陽の二氣相交りて和合し、安泰を意味する卦で、平安幸福なる運勢を現し、選名に配合して大吉の卦であるが、幸運に狎れて驕りを生じ、爲に晩運を亂す惧れがあるから、この點には注意を要する。

坤下 乾上 天地否

否の卦は、天地陰陽の氣隔絶し、百事塞がりて通せざる意味の卦で、薄運にして辛勞艱難多き象があり、凶惡の卦であるから、選名には配合しないが良い。

離下 乾上 天火同人

同人の卦は、相親しみ相和する意味の卦で、人徳を得て大功を遂げ名聲を揚げる運勢を現し、選名に配合して大吉の卦である。

離上 乾下 火天大有

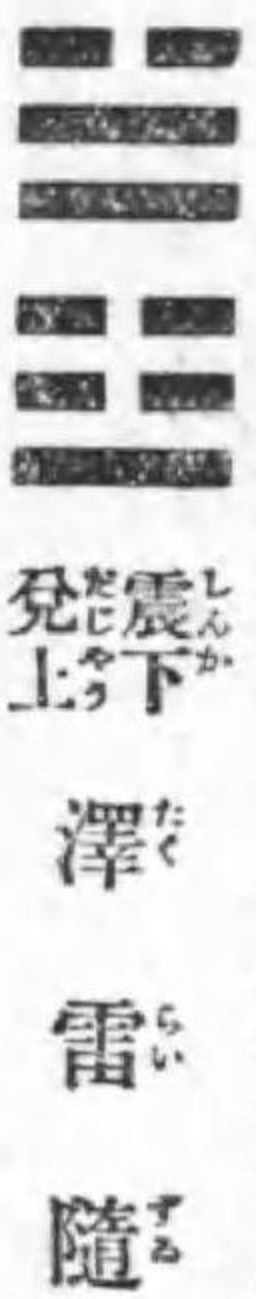
大有の卦は、弘大にして豊盛を意味する卦で、金運があり、又人の上に立ちて大業を遂げ名聲を揚げる象があつて、盛大なる運勢を現し、選名に配合して大吉の卦である。然し慢心を生じて破れを招く憂ひがあるから、この點には注意を要する。

艮下 坤上 地山謙

謙の卦は、謙讓の徳を意味する卦で、運氣平順にして末になる程盛運幸福を得る象があり、選名に配合して大吉の卦である。

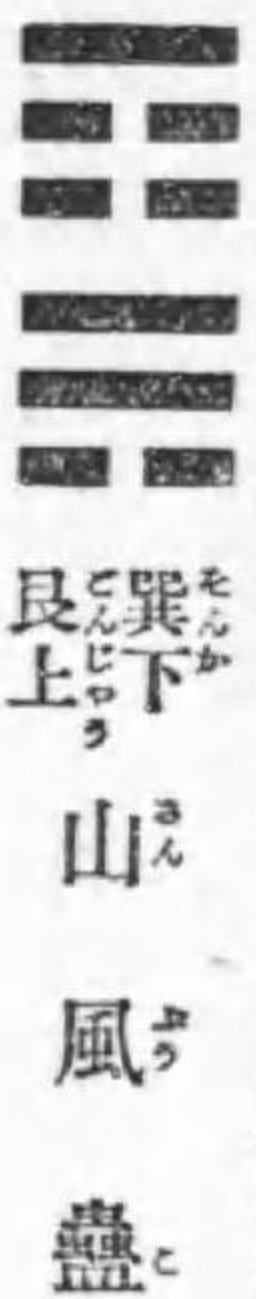
坤下 震上 雷地豫

豫の卦は悦樂を意味する卦で、吉運順調を得て百事意の如くなる象があり、選名に配合して吉祥の卦であるが、盛運に慢心して驕奢逸樂に流れ、末の亂るゝ憂ひがあるから、この點には注意を要する。



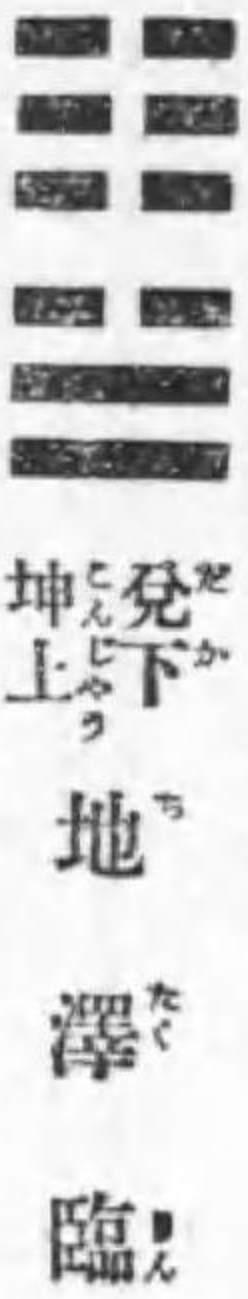
震下 澤 雷 隨

隨の卦は、從ふの義を現せる卦で、自主獨力のことと適せず、人に從ひて功を遂げる象があり、慢心を生じ我意に走る時は破れを招く象があつて、凶惡の卦と云ふ程ではないが、又吉祥の卦とも云はれないから、選名に配合することは避けた方がよい。然し女子の姓名には用ゐてよい。



巽下 山 風 蠱

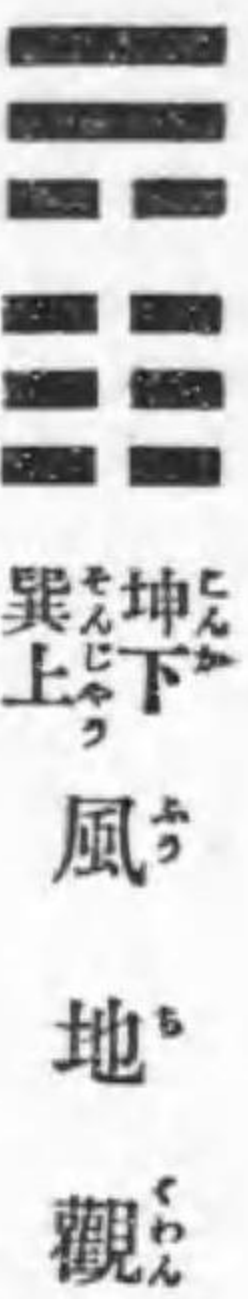
蠱の卦は、壞れ亂るゝ義を現せる卦で、初運は吉なるも終りの亂るゝ象があつて、凶惡の卦であるから、選名には配合せぬがよい。



兌下 地 澤 臨

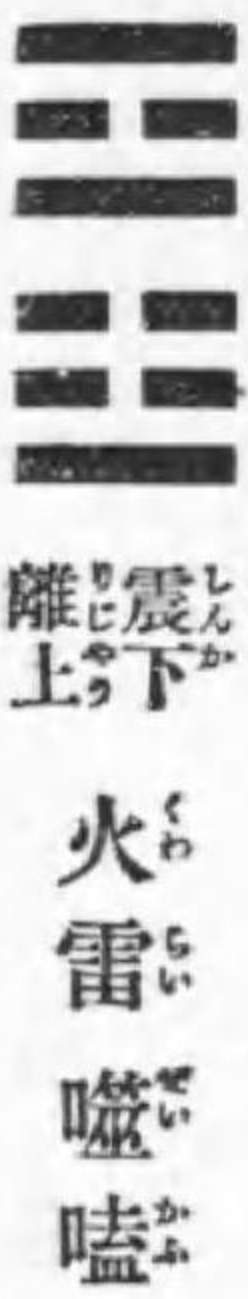
臨の卦は、上より下に望む義の卦で、堅實を守りて漸進すれば、漸次發展を得るものがあるが、急

進妄動に流るゝ時は運氣を破り困難に陥る象がある。故にこの運氣を心得て注意すれば、選名に配合して差支へない。



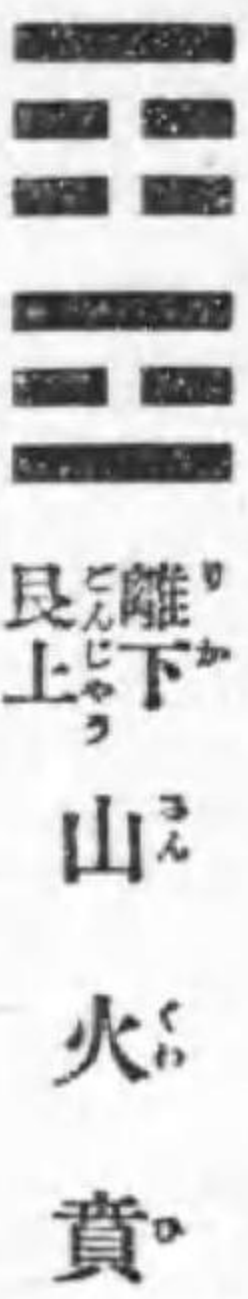
坤下 風 地 觀

觀の卦は、上より下に示し、下より上を仰ぎ見る義の卦で、勢ひはあるも波瀾曲折多く、浮沈の激しい運勢を現し、凶惡の卦ではないが、選名に配合するには吉祥とは云はれないから、なるべくは避けた方がよい。



震下 火 雷 噬嗑

噬嗑の卦は、嚙合す意味を現せる卦で、艱難辛勞多き運勢を現して居るから、選名には配合しない方がよい。



離下 山 火 賁

賁の卦は、飾る義を現せる卦で、初運は吉運順調なるも、末の亂るゝ象があるから、選名に配合す

ることは餘り吉祥でない。

坤下 山地 剝  
艮上

剝の卦は、陰が陽を剝して消盡する意味の卦で、初運は吉祥なることあるも、漸次衰運に傾き、艱難困苦に陥る象があり、大凶の卦であるから、選名の配合には避くべきである。

震下 地雷 復  
坤上

復の卦は、陰消し陽長じて恢復することを現せる卦で、初運は微弱の傾きあるも、漸次運氣の發展昇進する象があるから、大吉の卦で、選名の配合して吉祥である。

震下 天雷 无  
乾上

无の卦は、亂るゝことなく、正しく誠なる義の卦で、變化浮沈烈しく、殊に我意我慾に流れて困窮災難を招く象があるから、選名の配合には避くべきである。

乾下 山天 大畜  
艮上

大畜の卦は、止め集むることの大なる義の卦で、初めは微運の傾きがあるが、末になる程運氣開けて、盛運幸福を得る象があつて、吉祥の卦であるから選名の配合して大いに吉である。

震下 山雷 頤  
艮上

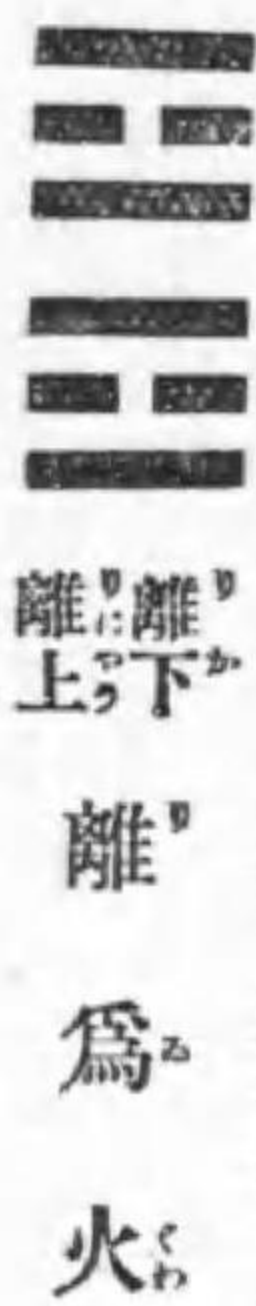
頤の卦は、養ふの義を現せる卦で、言動慎しみを欠き不正に走りて運氣を破る憂ひがあり、殊に事の半ばに於いて亂れを招く意があるから、選名の配合することは避くべきである。

巽下 澤風 大過  
兌上

大過の卦は、陽の大、陰の小よりも過ぎたる義の卦で、初運は吉運順調なるも、末に至る程亂れを生じ、失敗蹉跎を招きて困窮に陥る象があつて、凶悪の卦であるから、選名の配合には避くべきである。

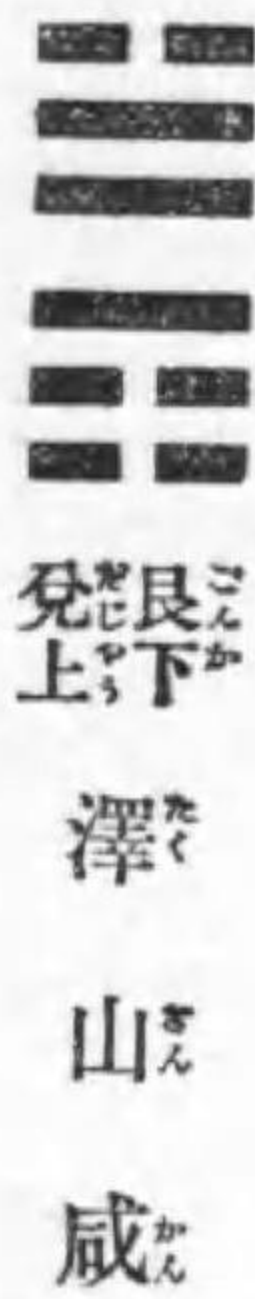
坎下 坎 爲 水  
坎上

坎の卦は、險難憂苦を意味する卦で、逆境に處し、幾多の危険艱難に遭遇して百事意の如くならざる象を現して居るから、選名の配合には避くべきである。



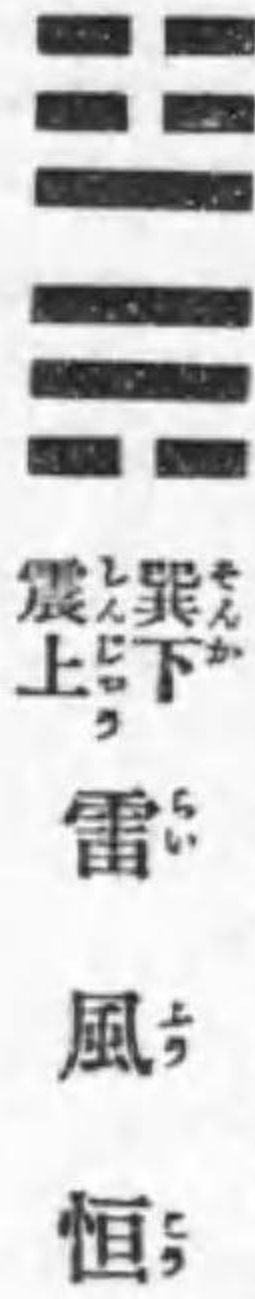
離下 離上 離 爲 火

離の卦は、物に附く義、又明かなる義を現せる卦で、盛運を意味せる吉祥の卦であるから、選名の配合して良いが、我意剛情に流れ、分外に走りて折角の運氣を破る憂ひがあるから、その點には注意を要する。



兌下 兌上 澤 山 咸

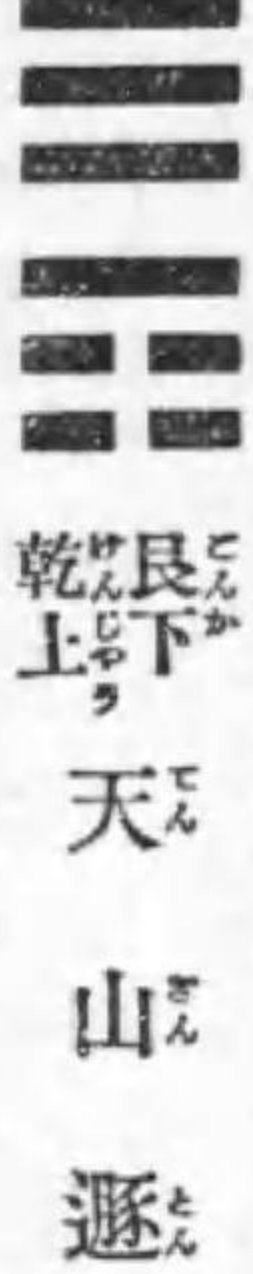
咸の卦は、感ずるの義で、篤實真正を守りて進めば、運氣次第に發展して平安を得る象があり、吉祥の卦であるから、選名の配合して大いに吉である。



巽下 震上 雷 風 恒

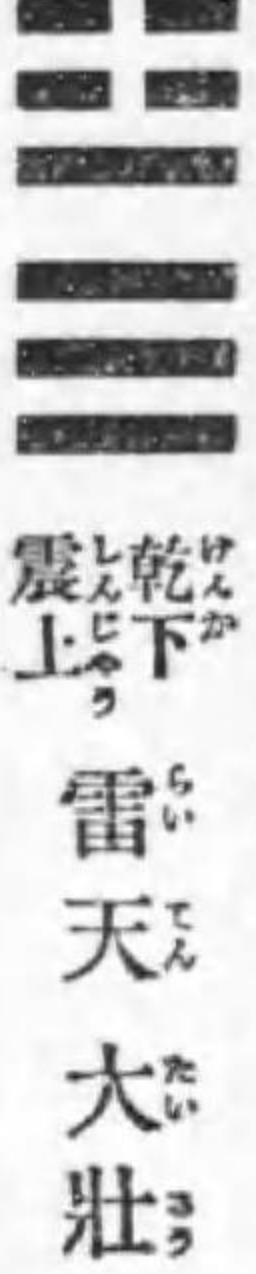
恒の卦は、常にして久しき義を現せる卦で、運氣平順にして漸次に發展し、平安無事を得る象があ

り、吉祥の卦であるから、選名の配合して大いに吉である。



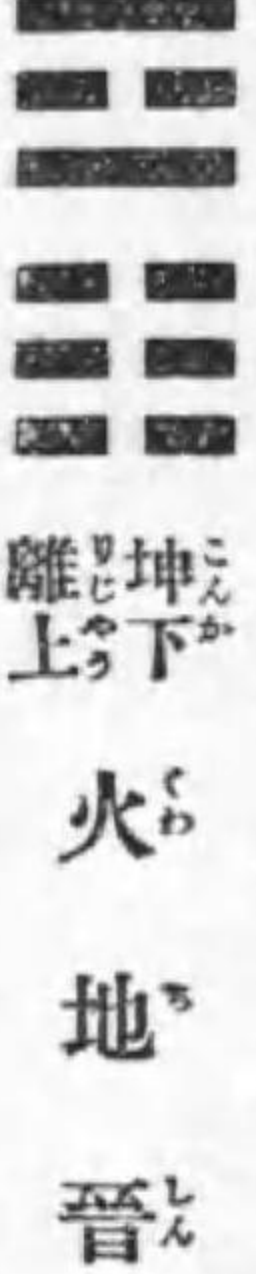
艮下 乾上 天 山 遯

遯の卦は、遁れ去るの義を現せる卦で、初運は吉なるも後には衰運に陥る象があつて、凶惡の卦であるから選名には配合せぬが良い。



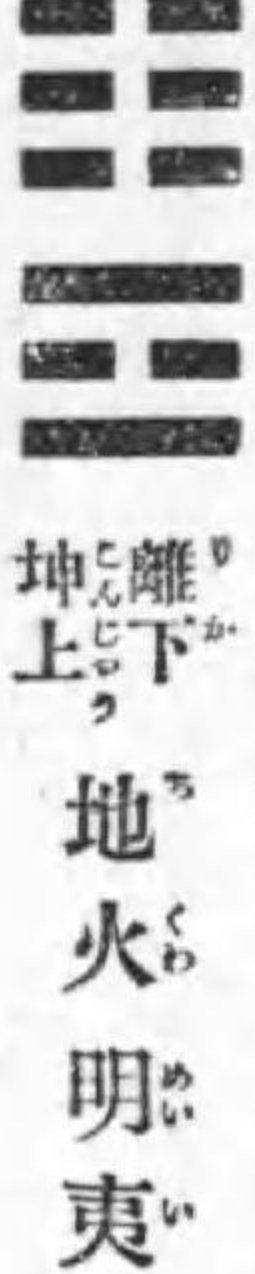
乾下 震上 雷 天 大 壯

大壯の卦は、勢ひ盛んなる義の卦で、吉祥の意を有する卦なるも、急功を望み、分外に走りて折角の運勢を破る象があるから、選名の配合することは餘り宜しくない。



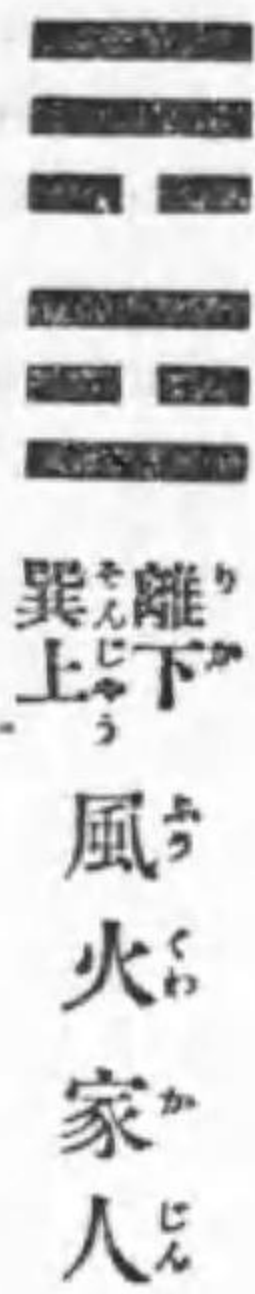
坤下 離上 火 地 晉

晉の卦は、進み昇る義を現せる卦で、發展昇進の運氣があり、目上の引立を受けて功を遂げ名聲を擧げる象があつて、吉祥の卦であるから、選名の配合して大いに吉である。



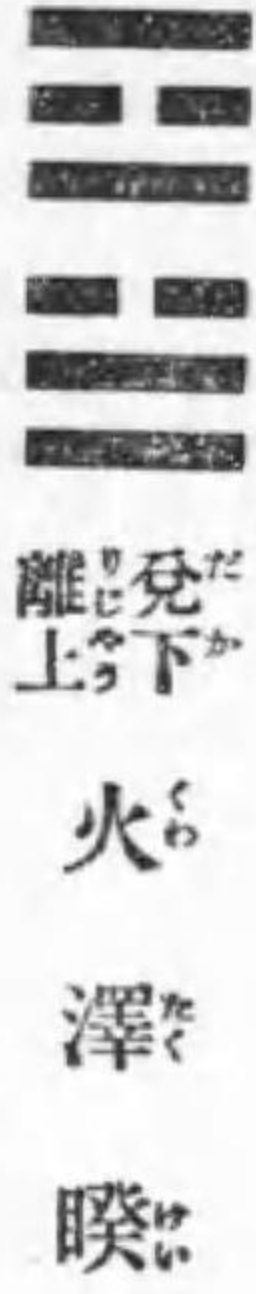
離下 坤上 地 火 明 夷

明夷の卦は、明かなるもの蔽はれ傷けらるゝ義の卦で、忍耐努力して時を待てば末には幸福を得る象はあるが、大體を通じて辛勞艱難多く、不遇の運勢を現して居るから、選名の配合にはなるべく避けた方がよい。



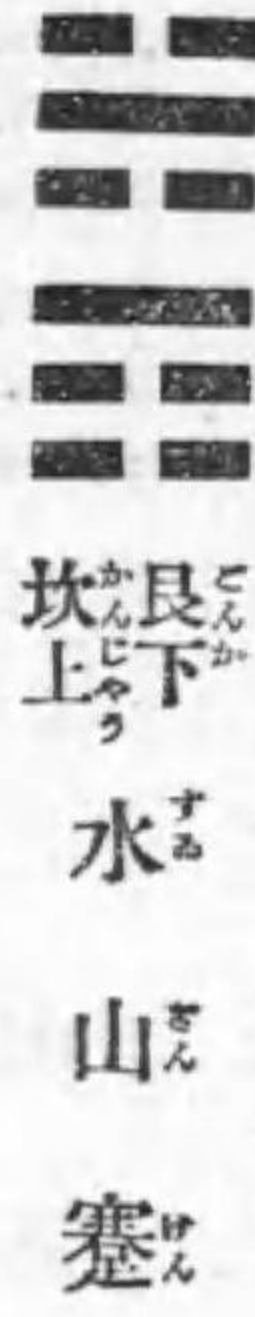
離下 風火家人

家人の卦は、一家の人を統べ治むる義の卦で、平安順調の運勢を現して居るから、選名の配合には大いに吉である。



離上 火澤睽

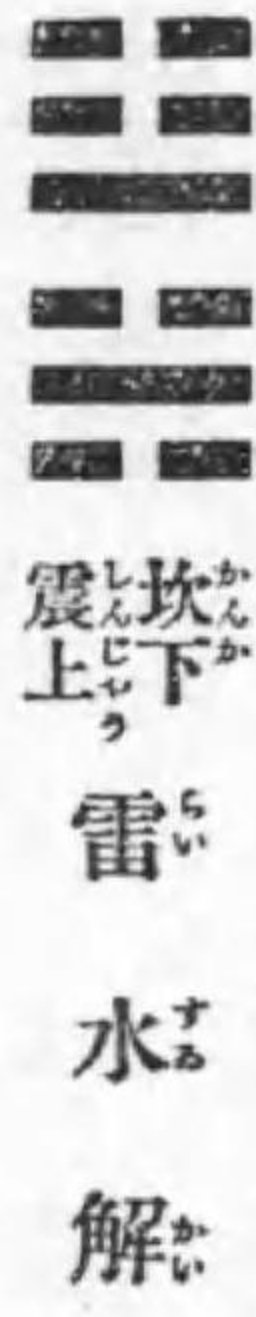
睽の卦は、背き違ひて離るゝ義の卦で、物事に故障齟齬を生じ、辛勞困難に陥る象があつて凶惡の卦であるから、選名の配合には避くべきである。



艮下 水山蹇

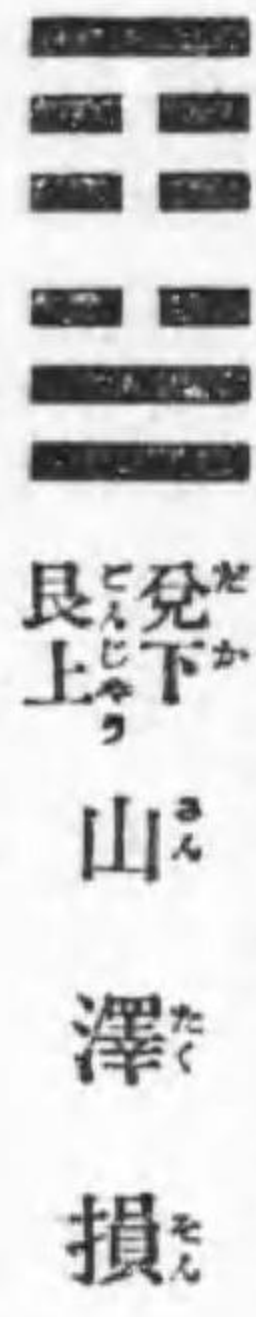
蹇の卦は、足難みて行くこと能はざる義の卦で、薄運にして辛勞困難多く、波瀾浮沈を免れざる象

があつて凶惡の卦であるから、選名の配合には避くべきである。



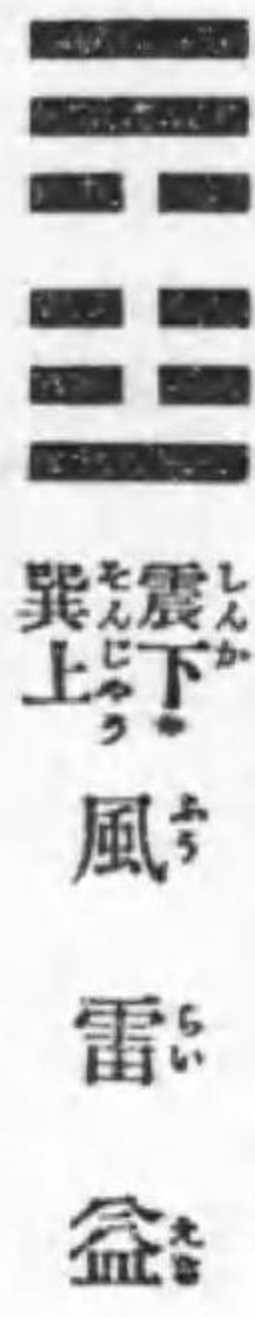
震上 雷水解

解の卦は、難み解け憂ひ散ずる義の卦で、初めは微運にして辛勞困難を免れざるも、漸次運氣開け來りて、末になる程盛運幸福を得る象があるから、選名に配合して吉祥の卦である。



兌下 山澤損

損の卦は、滅じ損ずる義の卦で、忍耐努力して時節を待てば、末には幸運に見舞はれる望みはあるが、大體を通じて不遇逆境に處する象があるから、選名の配合にはなるべく避ける方がよい。



震下 風雷益

益の卦は、増益する義の卦で、盛運を現し、特に、金運、上位の引立を得る象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大いに吉であるが、慢心を生じ怠慢游惰に流れて折角の幸運を破る憂ひがあるから、この點には注意を要する。



兌上 乾下 澤 天 夫

夫の卦は、決する義の卦で、初運は盛んなることあるも、挫折して逆運困難に陥る象があり、凶悪の卦であるから選名の配合には避くべきである。

巽下 乾上 天 風 姤

姤の卦は、期せずして相遇する義の卦で、運氣停滞して伸びざる象があり、凶悪の卦であるから選名に配合することは避けたが良い。

坤下 兌上 澤 地 萃

萃の卦は、聚る義を現せる卦で、吉運にして幸福の集る象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大いに吉である。

巽下 坤上 地 風 升

升の卦は、恰も種子地中より生じて草木に成長するが如く、進み昇る義を現せる卦で、運氣次第に

昇進して大功を遂ぐる象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大吉である。

兌上 坎下 澤 水 困

困の卦は、苦しみ難む義を現せる卦で、艱難辛苦を重ねる象があり、凶悪の卦であるから選名の配合には避くべきである。

巽下 坎上 水 風 井

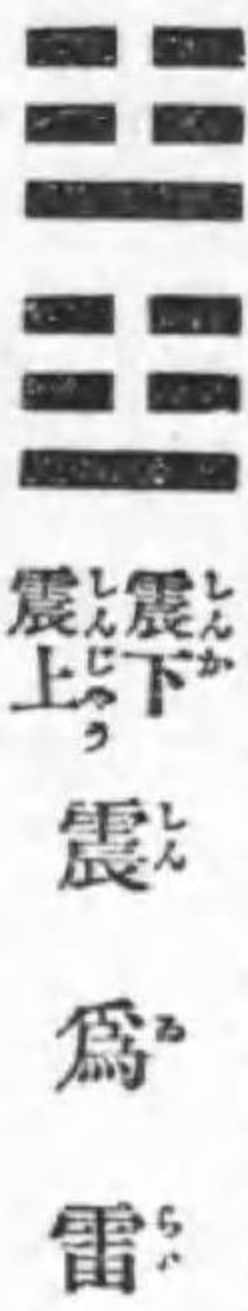
井の卦は、非戸の水を湧出して恵澤極りなき義を現せる卦で、運氣平靜にして波瀾浮沈なく、順調に運ぶ象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大いに吉である。

離下 兌上 澤 火 革

革の卦は、改り變る義の卦で、運勢に變化波瀾烈しく、餘り吉祥の卦でないから、選名に配合することは避けたが良い。

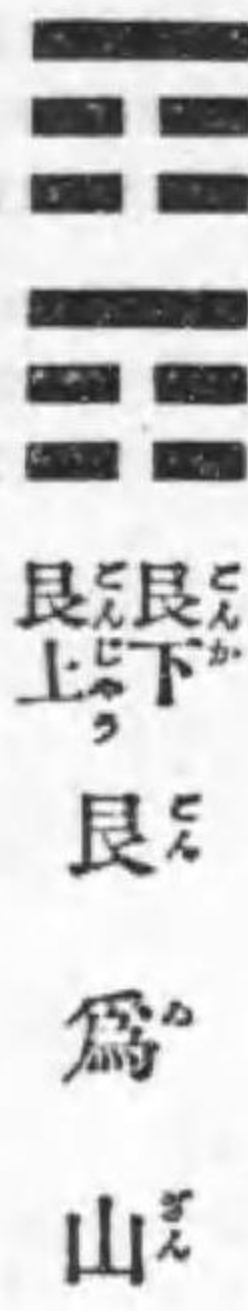
巽下 離上 火 風 鼎

鼎の卦は、金属にて製し食物を烹る器具の名に取つた卦で、初運は多少辛勞を免れざる象あるも、大體を通じて吉祥の卦であり、特に晩運の幸福なる象があるから、選名に配合して吉祥である。



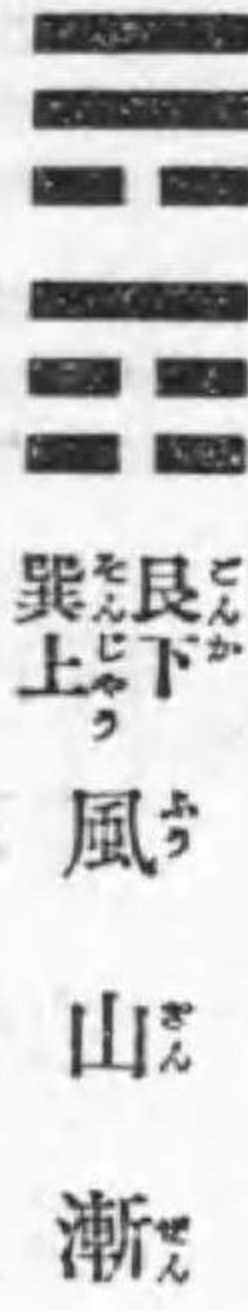
震下 震 爲 雷

震の卦は、震ひ動く義を現せる卦で、運勢盛んにして大功を遂げ名聲を揚げる象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大いに吉であるが、勢ひに乘過ぎて終りを全うせざる惧れがあるからこの點には注意を要する。



震上 震 爲 雷

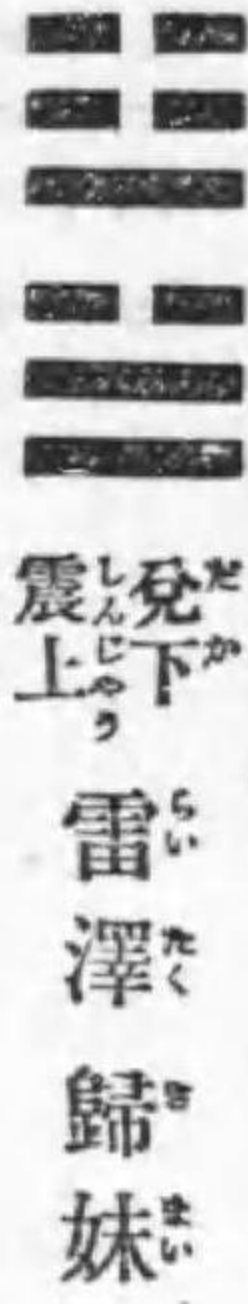
艮の卦は、兩山對立して相往來することなきが如く、止るの義を現せる卦で、運氣滯滞して意に任せず、艱難辛勞多き象があり、凶惡の卦であるから選名の配合には避けたが良い。



艮上 艮 爲 山

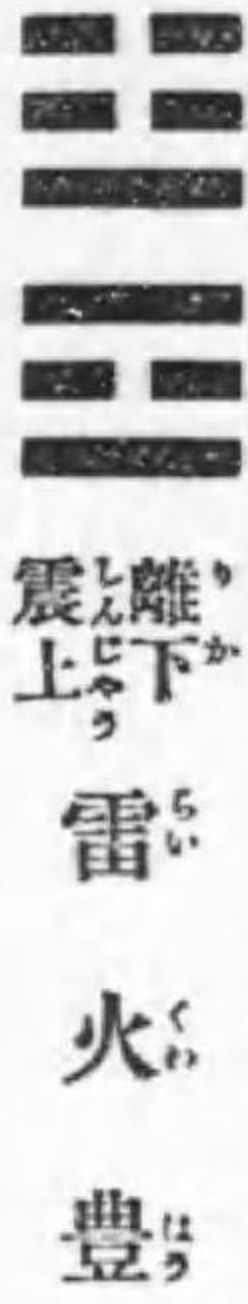
漸の卦は、木の山上に生じて成長するが如く、順序を以て進むの義を現せる卦で、小を積みて大を

なし、漸次に運氣の發展昇進する象があつて、吉祥の卦であるから選名に配合して大吉である。



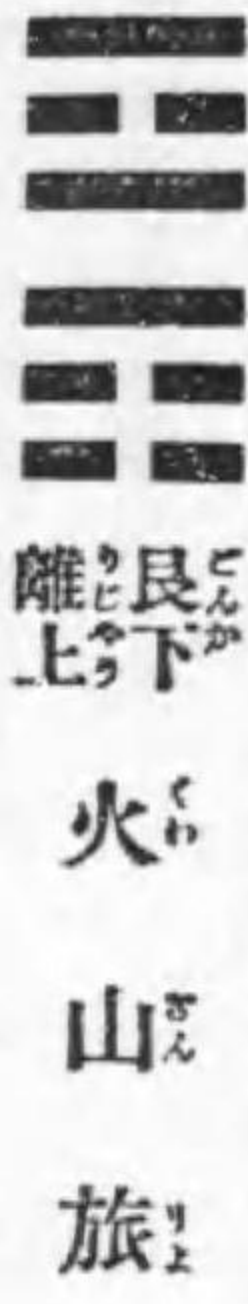
震上 震 澤 歸 妹

歸妹の卦は、少女歸嫁して配遇正しきを得ざる義の卦で、初運は吉なるも終りは亂れて、辛勞困難を招き逆境に沈む象があり、凶相の卦であるから選名に配合することは避くべきである。



離上 離 火 豐

豐の卦は、電雷勢ひを振ひて遍く遠きに及ぶが如く、盛大の義を現せる卦で、運氣盛大にして他に優れ、特に金運豊かなる象があり、吉祥の卦であるから選名に配合して大吉であるが、驕りを生じて亂れを招く憂ひがあるからこの點には慎しみを要する。



震上 震 火 旅

旅の卦は、行旅の如く遷轉して止まらざる義を現せる卦で、孤獨に流れて波瀾浮沈烈しく、運勢定らずして辛勞多き象があり、凶惡の卦であるから選名の配合には避くべきである。

巽上 巽下 巽 爲 風

巽の卦は、巽順の義を現せる卦で、運勢に波瀾變化多く、吉凶の定らざる象があつて、非常に凶惡の卦と云ふ程ではないが、選名の配合には絶対に凶ではないが、どちらかと云へば避けた方がよい。

兌上 兌下 兌 爲 澤

兌の卦は、悦ぶの義を現せる卦で、初運は非常に吉運幸福なるも、後運の挫折する象があるから、選名の配合には絶対に凶ではないが、どちらかと云へば避けた方がよい。

坎上 坎下 坎 爲 水

渙の卦は、春風至りて氷雪解散消釋するが如く、解け散ずる義を現せる卦で、初運は微にして辛勞艱難を免れざるも、中運後運は盛大幸福を得る象があるから、選名に配合して差支へない。

兌上 兌下 水 澤 節

節の卦は、竹節の疎密宜しきを得たるが如く、物事に限りありて機宜を得るの義を現せる卦で、節

度を守り堅實に進めば、運氣次第に開けて末になる程幸福を得る象があり、吉祥の卦であるから、選名に配合して吉である。

兌上 兌下 風 澤 中孚

中孚の卦は、内に孚信ありて中實なる義の卦で、花々しい運勢ではないが、堅實穩健なる象があり吉祥の卦であるから選名に配合して吉である。

艮下 震上 雷 山 小過

小過の卦は陰の小、陽の大に過ぎ、小なるものが過ぎる義の卦で、大望を抱き分外に走りて運氣を破り、逆境に沈む象があつて、凶惡の卦であるから選名の配合には避くべきである。

離下 坎上 水 火 既濟

既濟の卦は、物事既に済ひて皆成就せる義の卦で、初運は吉なるも後運の亂るゝ象があつて、餘り吉祥の卦とは云はれないから、選名の配合には避けたがよい。



坎下 火水未濟  
離上

未濟の卦は、物事未だ済はずして成就せざる義の卦で、初運は微弱にして辛勞艱難を免れざるも、恰も夜の明け行くが如く、末になる程次第に盛運幸福に向ふ象があつて、吉祥の卦であるから選名に配合して吉である。

### 第五章 字畫數による姓名の吉凶

姓名又は物の名前に用ゐたる文字の畫數によつて、その吉凶及び運勢を判断することは、姓名學の重要な一項となつて居るが、その理由とする所は矢張易に基つて居るのであつて、乃ち易經の繫辭傳に「有ニ太極ニ是レ生ニ兩儀ニ兩儀生ニ四象ニ四象生ニ八卦ニ八卦定ニ吉凶ニ吉凶生ニ大業」（一）とあるを基として稱へ出したものであるが、その説は、大極動きて陽を生ず、乃ち天一であつて、靜まりて陰を生ず、乃ち地二である。又動きて天三を生じ再び靜まつて地四を生じ、又動きて天五を生ずるのである。乃ち天數は三つであつて地數は二つである。この五つの數は萬物の生れる數であつて、その天五が天一と合して地六となり、地二と合して天七となり、天三と合して地八となり、地四と合して天九となる。斯くの如く生成相循環して玄妙なる變化を起すものであるが、この變化の力を應用して萬物を推究して行けば、宇宙の神秘を發き、萬物の運命を悟ることが出來るとなし、この理に基つて一から九迄の數は凡ての數の基礎となるものであるから、先づこの一から九迄の數の吉凶を定め、これを根元として他の凡ての數の吉凶を定めたのである。斯くの如く一から九迄の數が基礎となつて居るのであるから、次にその各の數の吉凶と、その吉凶を定めた理由とを説明して、それに對する予の見解

を述べ、それから一般の吉凶を説明することにする。

一、凡ゆる数の中で最上の吉数とせられ、大功大業を遂げ、盛名を馳せ幸福を得る運勢を現す数とせられて居る。その理由とする所は、一は太極を現し、天地萬有の始めとなり元となる数であるからであると云ふにある。

二、大凶悪の数で、内外共に波瀾を生じて安定を得ず、辛勞困難に陥り、病氣、短命、不具等の災ひを意味する数とせられて居る。その理由とする所は、易に於いて二を陰とし、未だ混沌として形を成すに至らざる数であるからであると云ふにある。

三、自然の幸福を受け、名實共に備り、福運を現し大功大業を遂げ、立身出世を得る運勢を有する幸運数とせられて居る。その理由とする所は、三は一と二との陰陽が相合して萬物を生じたる象で、乃ち成形確定の数であるからであると云ふにある。

四、精神の發達を缺き、不具破壊の意味を現せる数で、病氣、短命、不幸等の象を現し、辛勞困難に終る凶運数であるとせられて居る。その理由とする所は、四は凶運数二の倍数で、天地人三才の三には一を餘し、五行の五には一つ不足し、不具の数であるからであると云ふにある。

五、心身共に健全敏活にして福祿兼ね備り、立身發達の運勢を有し、富貴幸福を得べき吉運数とせら

れて居る。その理由とする所は、五は一より九迄の基数の真中に位して、成数の根元をなし、恰も中年血氣の壯なる時期の如くであるからであると云ふにある。

六、盛大幸福を現す吉数ではあるが、前途に衰運の兆を含んで居るとせられて居る。その理由とする所は、六は吉数三の相和で吉運数ではあるが、一方凶運数なる二と四との合せる数で、然も陽数でなく陰数であるから、吉運中に凶運の兆を含んで居ると云ふにある。

七、剛情の氣を有し、内外共に和合を缺く象があつて、稍運勢に故障を免れぬ傾きがあるが、よく天賦の能力によりて萬難を排し、功を遂げ幸ひを得るに至る吉運数とせられて居る。その理由とする所は、七は五と二と合したる数であり又六と一と合したる数で、何れの数の倍数でもなく單獨の数であるから、内に剛情の氣を含み、而して五と一との吉運を有するも、一面二と六との衰運を含んで居るから、吉運数ではあるが、その中に故障の象を免れないと云ふにある。

八、堅固にして進取の氣を有し、忍耐克己よく萬難を排して、功を遂げ發達を得る運勢を現せる吉運数であるが、その一面に相反く象があつて幾分凶悪の氣を含むとせられて居る。その理由とする所は、八は五と三との吉数の相和であるから、堅固なる氣を有して發達を得る吉運数であるが、又凶運数二と四との倍数であつて、吉運中に幾分その凶悪の氣を含むが故に、相反く象があると云ふに

ある。

九、辛勞困難の象を現し、逆運不遇に終り、親子兄弟の縁薄く、短命災害を意味する大凶運數とせられて居る。その理由とする所は、九は成數の終極の數で、窮極を意味し、運氣の盡きたる象を現して居るからであると云ふにある。

以上に於いて凡ての數の基數である、一から九迄の數に就いて、その各の數が現すとせられて居る、吉凶及びその理由とする所を説明したのであるが、姓名學に於いて字畫數よりその吉凶並に運勢を判断するのは、この一から九迄の數の吉凶を基礎として、他の凡ての數に及ぼすのである。そこでこの字畫數と姓名の吉凶と云ふ點に關する予の意見は如何と云ふに、予の見解では數そのものには易卦が吉凶を現して居る如き意味はないと考へるのであるが、然し數と云ふものは吾々人間の生活に一時も離れることの出来ないものであつて、従つて關係が密接である爲に、人間の心理に微妙なる感じを與へるものであるから、そこに色々な運命的な信仰を生じて來た傾きがあつて、洋の東西を問はず、世界人類の凡てがこれに支配されて居る風があり、その結果その人々によつて、好きな數と嫌ひな數があるもので、この好悪がその人の心理状態を動かして、知らず／＼の間に運命に影響を及ぼして來ると云ふことは、否定することの出来ない事實であると信するのである。故に姓名の字畫數と

云ふものも、それが吉數であると信じて姓名に用うれば、その結果その人の心理的關係から吉運を生じて來るものであり、反對に自分の姓名の字畫數が凶數であると思ふと、心理状態に悪影響を及ぼして、その結果運命にも凶惡を齎すと云ふことになる。姓名又は物の名前を選ぶ場合に、吉運の數を適用して、凶運の數を避けることは、姓名又は物の名前の意義及び文字の選擇並に易卦との配合と云ふ條項に次いで、重んずべき條項であると考へるのである。故に以下各數に就いて、その吉凶とその數の現す運命とに關して、世に行はれて居る說の中で最も正確と信する說を述べて置くから、姓名又は物の名前を選ぶ場合には、姓名の意義及び文字の選擇並に易卦との配合の二條項に次いでなるべく吉運數を選んで適用せられるが良い。

- 一、宇宙萬有の始めとなり元となる基數であつて、天地長久の運氣を現し、大功を遂げ大名を揚げる象のある大吉運數とせられて居る。
- 二、混沌不定にして未だ形を成さざる數で、運氣安定せず内外波瀾を生じ、常に不安に流れ、病難、不具、短命、不幸、災害等を意味する大凶惡の數とせられて居る。
- 三、陰陽相合して萬物形を成す數で、名利兼ね備り、大業大功を遂げて人の上に立つ運氣を現せる大吉運數とせられて居る。

- 四、先に説明せる如く不具破壊の數で、精神の發達を缺き、諸事功を遂げ難く、病難、短命、災害等を意味し、辛勞困難に終る運勢を現せる凶運數とせられて居る。
- 五、陰陽交感合の數で、精神敏活、身體健全の象を現し、福祿兼ね備り、目上の引立を受け富貴功名を克ち得る吉運數とせられて居る。
- 六、吉運數三の相和で天徳備り、運氣隆昌を見、金運榮譽を得る吉運數なるも、一面二と四との凶運を藏するを以て、所謂滿つれば缺けると云ふ象があり、末の亂る、憂ひがあるから驕慢に流れ調子に乗らざる心掛けが肝要であるとせられて居る。
- 七、先に説明せる如く、單獨數で剛情の氣を有し、内外共に和合を缺く象があつて、幾分運氣に故障を免れぬ傾きがあるが、よく天賦の能力によりて萬難を排し、功を遂げ幸ひを得るに至る吉運數とせられて居る。
- 八、吉運數五と三との相和で、堅固にして進取の氣を有し、忍耐克己よく萬難を排し、功を遂げ發達を得る運勢を現せる吉運數であるが、一面凶運數二と四との倍數で、幾分吉祥の中に相反く象があるからこの點には注意を要するとされて居る。
- 九、成數の終極の數で窮極を意味し、運氣の盡きたる象で、辛勞困難多く逆運不遇に終り、親子兄弟

- の縁薄く、短命災害を現す大凶運數とせられて居る。
- 十、九の窮極數が一步進みて、既に盡きて零となり滅亡を意味する數で、孤獨不遇の象を現し、凶災踵を次いで至る大凶運數とせられて居る。
- 十一、十と一との相和であり又八と三との相和であつて、陰陽新に來りて相和合する象を現して居る吉運數で、漸次發達して富貴榮榮を得る運勢があり、特に十の滅亡數に續く數であるから、養子となりて吉祥を得、又中興の祖となる運氣があるとせられて居る。
- 十二、凶運數四の倍數であり、又十と二との相和であつて、鰥寡孤獨の象を現し、意外の災厄に遭遇して逆境に終る凶運數とせられて居る。
- 十三、純陽の數にして十は零であるから吉運數三に同じく、智謀才略に富み、心身共に健全にして、よく萬難を排して功を遂げ名を揚げる吉運數とせられて居る。
- 十四、十は零で滅亡數であり、四は凶運數であるから、孤獨の象を現し、家族の縁薄く、運氣に浮沈烈しくして勞して功なき凶運數とせられて居る。
- 十五、吉運數三と五との相乘數で、目上の引立を受け、富貴榮達並び至り、立身出世を得る大吉運數とせられて居る。

十六、十は零であつて、六は吉運數一と五との相和であるから、凶より吉に還る數で、人の頭に立ち人望を得て大事大業を遂げ得る吉運數とせられて居るが、一面に二と四との倍數であるから、言動を慎しまざる時は運氣を破り、特に劍難の惧れがあるとせられて居る。

十七、十は零であるから七と同じく、單獨數で剛情短慮の氣を有し、他と相合を缺き無理に流れて失敗困難に陥る惧れがあるが、以上の缺點に注意すれば、晩年は成功を得る運勢があるとせられて居る。然し女子の姓名に適用することは、強きに過ぎて凶であるから避けるべきであるとせられて居る。

十八、十は零で八に同じく、又十三と五との相和であるから、權力智謀備り、意志強固にして難關を切抜けて發達成功を得る吉運數とせられて居る。然し慎しみを缺く時は、運氣を破り刑罰劍難の惧れがあるとせられて居る。

十九、十は零で九に同じく、又十七と二との相和で、大業を遂げんとする氣力あるも、内外和合を缺きて困難に陥り、故障多き凶運數とせられて居る。

二十、十と同じき運勢を現し、事志と齟齬して進退谷まり、辛勞困難に終る凶運數とせられて居る  
二十一、一及び十一と同じき運勢を現し、又三と七との倍數で、獨立心強く權威を有し、多少の辛勞

あるも必ず家を興し名を揚げ、富貴榮達を得る吉運數とせられて居る。

二十二、二十と二との凶運數の相和で、孤獨の象を現し、百事意の如く運ばずして、辛勞困苦に終る凶運數とせられて居る。

二十三、三及び十三と同じく、冲天の勢ひありて、卑賤より起りて人の頭に立ち、大事大業を遂げ富貴榮榮を得る吉運數とせられて居る。

二十四、四の倍數なるを以て多少の艱難を免れざるも、三と八との相乘數であるから、才略智謀に富み、よく萬難を排し、無形より有形を創造して富貴榮達を得るに至る吉運數とせられて居る。

二十五、五の自乘數であるから、剛情の氣を有し兎角他と平和を缺く傾きあるも、英敏なる才能を備へ、遂に大功を遂げ得る吉運數とせられて居り、姓名合畫數がこれに當る人は奇人が多いとされて居る。

二十六、二十二の凶運數に四の凶運數が加はつた數で、困難辛苦に終り、短命、災害を意味し、水底に沈める石塊の浮ぶ瀬なきが如く、一生平和幸福を得難き大凶惡數とせられて居る。

二十七、三の吉運數と九の凶運數の相乘數で、運氣中絶の象があるから、初運中運は盛大にして一時成功を見るも、晩運は失敗頓挫に終る凶運數とせられて居る。



二十八、四と七との相乗數であり、又九と十九との凶運數の相和であるから、遭難を意味し、意外の災害に罹り、刑罰を受くるが如き惧れのある凶運數とせられて居る。

二十九、純陽の單獨數で、十三と十六との吉數の相和であるから、智謀と勇氣とを藏し大志大業を遂げ得る無比の吉運數で、恰も順風に乗る船の如き運勢を現すとせられて居るが、女子には稍強きに失する傾きがあるとされて居る。

三十、十又は二十と同じく零に當る吉運數であるが、一面三及び十五の吉數の倍數に當つて居るから吉凶相半ばし、辛勞困難に終るか或は反對に大いに成功するか二様の運勢を有して居るとせられ、兎角吉凶定らず浮沈が多いとされて居る。

三十一、一又は十一、二十一と同じく吉運數で、意志堅固にして萬難に屈せず、大事大業を遂げ富貴榮達を得る運勢があるとせられて居る。

三十二、二十九と三との吉運數の相和であり、又三十一と一との吉運數の相和で、時を得れば破竹の勢ひを以て大功を遂げ得る吉運數であるが、凶運數四の倍數であるから、目上の助けを得ずして多少辛勞困難に遭遇する憂ひがあるとせられて居る。

三十三、吉運數三と十一との相乗數で、智謀果斷に富み、旭日東天に昇るが如く、漸次に發達して大

功を遂げ得る大吉運數とせられて居る。

三十四、十四と二十との凶運數の相和で、凶災相重なり、辛勞困難に終る大凶惡數とせられて居る。

三十五、五と七との相乗數であり、又十と二十五、二十と十五との相和であるから、吉運中に故障困難の象があり、智能優るゝも人の上に立つ權威を缺くとせられて居る。然し勉勵すれば文學技藝には上達の望みがあるとされて居る。

三十六、六の自乗數で、又二十七と九との相和であるから、一時は成功を得る象あるも終りを全うせず、中年後より晩年へかけては辛勞艱難に終る凶運數とせられて居る。

三十七、單獨の素數で、修養を缺く時は孤立に陥る惧れがあるが、三十二と五との吉運數の相和であるから、修養を積めば天賦の能力を發揮し、功を遂げ名を成す吉運數とせられて居る。

三十八、凶運數十九の倍數で、獨立の氣性に乏しく、人の上に立つ運氣を缺きて平凡に終るか、辛勞困難を免れざる凶運數とせられて居る。

三十九、吉運數三と十三との相乗數で、智謀才略に富み、権力、金運、長壽の三徳を備へ、富貴榮達を得て永く子孫に傳ふる大吉運數とせられて居る。

四十、五と八との相乗數で、智謀に富み氣力強く、功を遂ぐる運氣あるも、性質傲慢に流れて失敗災

害を招く惧れがあり、又凶運數四と十との相乘數であるから、凶災刑罰を招くが如き憂ひがあるとせられて居る。

四十一、純陽單獨の素數で、膽力才氣に富み、身體も健全で大業大功を遂げ、高名を揚げる吉運數とせられて居る。

四十二、六と七との相乘數で、才能技藝に優る、象あるも、二の倍數で辛勞困難を免れざる凶運數とせられて居る。然し一事に専心して進めば功を遂げ得る望みがあるとされて居る。

四十三、純陽單獨の素數で、物事に淡泊無頓着の象があり、學者技藝家として成功する運氣あるも、金運に乏しく貧困に終る憂ひがあるとせられて居る。

四十四、四の倍數であり又二の倍數であつて、家を破り身を亡す凶運數とせられて居る。然し一面に十一の倍數であるから、稀に非凡の偉人を出すか、後世に至りて名を揚ぐるものを出すことがあるとせられて居る。

四十五、五と九との相乘數であり又三と十五との相乘數で、波瀾烈しく吉凶相半ばし、一生涯中に死生の間を往來するが如き災厄に遭遇する象あるも、よく萬難を排して末には大志を遂げ大業を果す運勢を有するとせられて居る。

四十六、二の倍數で、精力に乏しく意志薄弱に流れ、辛苦艱難に終る凶運數で、甚しきは短命刑罰の惧れがあるとせられて居る。

四十七、純陽の單獨數で、天賦の智能を有し、他と一致和合する徳を備へ、大志大功を遂げ得る吉運數とせられて居る。

四十八、六と八との相乘數で、智謀才略に富み徳望を有し、人の上に立ちて富貴幸福を得る吉運數とせられて居る。

四十九、七の自乘數で吉凶定らず、波瀾浮沈多き運氣不定の數とせられて居る。

五十、十、二十、三十、四十等の零數と同じく、破壊凶惡の數なるも、五の倍數である爲に一度は幸運に會し、盛大を得ることがあるとせられて居る。

五十一、三と十七との相乘數で、一生涯中一度は盛運に會するも、晩運は衰微を免ぬとせられて居る。

五十二、無形より有形を造出す數で、人の至難とする所を遂げ、大志大功を達する吉運數なるも、山氣強く正道を失して邪道に走り、爲に運氣を破り身を亡すが如き惧れがあるから注意を要するとせられて居る。

五十三、五十と三との相和で、三と五との盛運を有し、一時は成功を得て物事の如くなる象あるも五十の凶運を藏するが故に、終りを全うせず故障災害を招きて、遂に失敗困難に終る凶運とせられて居る。

五十四、六と九との相乗数で、中年頃迄は幸運を得ることあるも、中年後は障害頻出して失敗憂苦に終る凶運とせられて居る。

五十五、吉運数十一と五との相乗数ではあるが、五十の凶運を藏するが爲に、吉凶相半はし一生涯波瀾多く、意志堅固なるものは成功を得るも、柔弱なる時は辛勞艱難に陥り、逆境に終る凶運とせられて居る。

五十六、凶運数二及び四の倍数で、百事故障齟齬を招き、殊に進取の氣性乏しき爲に、失敗困難に終る凶運とせられて居る。

五十七、三の吉運数と十九の凶運数との相乗数で、一生の中には大難に遭ひ非常に苦心することあるも、よくこれを凌ぎて幸運を克ち得、晩年は富貴幸福を得るに至る吉運とせられて居る。

五十八、吉運数二十九と凶運数二との相乗数で、一時は失敗困難に陥り、逆境に沈むことあるも、運氣を挽回して遂に功を遂げ名を成し、富貴榮達を得るに至る吉運とせられて居る。

五十九、凶運数五十と九との相和で、忍耐力を欠き勇氣に乏しく、失敗困難に終り、破産滅亡を招くに至る大凶運とせられて居る。

六十、零位の數で、意志定らず運氣不安動搖がちに流れ、百事功を遂げずして辛勞困難に終る凶運とせられて居る。

以上に於いて一より六十迄の數に就いて、一般に説かれて居る吉凶を説明したのであるが、六十以上の數は人の姓名又は物の名前に用ゐられることは殆んど稀であり、若しこれを知る必要のある場合でも、一から九迄の基數の吉凶を基礎とし、これに六十迄の數の説明を参照して、それに基いて考ふれば自然その吉凶が明かになることであるから、六十以上の數の吉凶はこれを省略することにす。借この數の吉凶を、人の姓名又は物の名前を選ぶ場合に、如何に適用するかと云ふに、例へば、姓名と易卦との配合を説明した所で、例として擧げて置いた、山川清と云ふ姓名に於いて、姓の山川は合せて六畫であるが、これは確定した數で如何ともすることが出来ないが、清と云ふ名は一般に用ゐられる字畫數では十一であるから吉祥であり、姓の六と合せると十七となつて大體吉運數に屬するか、山川清と命名したのは字畫數から見ると吉祥とするが如くである。次に物の名前に於いては、屋號の如く、その物の名前の下に、何々屋、何々商會、何々商店、何々銀行、何々會社、何々會、何々

病院等と確定した稱號が着いて居るもの、及び何々石嶮、何々齒磨、何々足袋等の如く、下に確定した品種の稱號が着いて居るものは、姓名とは反對に下に着いて居る稱號の字畫數を基礎として、それに附ける名前の字畫數及び稱號の字畫數と名前の字畫數との合畫數が、吉運數になるやうに選ばば良いのであり、又以上の如く下に確定した稱號の着いて居ないもの、名前は、その名前全體の字畫數が吉運數になるやうに選定すれば良いのであつて、この場合は至極簡單である。

### 第六章 文字の陰陽配置による姓名の吉凶

世上一般に行はれて居る姓名學では、文字の陰陽の配置による姓名の吉凶と云ふことが八釜しく云はれて居るが、その理由とする所は矢張り易に基いて居るのであつて、易經の中に「剛柔雜居して吉凶見るべし」とあるのにより、文字の陰陽配置の順逆によつて、姓名又は物の名前に吉凶禍福を生ずると云ふのである。而してその文字の陰陽を定めるのは、その文字の畫數が奇數であるか、偶數であるかによるのであつて、乃ち、一、三、五、七、九の如き奇數の畫數の文字は陽に屬し、二、四、六、八の如き偶數の畫數の文字は陰に屬するのである。而してこの陰陽の配置の現す吉凶は、特に身體の健康、生命の長短を暗示するとなし、○印を陽の符號とし、●印を陰の符號として、左に示すが如く陰陽の配置を分類して吉凶を別けて居るのである。然しこの陰陽の配置が如何なる理由によつて吉となり、又凶となるかと云ふ説明は殆んど加へられて居ないのであつて、その根據とする所が甚だ薄弱であり、且實際に當つて予が今日迄研究した結果に於いて見ても、統計上確實性が乏しいやうに考へるから、予は選名上文字の陰陽の配置と云ふことを餘り重要視せず、これ迄説明し來つた姓名の意義及び文字の選擇、易卦との配合、字畫數の吉凶の三項を考へて選定した上で、參考としてなる



以上の配置も天地の和合を得ざる配列で、初めは身體健康なるも漸次病弱となりて短命に終り、運命も發展の望みがない凶悪の配置であるとせられて居る。

以上に述べたる所によれば、陰陽配置の吉凶は主として人の吉凶運勢に關して居るが、これは一般姓名學では、陰陽の配置を姓名の吉凶に結付けて説いて居るからであるが、物の名前に適用する場合にも、この吉凶を参照して考ふれば良いのである。

### 第七章 五氣の配合による各姓の吉凶

五氣の配合による姓名の吉凶と云ふことも、世上一般に行はれて居る姓名學では、文字の陰陽の配置と云ふことと同様に、八釜しく云はれて居る條項であつて、その根據とする所は五行説に基つて居り、各の文字の音によつてそれ／＼その文字の性を木火土金水の五種に分類し、その配合の相生相剋如何によつて、性格の長短、活動力の有無、病氣等の象を現し來り、従つて姓名の文字の五氣の配合如何が、その人の運命を支配することになると云ふのであるが、この五氣の配合による吉凶も、前章に於いて説明した陰陽の配置による吉凶と同じく、主として人の運命に對する吉凶を説いて居るのであるが、物の名前に對してはこれを参照して適用すれば良いのである。以下この五氣の配合と云ふことに就いて、一般に行はれて居る、各文字の五氣の定め方及びその配合の吉凶を説明した上で、これに對する予の意見を述べることにする。

#### 第一節 各文字の五氣の定め方

各文字の五氣の定め方は、その各の文字の音を、喉音、牙音、齒音、舌音、唇音の五種に分類し

その何れに屬するかによつて定めるのであるのであつて、先づ五十音がこの何れの所屬に屬するかと云ふことを説明する必要があるから、左にこれを分類して説明することにする。

アイウエオ

喉音(土性)

ワキウエヲ

サシスセソ

齒音(金性)

ヤイユエヨ

ザジズゼゾ

齒音(金性)

ハヒフヘホ

唇音(水性)

タチツテト

舌音(火性)

バビブベボ

ダヂヅデド

舌音(火性)

カキクケコ

牙音(木性)

マミムメモ

ナニスネノ

舌音(火性)

ガギグゲゴ

牙音(木性)

ラリルレロ

ラリルレロ

舌音(火性)

右の如く五十音を五音に分類して五氣を定めるのであるが、その理由とする所は、喉音は咽喉より出づる自然の音であつて、五音の母であるから、五行の中央である土性に配し、牙音は勢ひ強く生氣を有するから、東方乃ち春の木性に配し、舌音は強烈で火の燃えるが如き氣を有して居るから、南方乃ち夏の火性に配し、齒音はその勢ひ弱く將に絶えんとして悲痛の氣を有して居るから、西方乃ち秋の金性に配し、唇音は輕浮にしてその音が軟弱であるから、北方乃ち冬の水性に配すると云ふのである。それでこれを文字に配するのは如何なる法式によるかと云ふに、その各の文字の配合が

吉とせられ、又如何なる配合が凶とせられて居るか云ふに、姓名學では一般の五行説に於いて、五氣の相生なるを吉とし、相剋なるを凶とするとは反對で、相剋なるもの、例へば、金の姓に配するに火火又は木木の名を以てするが如き配合を第一に吉とし、相生なるもの、例へば、金の姓に配するに水水又は土土の名を以てするが如き配合を第二に吉とし、同じ五氣が重なつて居るもの、例へば姓名の文字の性が全部金金金金、又は土土土土と云ふが如き配合となれるもの、及び五氣の錯綜せるもの、例へば、姓名の文字の性が金木火水或は土木金火と云ふが如く入交れるものを凶とするのである。その理由とする所は、相剋なる配合は愛憎相攻める力によつて活動力を喚起して幸運を齎らすから最も吉とするのである。然るに相生なる配合は相親比して温和で吉ではあるが、活動力弱くして進取の氣を缺く象があるから、相剋の配合に劣るとするのである。而して同じ五氣の重なつた配合は、一方に偏曲する象があつて凶であり、錯綜せる配合は、五色が人目を幻惑するが如く又雜音が人の耳を聳せしむるが如く、人の精神を錯亂して安定を缺くから凶であると云ふのである。

五氣の配合の吉凶及びその理由とする所は上述せるが如くであるが、今これを一目にして解り易からしむる爲に吉凶を分類して示して置くことにする。而して五氣の配合の吉凶は、その各の性情が基となり、それが二つ以上組合されて生ずるのであるから、順序として先づ一般に説かれて居る五

氣の各の性情及びその二つが組合された場合に生ずるとせられて居る性情を説明して、次に色々な配合の吉凶を説明しやう。

木性 陽に屬し、理性に富み、理屈に傾く惧れがあるが快活であるとせられて居る。

火性 陰に屬し、感情鋭く過激に流れる傾きがあつて、稍酷薄の氣を帯んで居るとせられて居る。

土性 陰陽に兩屬し、濃厚沈着の氣あるも、疑心深き缺點があるとせられて居る。

金性 陰に屬し、外面沈着なれども内心に剛毅殺伐の氣を含んで居るとせられて居る。

水性 陽に屬し、理性に富み、外面は沈着なれども嫉妬の氣深き象があるとせられて居る。

五氣の單獨の性情は上述の如くであるが、二個の組合せより生ずる性情は左の如くである。

木木 苦情あるも理性に富み、才略ありて快活であるとせられて居る。

火火 堅固にして艱難に屈せず、熱烈の氣性あるも稍酷薄に流れる傾きがあるとせられて居る。

土土 濃厚沈着なれども疑心深き傾きがあるとせられて居る。

金金 外面沈着にして内心に剛毅の氣を藏し、争鬪的の傾向があるとせられて居る。

水水 理性に富み、外面沈着なれども嫉妬心の深い傾きがあるとせられて居る。

木火 理性に富むも、一面に多情の所があり、疑心深く短氣の性があるとせられて居る。

木土 慈愛心深く濃厚であるとせられて居る。

土金 濃厚、慈愛、謙讓の氣を有するとせられて居る。

木金 活動力強く義侠心に富むとせられて居る。

土水 濃厚にして才略に富むも、活動力に乏しい象があるとせられて居る。

木土 濃厚の氣を有するも活動力に乏しい象があるとせられて居る。

火金 物事に熱心で氣力もあり、活動力に富んで居るが、性急に流れ慾心深き缺點が有とせられて居る。

火水 熱烈剛氣にして活動力に富むも、粗暴慘酷に流れる缺點があるとせられて居る。

土水 外面沈着なれども、内に反逆心を藏し、片意地に流れる缺點があるとせられて居る。

金水 才力ありて活動心に富むも、艱難に遭遇する象があるとせられて居る。

### 五氣配合の吉凶分類

金金火火、水水火火、木木水水、火火木木、土土火火、金金土土、土土木木、土土水水、金金木木  
以上の如き配合は、男女共に剛氣又は濃厚にして才力があり、決斷心に富みて難關に屈せず、目的を貫徹して幸運を克ち得る吉祥の配合とせられて居る。



火金火金、金水金水、金木金木、水火水火、火木火木、火土火土、水木水木、水土水土、土金土金、土木土木、火金火金、金水金水、金木金木、水火水火、火木火木、火土火土、火土火土、

水木水木、水土水土、土金土金、土木土木  
以上の如き配合は、智略を有し勇氣に富み且忍耐心強くして、よく萬難を排して大功大業を遂げ得る吉祥なる配合とせられて居る。以上の配合を上下に轉換せる場合も同様である。

火金火金、金木金水、水金金水、木金金木、金火火金、火水水火、火土土火、火木木火、土金土金、土木土木、水木水木、水火水火、土水水土、金水水金、水土土水、土火火土、土火木土、金木火金、木火水木、水火土水、火金木金、土水水土、火金土火、木土水木

以上の如き配合は、氣品高尚にして意志も強く、物事を整理する心に富み、終始一貫して功を遂げ目的を達し得る吉祥なる配合とせられて居る。

水火金木、木火土水、木火金水、金木土火、水金土火、火木水金、水火木金、水金土火、土金水火、金木水火、火金水土、火金土水、火木金火、

以上の如き配合は、大體吉祥に屬する配合なるも、一徹短慮に流れ、又は物事に熱心を缺き怯懦に陥る惧れがあるとせられて居る。

金金火火、水水水木、火火火水、土土土木、木木木火、火金金金、水水水火、水火火火、木土土土、火木木木、

以上の如き配合は、一方に偏して不和の象を現し、運氣定らず凶惡の配合とせられて居る。

木木木木、火火火火、土土土土、金金金金、水水水水、

以上の如き配合は、辛苦艱難に處し、災害多き凶惡の配合とせられて居る。

木火土金水、木金火水土、土木金水火、

以上の如き配合は、五氣錯綜せる配合であつて、心定らず運氣安定を缺き、災害を招き辛苦艱難に終る凶惡なる配合とせられて居る。

以上に於いて説明したる、五氣配合の吉凶は、各その一例を示したるもので、この他に色々な配合が組立てられるのであるが、それ等を全般に亘つて説明することは、徒に煩雜に流れる計りであるからこれを省略することにすが、讀者に於いて五氣單獨の性情及び二個の組合せより生ずる性情を基礎とし、前掲の例を参照して考へらるれば、自ら明にせられることが出来るのである。

次にこの五氣を人體の内臓及び五官等に配して、これに基づきて人の姓名よりその人の犯され易き病氣を豫知することが説かれて居るから、左に参考として掲げて置く。

木性 胃腸及び肝臓に配し、これ等の部位の病氣に犯され易いとせられて居る。  
 火性 眼、腦、及び心臓に配し、これ等の病氣に犯され易いとせられて居る。  
 土性 筋肉、骨、下腹部、子宮、生殖器、腦に配し、これ等の病氣に犯され易いとせられて居る。  
 金性 呼吸器、眼、腦、腸に配し、これ等の病氣に犯され易いとせられて居る。  
 水性 下腹部、子宮、腎臓、膀胱、神經、痔に配し、これ等の病氣に犯され易いとせられて居る。  
 以上は五氣の單獨性に就いて、各の配せられたる部位及び犯され易いとせられて居る病氣を説明したのであるが、これを適用して人の姓名が五氣の如何なる配合に組合せられて居るかによつて、その人の犯され易い病氣を豫知するのである。例へば、木火火の配合になつて居れば、木性と火性と單獨性が現す所の、胃腸、肝臓、眼、腦、心臓等の病氣に犯され易く、金生水の配合になつて居れば、同じ理によつて、呼吸器、眼、腦、腸、下腹部、子宮、腎臓、膀胱、神經、痔等の病氣に犯され易いと云ふのである。

### 第三節 五氣の配合と姓名の吉凶に關する予の見解

五氣の配合と姓合の吉凶との關係に就いての予の見解は、五音乃ち、喉音、唇音、齒音、舌音、牙

音によつて、各の文字を五性に分類したる根據、及び五氣配合の吉凶の基礎となつて居る。木火土金水の各の單獨の性情を定めた理由は、殆んど一般の姓名學の書物には説明されて居らず、稀にこれを説明したものがあつても、その根據とし理由とする所が甚だ薄弱であり、特に五氣特有の病氣の如きに至つては、牽強附會の甚しいものであると考へるし、殊にこの五氣の配合はその組合せの數が無數であつて、一々これを考へて居つては、殆んど選名が困難に終るやうな結果を見て、煩雜極りなきものであるから、予は選名上五氣の配合と云ふことは、前章に於いて説明した陰陽の配置と同じく、餘り重要視しないのであつて、單に選名上の參考として、なるべく吉祥なる配合を選ぶ程度に止め、これに囚れるやうなことは避けて居るのである。

### 第八章 天地の配合による姓名の吉凶

以上各章に於いて説明したる、選名上重要視せられて居る條項の他に、天地の配合の吉凶と稱せられる條項があるが、これも根據とする所は、易經に「天尊く地卑くして乾坤定まる。卑高以て陳して貴賤位し、動靜常ありて剛柔斷まる」と説いてあるのに基づき、人の姓名の姓を天と見、名を地と見て、天とせる姓の頭字の畫數が、地とせる名の頭字の畫數より多いのが、天地の權衡を得て吉であるとし、これと反對に名の頭字の畫數が、姓の頭字の畫數より多いものは、天地の權衡を失して凶とするのである。又同じ理に基づいて、一、二、三、四、五の如く姓名の上の字より下の字になる程多くなるを凶とし、反對に五、四、三、二、一の如く順次下になる程少くなるのを吉として居る。而してこの文字の畫數を數へる場合には、十位は零として切捨てるのであつて、例へば、十一、二十一、十五、二十五等の畫數の字は、十、二十は切捨て、單に一、二、五、六の數として數へるのである。倍この天地の配合と云ふことも、以上に説明した理由に他ならないのであつて、大した深い根據を認めないから、予は選名上餘りこれを重要視せず、單に參考として適用する程度に止めて居るが、讀者の參考迄に一般に用ゐられて居る、天地の配合の吉なるものと凶なるものとを掲げて置く。

五五四三、五四一二、四五二三、六一二二、九六三四、八六三二、四九二三、六六五四、八八七

六、八五二三、四三二三、二二二二、四四三二、九八七八、五三二二、五九三四

以上の如き配合は、天地の權衡を得て非常に吉祥なる配合で、親近相和し平安幸福なる運命を得るとせられて居る。

四六九二、二五六三、四五五二、三三六五、三三四三、五四六三、一七二三、五六七四、一二三

二、三三五三、七八八六、七四八四、

以上の如き配合は、天地の權衡を失して凶惡なる配合で、色々な災害を招き易いとせられて居る。

又、三九三九、五七五七、八七八七等の如く姓と名との畫數が同じであるもの及び、〇〇一〇、〇五〇〇、〇〇〇三と云ふが如き配合となれるものは最も凶惡なる配合であつて、癡疾、短命、刑罰等を招く憂ひがあり、逆運不幸に陥るとせられて居る。以上に掲げた例は姓名が四字よりなれるものによつて居るが、四字以上のもの又は四字以下のものでも、この例を参照して考へれば自ら明かにすることが出来る。

次にこれは天地の配合と云ふ條項に關係したことではないが次手であるから一言して置く。それは一部の姓名判斷家に、姓名を選定する場合には、その人の生年の干支に適合した文字を選びて命名

すべきであると主張する人がある。その説は、例へば甲子年生れの人、甲及び子の性情も享けて生れて居るから、これに適合した五氣の性の文字乃ち、甲は木性であるから、これと相生である火性又は水性の文字を選び、子は水性であるから、これと相生である金性又は木性の字を選ぶべきであると云ふのである。予はこの説にも大して深い根拠を認めないから、餘り重要視しないのである。

### 第九章 総合的に見たる吉名選定法

以上各章に亘つて、吉名選定に關する予の重要にして意義があると信する條項と、世間一般に稱へられて居る主なる説とを擧げて、これに説明を加へて來たのであるから、讀者に於いてこれを熟讀せらるれば、如何にすれば吉名を選び得て、自己の運勢を開き幸福を克ち得ることが出来るかと云ふことは、自ら明かになる譯であるが、説明が各條項に別部分的になつて居るから、煩雜に流れて大綱を掴み難い惧れがあると思ふから、この章に於いて、吉名選定上に於ける予の意見の大綱を述べて、讀者に明確なる觀念を與へたいと思ふのである。

予は吉名を選ぶには、前述せる理由によつて人の姓名又は物の名前の意義及び文字の選擇を第一に重要なる條項と信じ、第二に易卦との配合、第三に文字の畫數を重んずるものであるから、姓名又は物の名前を選ぶ場合には、先づその意義と文字の善惡を考へて、次に、易卦との配合及び文字の畫數と云ふことを考へて、なるべくこの三條項に適合するやうな名前を選び、その上で參考として、陰陽の配置、五氣の配合等の條項もなるべく吉祥になるやうに命名したならば、選名上理想的であると考へるのである。然し斯くの如き種々なる條項に都合良く適合するやうな名前は、實際に當つては容易